静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第165集

宮竹野際遺跡

平成16年度　(都)中郡福塚線県単独街路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第165集

宮竹野際遺跡

平成16年度　(都)中郡福塚線県単独街路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

本書は、中部福塚線県単独街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

宮竹町周辺は、旧国道一号線と笠井街道が交差し、ＪＲ東海道本線天竜川駅や東名高速道路浜松インターチェンジに隣接する交通の要所であり、近年、浜松市の大商業地として発達してきた。このため、大規模な商業施設やマンションの建設に伴う発掘調査が浜松市教育委員会により過去４回行われ、弥生の水田跡・古代の掘立柱建物跡・中世の建物跡や井戸が発見されている。また、円面硯・陶馬・布目瓦など古代の官衙が近くにあった可能性を示す遺物も出土している。

この度、当研究所では、商業地化によって交通渋滞が著しくなった県道中部福塚線の拡幅工事に伴って、宮竹野際遺跡の調査を行った。道路拡幅部の細長い調査区となったため、宮竹野際遺跡の東端を明らかにしたに過ぎないが、今回の調査で、次の二つの成果を得ることができた。

一、調査区北部より９世紀前半の墨書土器や円面硯、風字硯、獣足付土器、陶馬、布目瓦などが多数出土した。これは、調査区北方に古代の官衙関連施設があった可能性をうかがわせる貴重な資料である。

二、浜松地域では初めてとなる古代条里型水田と推定する大・小畦畔を検出することができた。また、その大畦畔内より祭祀に使われたと考えられる土器が出土したことから、浜松地域でも遅くとも８世紀中頃より条里型水田の開墾が行われ、経営されていた可能性が大きくなった。

今後、浜松地域の条里型水田開拓・経営の歴史や浜松市東部の長田郡（長上郡）の歴史を考えるうえで今回の調査資料が有効に活用されることを願う次第である。

今回の調査区は、和田町字三反田に位置するが、これまで、４回にわたって浜松市教育委員会が発掘調査を行ってきた宮竹町字野際・中島の「宮竹野際遺跡」の一部であることから書名に「宮竹野際遺跡」と記している。

今回の調査は、市街地での発掘調査であり、進入路や駐車場・路線バス停留所を度々移動させていただくなど、周辺の皆様には大変な御迷惑をおかけすることとなった。幸いにも無事調査を終了できたことは、地域住民の皆様の御協力なしには考えられなかったことであり、改めて皆様にお礼申し上げたい。

本遺跡の調査及び本書の作成にあたっては、静岡県浜松土木事務所、静岡県教育委員会、浜松市教育委員会をはじめとする関係諸機関各位に御理解と御協力とをいただいた。また、調査にあたっては、多くの皆様に御指導・御助言をいただいた。ここに厚くお礼申し上げたい。最後に、交通量の多い道路脇調査区で、湧水と寒さに悩まされながらの現地調査や細かい土器片が多くを占める遺物の接合実測など、根気のいる資料整理作業に関わった多くの方々の労をねぎらいたい。

平成18年１月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　忠

例　　言

1．本書は静岡県浜松市宮竹町に所在する宮竹野際遺跡の報告書である。
2．調査は（都）中部横断線県単独街路整備事業工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県浜松土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、浜松市教育委員会の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3．現地調査は、平成16年12月から平成17年５月まで実施した。
　整理作業は、平成17年６月から平成18年１月まで実施した。
4．調査体制は次のとおりである。
　平成16年度（現地調査）
　　所長　斎藤　忠　　副所長　飯田英夫　　常務理事兼総務部長　平松公夫
　　総務課長　鎌田英巳　　総務課副主任　鈴木韻生
　　調査研究部長　山本昇平　　調査研究部次長　栗野克己・佐野五十三・中嶋郁夫
　　調査研究三課長　足立順司　　調査研究員　白鳥直樹・中村雅之
　平成17年度（現地調査・整理作業）
　　所長　斎藤　忠　　常務理事兼総務部長　平松公夫
　　総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎　　総務課主事　望月高史
　　調査研究部長　石川素久　　調査研究部次長　栗野克己・佐野五十三・中嶋郁夫
　　調査研究二課長　佐野五十三　　調査研究員　大林元・中村雅之
5．基準点測量・基準杭打設・空中写真測量・空中写真撮影と現地実測図の一部は株式会社フジヤマに委託した。
6．自然科学分析は㈱式会社古環境研究所に委託し、その結果を付編に掲載した。
7．金属製品・木製品等の保存処理は当研究所保存処理室（室長西尾太加二）が実施した。遺物写真撮影は当研究所写真室担当職員が行った。
8．発掘調査の資料は、静岡県教育委員会文化課が保管する。
9．本書の執筆は、調査員中村雅之、技術員大野勝美が行い、分担は目次に示した。
10．本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡　　例

1．調査区は、道路拡幅部であるため、南西から北東に向けて細長いものであったため、建設予定道路の主軸方向を基軸として、調査区の形状に合わせて任意にグリッド方眼を設定した。グリッドは、一辺10mとし、調査区の短辺の中央を境に道路側をA、住宅地側をBとするとともに、南西より北東に向けて１～10のグリッドを設定した。
2．調査区の全体図には、国土座標数値も表記しているが、この座標軸は世界測地系を用いており、図中の方位表示はこの方位（座標北）である。
3．本書で使用した遺構の略号は次のとおりである。

ＳＡ　杭列	ＳＤ　溝	ＳＦ　土坑	ＳＫ　畦畔
ＳＰ　小坑	ＳＲ　河川流路	ＳＸ　大型土坑	

目　　次

序
例言
凡例

第Ⅰ章　調査に至る経緯（中村）…… 1
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境（中村）…… 1
　第1節　地理的環境 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の方法と経過（中村）…… 7
　第1節　調査の方法 …… 7
　第2節　調査の経過 …… 8
　　1．現地調査 …… 8
　　2．整理作業 …… 10
第Ⅳ章　調査の成果（大野）…… 11
　第1節　基本土層と調査面 …… 11
　第2節　遺構の概要 …… 12
　第3節　遺　構 …… 14
　　1．奈良時代の遺構（8世紀）…… 14
　　2．平安時代の遺構（9世紀～12世紀）…… 20
　　3．鎌倉時代の遺構（13世紀～）…… 26
　　4．その他の遺構 …… 28
　第4節　遺　物 …… 30
　　・遺物実測図
　　・遺物観察表
第Ⅴ章　まとめ …… 56
　1．特殊遺物の性格について（大野）…… 56
　2．条里型水田について（中村）…… 60

あとがき　引用・参考文献 …… 62
付　　編　自然科学分析結果（株式会社　古環境研究所）…… 63
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　宮竹野際遺跡周辺の土地利用図（昭和12年） … 3
第3図　周辺の景観 …… 5
第4図　グリッド及びグリッド杭配置図 …… 7
第5図　基本土層と北端部土層 …… 11
第6図　第1面・第2面全体図及び東壁土層図 …… 13
第7図　ＳＤ01土器出土状態図 …… 15
第8図　条里型水田施定図 …… 17
第9図　北端部変遷図 …… 19
第10図　ＳＲ01土器出土状態図 …… 21
第11図　古代面（第2面）全体図 …… 23
第12図　遺構土層図・断面図① …… 25
第13図　遺構土層図・断面図② …… 27
第14図　中世以降面（第1面）全体図 …… 29
第15図　遺物実測図（弥生・古墳時代の土器・
　　遺構出土①） …… 31
第16図　遺物実測図（遺構出土②） …… 33
第17図　遺物実測図（古代水田出土） …… 35
第18図　遺物実測図（ＳＲ01出土①） …… 37
第19図　遺物実測図（ＳＲ01出土②） …… 39
第20図　遺物実測図（中世水田出土南半） …… 41
第21図　遺物実測図（中世水田出土北半①） …… 43
第22図　遺物実測図（中世水田出土北半②） …… 45
第23図　遺物実測図（中世水田出土北半③・
　　白磁・青磁） …… 47
第24図　宮竹野際遺跡周辺の特殊文字集成図 …… 48
第25図　遺物実測図（墨書土器・刻書土器） …… 49
第26図　遺物実測図（硯・転用硯・獣足・布目瓦） …… 51
第27図　遺物実測図（手づくね土器・土製品・
　　土錘・土製支脚・他） …… 53
第28図　宮竹野際遺跡全体図（古代～中世） …… 59
第29図　天竜川平野西岸の表層条里分布図 …… 61

挿表目次

表1　周辺の遺跡地名表 …… 5
表2　調査工程表 …… 10
表3　基本土層と北端部土層 …… 12
表4　出土遺物観察表1 …… 32
表5　出土遺物観察表2 …… 34
表6　出土遺物観察表3 …… 38
表7　出土遺物観察表4 …… 40
表8　出土遺物観察表5 …… 44
表9　出土遺物観察表6 …… 46
表10　墨書・刻書土器観察表 …… 50
表11　硯・転用硯観察表 …… 52
表12　土製破片数量表 …… 54
表13　輸入陶磁器・獣足・他観察表 …… 55
表14　祝 天竜川以西出土地一覧表 …… 57
表15　獣足 天竜川以西出土地一覧表 …… 57
表16　布目瓦 天竜川以西出土地一覧表 …… 57

図版目次

図版1　宮竹野際遺跡全景（南東より）
図版2　1区・2区第1面（合成）、2区・3区・4区第2面（合成）
図版3　ＳＸ07土層（南東より）、ＳＫ01土層（東壁）
図版4　ＳＫ02完掘状況（南西より）、ＳＫ02出土土器、ＳＫ02土器出土状況（北西より）
図版5　ＳＤ01土器出土状況（北東より）、ＳＤ01出土土器
図版6　古代水田出土土器、ＳＲ01出土土器、123、125、155
図版7　円面硯・二面風字硯、墨痕・朱墨痕付土器（転用硯）、布目瓦
図版8　手づくね土器、陶馬・土馬、墨書土器（350）、刻書土器（370）、白磁・青磁
図版9　1区第1面、ＳＦ09完掘状況（東より）、ＳＸ05・ＳＸ07完掘状況（南西より）、
　　ＳＸ02完掘状況（南東より）、ＳＡ02・ＳＡ03完掘状況（北東より）
図版10　2区第1面、ＳＦ06土層（南西より）、ＳＦ07土器出土状況（南東より）、ＳＤ04完掘状況（南東より）
図版11　ＳＸ10・ＳＸ09・ＳＸ08・ＳＦ07（北東より）、ＳＸ08完掘状況（南西より）、ＳＸ13土層（北西より）、
　　ＳＸ14完掘状況（南東より）、ＳＸ18・ＳＸ19・ＳＸ17（北より）
図版12　ＳＸ20土器出土状況（北西より）、鉄製品（435）出土状況、2区第2面、ＳＫ06完掘状況（東より）、
　　ＳＫ02土層（南より）
図版13　3区・4区第2面、ＳＫ02完掘状況（南より）、ＳＸ21完掘状況（南西より）、陶馬（412）出土状況、
　　ＳＦ01完掘状況（北東より）
図版14　ＳＫ01完掘状況（東より）、ＳＸ23完掘状況（南西より）、ＳＫ03・ＳＤ02完掘状況（南東より）、
　　ＳＲ01完掘状況（北東より）、ＳＫ03・ＳＫ09・ＳＫ10土層（南西より）、ＳＲ01二面風字硯出土状況（北より）
図版15　北端部第4面完掘状況（南東より）、ＳＤ01土器出土状況（南西より）、ＳＰ04土器出土状況（南東より）、
　　鼻环（2）出土状況（南東より）
図版16　出土遺物1
図版17　出土遺物2
図版18　出土遺物3
図版19　出土遺物4
図版20　出土遺物5
図版21　出土遺物6
図版22　出土遺物7
図版23　出土遺物8
図版24　出土遺物9

第Ⅰ章　調査に至る経緯

本書で報告する宮竹野際遺跡は、浜松市東部の宮竹・和田町に所在する。宮竹町周辺は、東名高速道路浜松インターチェンジに隣接し、旧国道一号線と笠井街道が交差する交通の要所で、浜松市の大商業地として発展してきた。近年の大規模商業施設の建設は、県道中郡福塚線宮竹交差点の慢性的な交通渋滞を引き起こし、市民より交差点周辺の道路拡幅工事が望まれていた。このため、静岡県浜松土木事務所は、県道中郡福塚線を東側（和田町側）に拡幅する工事に入った。工事を始めると道路西側宮竹町内で過去に調査が行われた宮竹野際遺跡の一部である可能性が出てきた。このため、浜松土木事務所は工事を中止し、静岡県教育委員会文化課と協議を行い、文化課が遺路工事を委託されていた（株）檜松鈴木組の協力を得て試掘・確認調査を行った。この結果、宮竹野際遺跡の一部であることが出土遺物により判明し、緊急の本調査を行うことになった。本調査は、静岡県浜松土木事務所の委託により、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成16年12月から平成17年5月にかけて行った。

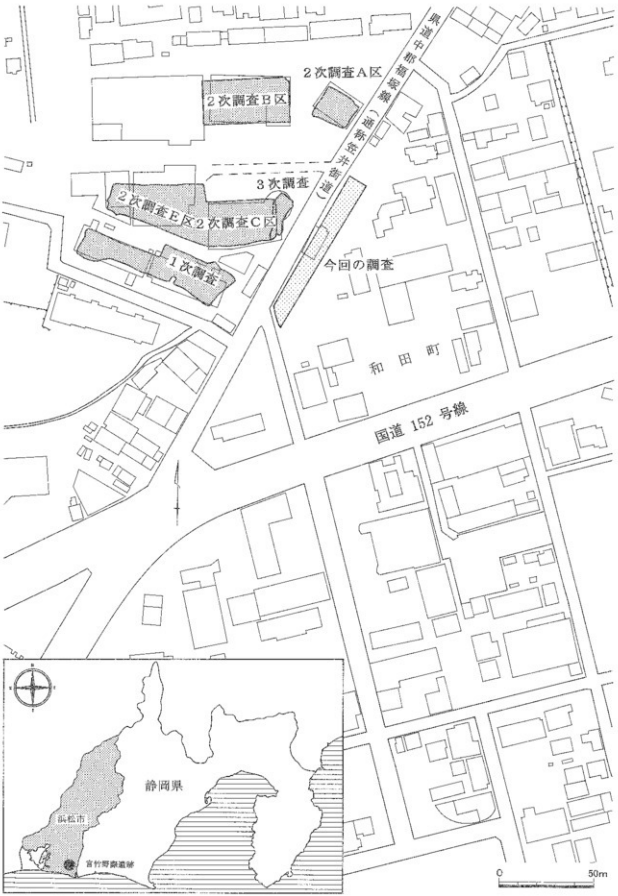
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

宮竹野際遺跡は、浜松市の東部、旧国道1号線と浜松から笠井・浜北を通り北遠地域を結ぶ主要道路中部福塚線（通称笠井街道）の交差する宮竹交差点に位置し、東名高速道路浜松インターチェンジや東海道本線天竜川駅に隣接している。このため、この地域は浜松市の物流の中心地として、以前は大規模な繊維・機械工場が集中していたが、繊維産業の衰退や工場の移転に伴い、その跡地に大規模商業施設や流通施設・大規模マンション等の建設が進み浜松市の一大商業地域として発展を続けている。

地形的には、天竜川が運んだ土砂が堆積して作られた沖積平野西岸の微高地（宮竹微高地）に位置する。天竜川は、長野県諏訪湖を源に山間部を流れ、静岡県浜松市（天竜市）西鹿島から平野部に出ると、急に川幅を広げ土砂を堆積させ扇状地形の平野を作り上げるとともに、河口には三角州をつくり、太平洋へと流れている。現在の天竜川は、大規模な堤防が作られ流路が1本になっているが、以前は、三方原台地と磐田原台地の間で氾濫を繰り返し、幾筋かの流路を主流が入れ変わり流れていたと考えられる。『続日本紀』によると古代の天竜川は「龍玉河」と呼ばれ、宮竹野際遺跡のすぐ東に流れる安間川あたりを流れていたが、12世紀後半の『遠江国池田荘立券状』によると、天竜川の本流が磐田原台地近くを流れていたことがわかる。このようにして、天竜川の流路が変化し氾濫が起こることによって、沖積平野の旧地形は、微高地と流路が入り組んだ地形となっていき、その一つの微高地が、本遺跡のある宮竹微高地であったと考えられる。この宮竹微高地は、北側に広い低湿地（天王低地）が広がり、西に、自然堤防を挟んで馬込川が流れていた。南の低湿地には旧河川が流れ、その南に「山の神遺跡」のある永田微高地があり、東は安間川が網状に流れていた。

今回の調査区は、大規模な埋め立て前には、第2図からわかるように、宮竹微高地の南東端に位置し、浜松市教育委員会が行った1次～3次調査区（小字「野際」）や4次調査区（小字「中島」）のように、島畑が多い地形とは異なり、水田の多い小字「三反田」に含まれ、旧河川が流れていたと考えられる。



第1図　遺跡位置図（平成12年浜松市都市計画白地図をトレースして加筆）

第２図　宮竹野際遺跡周辺の土地利用図（昭和12年）

『蒲村土地宝典』（昭和12年）『和田村土地宝典』（昭和12年）より作図

第２節　歴史的環境

１．縄文時代

縄文時代の浜松地域の人々は、食材を手に入れやすい平野部と山間部の境に定住し、狩猟と採集の生活を行っていたことが、中通遺跡（旧浜北市）、梶塚遺跡などから推測できる。この人々が、天竜川沖積平野西岸の低地に進出し始めたのは、宮竹野際遺跡４次調査（1996年）で「突帯紋土器」が出土したことから、縄文時代晩期ころであると考えられる。

２．弥生時代

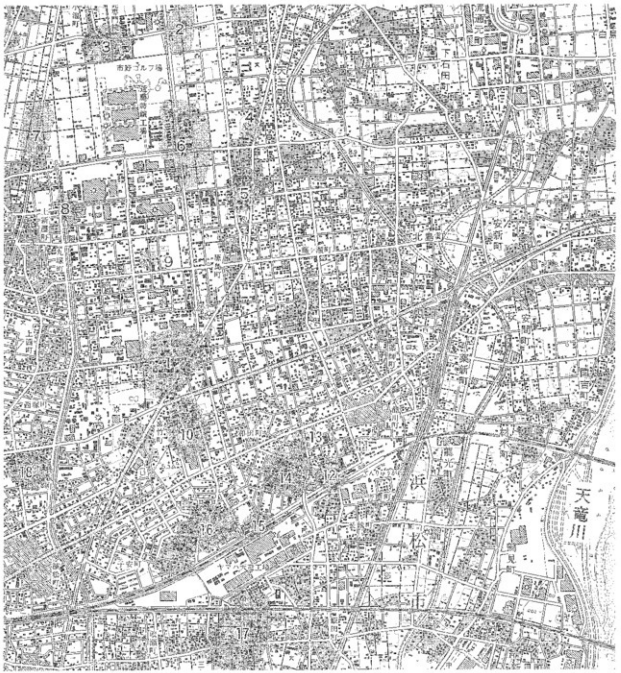
浜松地域においては、海退と海進により三方原台地南部や天竜川沖積平野に泥土の堆積が進み水田耕作に適した土地になると人々の進出が盛んになる。宮竹野際遺跡周辺では、将監名遺跡（18）で弥生時代中期から後期にかけての環濠を伴う集落と方形周溝墓が発見されたり、宮竹野際遺跡２次調査（１）で水田が発見されたりしている。また、田見台遺跡（２）、箕輪遺跡（３）、天王町村東遺跡（４）、大蒲村東Ⅰ遺跡（15）などから弥生時代中期の土器が出土している。後期になると山の神遺跡（10）、松東遺跡（11）、田見台遺跡（２）、天王中野遺跡（５）、飯田遺跡群の寺西遺跡（17）で環濠と考えられる溝や住居跡が発見されている。これらのことから、弥生時代になると宮竹野際遺跡周辺においても水田開発が行われるようになり、中期には、濠を廻らせた集落が形成されるようになった。後期になると人口の増加に伴い集落や水田が拡大していったと考えられる。

３．古墳時代

古墳時代になると、大きな権力を持った首長が広い地域を支配し、巨大な古墳が造られるようになる。天竜川沖積平野西岸でもこの地域を支配していた首長の墓と言われる赤門上古墳（旧浜北市）が存在する。中期になると、大和王権の影響を受けた首長による支配へと変化していく。天竜川西岸下流域でも、千人塚古墳（有玉西町）被葬者を首長とした支配が行われたと言われている。後期になると、浜松でも鉄製農具の普及など先進の農業技術が広まり農業生産が高まるとともに有力な農民が出現し小規模な古墳を造るようになる。天竜川沖積平野西岸でも三方原台地縁辺部に群集墳が数多く発見されている。また天竜川の自然堤防上にも豊町の蛭子森古墳など数基の古墳が単独で造られている。このように多くの古墳が築造されたことから、天竜川沖積平野西岸にも多くの集落が繁栄していたと考えられる。宮竹野際遺跡周辺では、天王中野遺跡（５）で掘立柱建物跡が、大蒲村東Ⅱ遺跡（16）で竪穴住居が、箕輪遺跡（３）で水田が発見されるとともに山の神遺跡（10）、越前遺跡（13）飯田遺跡群（17）大蒲村東遺跡（15・16）などからこの時代の土器が出土している。また、宮竹野際遺跡でも１次調査区と今回の調査区で、この時代の土器が出土した。

４．奈良時代・平安時代前期

浜松地域では、７世紀終わりから寝子遺跡・城山遺跡、井通遺跡など官衙的性格を持った遺跡や木船遺跡（14）など寺院と推測される遺跡がみられるようになることから、この地域も律令制による中央集権国家体制に組み込まれていったと考えられる。天竜川沖積平野周辺は、遠江国とされ、浜名、敷智、引佐、麁玉・長田（709年長上と長下に分割）、石田（磐田と山香に分割）、周智、佐益（佐野、722年山名、佐野に分割）、紀伊（城飼）、榛原の諸郡が置かれ中央政府によって支配されるようになる。長田郡（長上郡）に属していた宮竹野際遺跡周辺では、大蒲村東Ⅱ遺跡（16）や天王町村東遺跡（４）で竪穴住居が、箕輪遺跡（３）で条里型水田に関係する溝状遺構が発見されている。また、大蒲村東Ⅰ遺跡（15）から木簡を始め多くの木製品が、越前遺跡（13）から布目瓦・陶馬などが出土し長田郡の郡衙関連施設の可能性が指摘されている。この時代の遺跡は多く、第３図の３～５・７～10・12～17の各遺跡から遺物が出土している。宮竹野際遺跡でも１～２次調査で奈良時代～平安時代にかけての規格性の高い掘立



第３図　周辺の遺跡　国土地理院発行（平成11年）「磐田」２万５千分の１へ転写

表１　周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代
1	宮竹野際遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
2	田見今遺跡	弥生・古墳
3	箕輪遺跡	弥生・古墳・奈良・平安
4	天王町村東遺跡	弥生・奈良・平安
5	天王中町遺跡	弥生・古墳・奈良
6	天王遺跡	弥生
7	中田北遺跡	奈良
8	上新屋遺跡	奈良
9	早折遺跡	奈良・平安・中世

番号	遺跡名	時代
10	山の神遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
11	松東遺跡	弥生・中世
12	森西遺跡	弥生・奈良・平安
13	越前遺跡	古墳・奈良・平安・中世
14	木船遺跡	奈良
15	大薗村東Ⅰ遺跡	弥生・古墳・奈良・中世
16	大薗村東Ⅱ遺跡	古墳・奈良・中世
17	飯田遺跡群	弥生・古墳・奈良・平安・中世
18	将監名遺跡	弥生

柱建物跡群が検出され、陶馬・円面硯・布目瓦などが出土し都衙関連施設の可能性が指摘されていた。今回の調査で円面硯・風字硯・陶馬・獣足・墨書土器・布目瓦など官衙的性格を示す遺物が多数出土した事から、この地に長上郡の官衙関連施設が存在した可能性が高くなってきた。また、今回の調査区より、浜松地域では初めてとなる条里型水田の大・小畦畔を検出することができた。このことから、天竜川沖積平野西岸地域でも、古代より条里型水田が大規模に開拓・経営されていたと考えられる。

5．平安時代後期・鎌倉時代

10世紀ころより、律令制度が崩れ始め、各地で土地の私有化が起こり荘園が成立する。11世紀には、その荘園を中央の有力貴族や寺社に寄進しその権力の傘下に入る者が多くなる。天竜川沖積平野西岸地域でも、松尾神社領の浅口荘、貞観寺領の市野荘など寄進地系荘園成立の記録が残っている。宮竹野際遺跡周辺も蒲氏により水田開発が行われ、伊勢神宮に寄進され「蒲御厨」となっていく。浜松地域の中世の荘園開発は、梅野遺跡などで表層条里と一致する方向の区画溝が発見されたことから、古代から続く条里型地割りを利用して行われたと考えられていた。今回の宮竹野際遺跡の調査で、中世の畦畔の直下から古代条里型水田の大畦畔が発見されたことによりこの可能性が高まったと言える。この荘園開発に伴い水田開発が可能な低地に接する微高地に新たな集落が12世紀～13世紀にかけて次々に成立する。宮竹野際遺跡でも、1次調査で12世紀～13世紀の掘立柱建物跡群や井戸数基、2次調査で井戸十数基が検出されていることから、「蒲御厨」開発の拠点としての集落がこの地にあったと考えられる。近くの山の神遺跡でも12世紀～14世紀前半の環濠を伴う屋敷跡や井戸が、大蒲村東Ⅱ遺跡（16）でも多くの井戸が発見されている。鎌倉幕府により北条氏がこの地の地頭職に任じられても、蒲氏は地頭代として実質的な支配を行っていたようである。また、この時代は、日本と中国・朝鮮との間で人や物の往来が盛んになり浜松地域にも中国産の青磁・白磁など貿易陶磁器がもたらされていたことが、今回の調査区から12世紀～13世紀の青磁・白磁片が出土したことからもうかがえる。

6．室町時代以降

14世紀～15世紀にかけて浜松地域では、それまでの中世集落が急速に衰退する。これは、①政治情勢の転換と荘園経営の変質（鎌倉幕府の終焉と南北朝の動乱により在地領主の没落が進行したこと）②自然環境の変化（天竜川の流路変更・洪水や地震により地形が変化したこと）③微地形開発の進展（不安定な耕地を畑地と水田に分離させ有効活用するため島畑の造営が積極的に行われたこと）という原因が絡み合い中世前半の集落が耕作地に変えられていったためであると考えられる（鈴木　2001）。宮竹野際遺跡でも2次調査によって発見された集落は、14世紀前半には衰退し、農地として開墾が行われていることが確認されている。

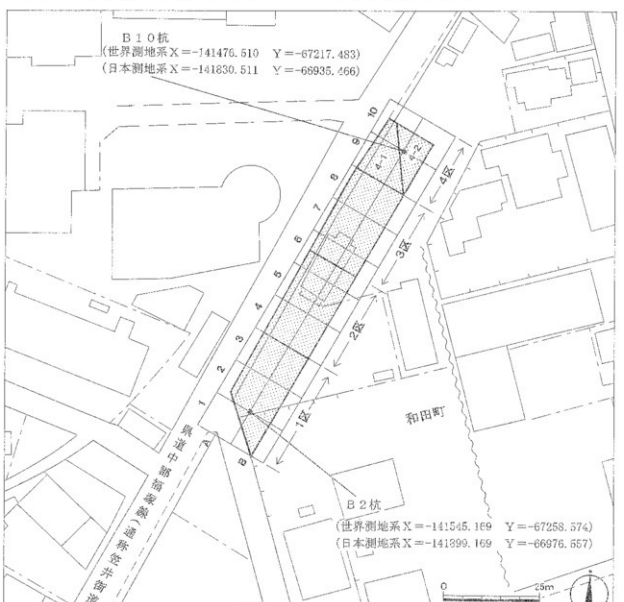
15世紀以降の農地開発は、梅野遺跡で確認されているように、条里型区画にとらわれない開発が行われるようになる。このことは、古代からの支配を嫌い新しく力を持ち始めた人々による自由な開発が始まったことを意味する。寿実、浜松の荘園は、農村で力を蓄えはじめた公文（名主）たちによって、15世紀には解体していく。15世紀頃の蒲御厨の内部も数名の公文を中心に惣がつくられ、守護代の家臣や引馬市の代官などによる領有権争いに巻き込まれ対立しあっていたようである。16世紀に駿河の今川氏が遠江に攻め込むと、公文たちは今川氏のもとに下り、蒲御厨は今川氏の支配下に置かれるようになる。江戸時代には、宮竹野際遺跡周辺は、浜松藩の支配を受け、水田地帯の中に島状の畑がある農地として長い間活用されるようになる。この農地が大きく変化するのは昭和に入ってからであり、田畑を埋め立て繊維を中心とした工場群が建設され工業都市浜松の一翼を担うことになる。しかし、繊維産業の衰退とともに工場の撤退が相次ぎ、その跡地に、大規模商業施設の建設が次々に行われ、現在は、浜松の一大商業地へと大きく転換・発展している。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

現地調査

今回の調査区は、浜松市東部の大産業地の中心で、調査区内に隣接する商店の進入路や企業の駐車場を確保する必要から、静岡県浜松土木事務所との協議により、調査範囲を南西より５つの調査区に分割して、南西より調査区ごとに調査を行うことになった（第４図）。また、調査区は、中部福塚線の道路拡幅部のため、北東～南西（約100m）、北西～南東（約11m）の細長いものであったので、調査の際の測量や遺物取り上げの基本となるグリッドは、測量や図化がしやすいように、道路の主軸方向を基軸として、調査区の形状に合わせて設定した。このため、グリッド杭を調査区の道路側（北西）と宅地側（南東）の中央に南西から北東に向けて10mごとに設置し、道路側をＡ区、宅地側をＢ区とし、南西から、アラビア数字順に番号をつけ、各グリッド名は、西の杭の番号で示した（第４図）。



第４図　グリッド及びグリッド杭配置図

調査方法は、1区（南西）より区ごとに重機で表土を除去した後、包含層を人力で掘削し、遺構面の精査を行い、遺構を検出し人力で完掘した。排土については、ベルトコンベアを使用して、次の調査区内に仮置きし、重機による中間層除去や次の調査区の表土除去の時に排土処理場へダンプトラックを使用して搬出した。また、協議の結果、宮竹交差点に近い1区は、1月末までに調査を終了し工事業者に引き渡し、道路工事が行われることになった。また、2区からの調査区も調査終了後、埋め戻しを行わず、速やかに道路工事業者に引き渡し道路工事が行われることになった。

現地調査では、想定外の大きな土坑が20基以上検出されるとともに、遺物数も予想を遥かに上回る出土量になった。このため、契約期日に間に合わせるため、完形に近い土器が集中して出土した場合は、出土状況の実測を行い、年代が確定できる土器や、希少重要遺物については、トータルステーションで位置を記録したが、その他の土器については、グリッドで一括して取り上げる方法をとった。

図面記録測量は、トータルステーションを使用し、1/20の図を基本とし、遺物出土状況など必要に応じて1/10の図をとった。調査を早く正確に進めるため基準杭設置・調査区東壁土層図・1/100略図については（株）フジヤマに委託した。

写真記録撮影は、6×7判モノクロ撮影を基本とし、35㎜カラーネガ、リバーサルや6×7判リバーサル撮影も行った。各調査区の完掘全景撮影は、（株）フジヤマに委託し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。

整理作業

現地調査終了後、遺物・記録類等を森県地事務所に運び整理作業を行った。遺物は、分類と仕分けをし、接合できる物は接合し、実測、版組、トレースを行うとともに、復元可能な遺物の復元をした後、写真撮影を行った。図面は、整理・確認の後、版組・トレースを行った。

第2節　調査の経過

1．現地調査

1区

平成16年12月にプレハブ設営・調査区道路側矢板打ち込み作業が開始され、静岡県教育委員会文化課の立ち会いの下、重機による1区の表土除去作業を始めた。予定される調査面は地表より約1.7m下になるため、隣接商店の進入路で矢板の打てない南東の壁は、45度の安全勾配を設定しブルーシートによる保護を行った。また、交通量の多い市街地であるため、調査区周囲には、防塵ネット・安全柵を設置するとともに、湧水対策として調査区周囲に側溝を人力掘削し、集水升と水中ポンプを設置した。12月下旬から南西部より第1面の包含層人力掘削を開始し、平成17年1月中旬第1面を完掘し、空中写真撮影・写真測量を行った。その後重機で中間層を除去し第2面の調査に入った。第2面では、遺構が少なかったため、トータルステーションによる実測と高所からの写真撮影による記録保存を行った。第2面より下層には遺物および遺構がないことを確認し、1月末に1区を引き渡した。

2区

工期短縮を考え1区中間層除去とともに2区の表土除去を行った。1月下旬より1区調査と並行して2区周囲に人力で排水溝を掘削し、包含層と耕作土の人力掘削を開始し2月中旬に第1面を完掘し空中写真撮影・写真測量を行った。その後、重機で中間層を除去し、第2面の調査に入った。2区第2面では、古代の小畦畔・大畦畔などを検出し3月上旬に空中写真撮影・写真測量を行った。その後、第2面

より下層に遺物および遺構がないことを確認し3月上旬に2区を引き渡した。

3区と4－1区

当初計画では、近隣商店・工場の進入路や駐車場と排土置き場の確保の関係から3区と4区に分けて調査する予定であった。しかし、2月上旬の協議で交通感知器がある電柱移設の問題から4区北東が100㎡減になり、進入路・排土置き場が確保され道路側の矢板が4区の残りまで打ち込みが可能になった。このため、2月下旬から3区・4区道路側の矢板打ち込みと防塵ネット安全壁設置作業が行われ、3月上旬から3区・4－1区の重機による表土除去を開始した。浜松市による宮竹野際遺跡4次調査で、弥生水田が道路を隔てた北部より検出されているため、北角に試掘坑を掘削すると古代水田面と考えられる層より下層から酸化鉄・マンガン集積層が確認できたため3区・4区の一部を4面調査することになった。

3月上旬より第1面の中世水田面まで人力掘削を開始した。3区に入ると、包含層より須恵器片が多量に出土するようになった。2区で中世水田層と確認した層まで掘り下げ精査を行ったが、遺構を検出できなかったため、この面（中世水田面）での空中写真測量をやめ、高所から写真撮影するとともにトータルステーションにて中世水田面の地形測量図を作成し記録に残すことにした。

3月中旬より中間層の人力掘削を始めた。作業の効率化を考え、中間層除去ができた部分から並行して第2面の精査をし、遺構の検出を行った。調査区北西一帯に想定外の土器片集中地帯があり、大量の土器片が出土し始め、現地での基礎整理作業が追いつかなくなった。出土遺物の中には、布目瓦・円面硯・獣足・陶馬・墨書土器など希少な遺物も多く、記録写真を撮ってからトータルステーションで位置を確認して取り上げを行った。

4－2区を加えて

1区、2区の道路工事が進み、近隣商店の進入路として使えるようになったため、4月中旬から進入路として最後まで残された4－2区の表土除去を行った。作業の効率化を考え、表土除去をした4－2区の包含層掘削を先に行い、3区・4－1区と同じ層まで下げ、3区・4区を一つとして遺構検出を行うことにした。北西部の土器集中地帯の土器を取り上げ精査すると、その下から多くの土器を含む流路や畦畔を検出することができた。このため、それぞれの上層を図面と写真に記録し完掘を行い4月末に空中写真撮影・写真測量を行った。

4月末から4－1区北角試乱坑で確認した酸化鉄・マンガン集積層までの深さを重機で掘り下げ、第3面の調査を3区南より開始した。浜松市の4次調査で弥生水田が検出された標高より低い4mを切る高さまで下げたが、黒色粘土とその中に水性植物が含まれているだけで遺構は検出できなかった。しかし、4－1区に入ると赤褐色の畦畔が検出され、その下から溝と掘立柱建物の柱穴と考えられる小坑が検出されるようになった。また、この溝より土器群が出土したため図面と写真で記録をとって取り上げた。このことより、3区・4区は、古代水田であった前は、大部分が沼のような低湿地であったのに対して4－1区は微高地で人々の生活があったと考えられる。遺構の面積が少ないため、費用節約を考えこの面での空中写真測量を中止し、トータルステーションによる実測と高所からの写真撮影によって記録を残すことにした。その後、4－1区を掘り下げてみたが、下層には遺物・遺構がなかったため、この地域まで弥生時代の水田の広がりはないと判断し、5月中旬に3区・4区を引き渡した。

発掘作業と並行して1月より現地において出土遺物の洗浄・注記などの基礎整理作業を行った。

2．整理作業

資料整理作業は平成17年６月より平成18年１月まで、森現地事務所において行った。作業は図面・写真整理、遺物の分類・仕分けを行い、遺物接合、遺構版下原図の作成にかかった。また、金属製品・木製品の保存処理作業も行った。遺物の実測・拓本採取を行い、版下原図を作成した後、遺構とともにトレースを行った。その後、遺物の観察表作成、遺物写真撮影、写真図版版組、原稿執筆を行った。遺物写真は６×７判（白黒・カラーリバーサル）を用いて撮影した。最後に遺物・図面・写真等を収納し作業を終了した。

大型土坑掘削作業

実測作業

土器接合復元作業

土器実測作業

表２　調査工程表

年		16年	平成17年											18年
月		12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
現地調査	1区														
	2区														
	3区														
	4-1区														
	4-2区														
	基礎整理														
整理作業															

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　基本土層と調査面

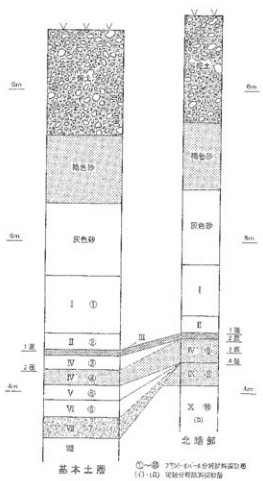
・基本土層

調査区の各土層はほぼ水平で、上から盛土層、褐色砂層、灰色砂層、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅳ'層、Ⅴ層、Ⅵ層、Ⅶ層、Ⅷ層の順で堆積している。盛土層は赤褐色をした山土の中に小石の混じる層である。昭和12年の土地利用状況を見ると（第２図）、調査区一帯は水田および畑であったことから、埋め立てられたのはそれ以後である。次の褐色砂層は約40cm、灰色砂層は約50cmの厚さで堆積している。両層は近接していた川の氾濫によって、もしくは川底に堆積したものと推定される。約60年前に調査区を縦断するように小川が流れていたという住民の証言から、また東壁土層図および昭和初年の土地宝典等にその痕跡が残されていることから、近くに小川が流れていたことは確かである。ただし調査区の東側にも幅広い旧河道の痕跡が残っており（第２図）、今回のような小面積の調査では、両砂層がどちらの河川による堆積であるか判断できない。

Ⅰ層は青灰色シルト層で、山茶碗の小破片が顆まれに含まれている。重機で掘削中にこの層の上面で、山の神遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997）および宮竹野際遺跡２次調査（浜松市文化協会　1994）で発見された畝状遺構を数条確認した。近世から近代にかけての耕作関係の遺構と推定するが、今回は調査を行わなかった。Ⅱ層は明灰色粘土層で、山茶碗の破片が少々含まれている。Ⅲ層は青灰色シルト層で、厚さ３～６cmを測る。本来の土色は青灰色であるが、酸化鉄・酸化マンガンによる斑文が非常に発達しており、全体的には赤褐色に見える。調査区南半はこの層の上面が山茶碗の包含層となっており、北半は層全体が多量の山茶碗、須恵器、灰釉陶器、土師器の包含層となっている。Ⅳ層は青灰色シルト層で、須恵器と灰釉陶器の小破片を少々含んでいる。Ⅳ'層は青灰色シルト層である。前層と同じ土色・土質であるが、酸化鉄・酸化マンガンによる斑文が非常に発達しており、全体的には赤褐色に見える。Ⅴ層は灰色シルト層で、この層以下が無遺物層となっている。Ⅵ層は暗灰色シルト層である。前層との違いは、灰色がわずかに暗いと感じる程度にすぎない。Ⅶ層は厚さ約30cmの黒色粘土層で、上半でラミナが明確に確認できる。Ⅷ層は灰色シルト層である。この層はⅤ層およびⅥ層より砂質が強い。

・北端部の土層

北端部の土層が異なっている。盛土からⅢ層までは基本土層と同じであるが、Ⅳ層が無くなり、Ⅲ層の下がⅣ'層、Ⅸ層、Ⅹ層となっている。またⅤ層、Ⅵ層、Ⅶ層はⅨ層の上面で消えている。Ⅸ層は暗灰色シルト層であるが、酸化鉄・酸化マンガンの斑文



第５図　基本土層と北端部土層

表3　基本土層と北端部土層

	土色・土質	備　考	試掘結果（上層）	予測遺構
Ⅰ　層	青灰色シルト		山茶椀片が極めてまれに	
Ⅱ　層	明灰色粘土		山茶椀片少々	中世水田上層
Ⅲ　層	青灰色シルト	酸化鉄斑文発達	山茶椀、灰釉陶器、須恵器、土師器多数	中世水田下層
Ⅳ　層	青灰色シルト		須恵器、灰釉陶器片少々	古代水田上層
Ⅳ' 層	青灰色シルト	酸化鉄斑文発達	（北半）須恵器片がまれに	古代水田下層
Ⅴ　層	灰色シルト			
Ⅵ　層	暗灰色シルト			
Ⅶ　層	黒色粘土	上半にラミナ		湿地
Ⅷ　層	灰色シルト	未分解の植物片を含む		
Ⅸ　層	暗灰色シルト	酸化鉄斑文発達		
Ⅹ　層	灰色シルト			

が発達して全体としては赤橙色に見える。X層は灰色シルト層で、粘質が強く、無遺物層である。

・検出の難しさ

次の3つの要因により、遺構の検出に多大な困難が伴うと予測された。①土が還元して青色化していること。水田や河川の下にある土壌は酸素が遮断されると還元し青色化する。それにより色の違いによる遺構検出が不可能になる。具体例をあげると、宮竹野際遺跡1次調査の北側部分、同2次調査C区の北東部分である。これらの上層には近・現代の水田があったために土が青色化しており、検出された遺構が少なくなっている。遺構が無かったのではなく、見えなかったと思われる。また1次調査の東端部分と3次調査全域では遺構がほとんど検出されていない。これは河川の影響とみられる。そこで今回の調査区をみると、半分は近・現代の水田の下であり、さらに近代の小川が調査区を縦断していたと推定される。全域が青色化して遺構がまったく見えないと思われる（第2図、第28図）。

②各層の土色と土質が類似していること。基本土層のⅢ層～Ⅵ層は基本的には灰色シルトであり、わずかに青みがかっていたり、やや暗く感じたりする程度の微妙な差でしかない。通常、遺構検出は旧地表面の土と遺構内に堆積した土の色と土質の違いを識別して行われている。しかし本調査区のようにすべての層が類似した土色と土質を持つ場合には、遺構検出に困難が伴うと予測される。

③酸化鉄と酸化マンガン集積による斑文の発達が基だしい。灌漑施設がある水田（乾田）を長期間耕作し続けると、水田下層に酸化鉄と酸化マンガンの集積による斑文が発達する。当調査区ではⅢ層、Ⅳ'層、Ⅸ層が斑文の発達によって層全体が赤橙色となり、また土質も変化して元の土色・土質が非常に分かりにくくなっている。したがって通常の方法では遺構検出に困難が伴うと予測される。

・調査面の設定

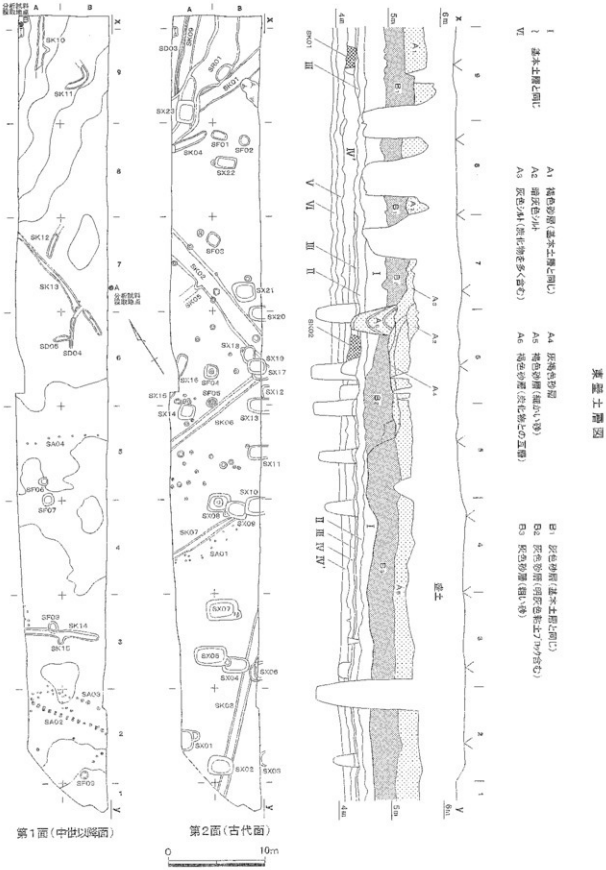
上記した困難を克服して、より正確な発掘調査を行うため、調査面を次のように設定する。遺構の検出は、酸化鉄・酸化マンガン集積の強弱（すなわち赤橙色の濃淡）により識別する方法を主として、通常の土色・土質の違いにより識別する方法を従として実施する。予測される主な遺構が水田（乾田）であるから、前者は威力を発揮すると思われる。具体的には、第1面をⅢ層上面より数cm下の位置、第2面をⅣ'層上面より数cm下の位置に設定する（第5図に第1面と第2面の位置を示す）。

第2節　遺構の概要

調査は諸事情により全体を5つの小面積に細分し、1区ごとに2～4面の調査を実施した。したがってそれをそのまま図面にすると非常に複雑になり、全体像を捉えることが難しい。そこで本節以後は、第1面（中世以降面）と第2面（古代面）に合成・編集した全体図（第6図）に基づいて記述する。

第1面（中世以降面）

小畦畔と溝を伴う中世水田（乾田）を検出した。Ⅱ層が水田の作土（上層）、Ⅲ層が酸化鉄・酸化マン



第6図　第1面・第2面全体図及び東壁土層図

ガンの集積層（下層）である。これは自然科学分析（付編）によって裏付けられている。Ⅱ層から稲のプラント・オパールが検出され、プラント・オパール密度1,800個/gとやや低めであるが水田であった可能性の高い数値を得た｛プラント・オパール分析試料、花粉分析試料の採取地点と基本土層との関係は第5図、第6図に示す｝。その他に中世の土坑3基と近世～近代の杭列および土坑を検出した。

第2面（古代面）

直交する大畦畔と約10～12m間隔で平行に並ぶ小畦畔を伴う条里型水田（乾田）を検出した。予測したとおりに、Ⅳ層を作土（上層）、Ⅳ'層を酸化鉄・酸化マンガン集積層（下層）とする水田であった。これも自然科学分析（付編）によって裏付けられている。Ⅳ層から稲のプラント・オパールが検出され、プラント・オパール密度2,400個/gと、ほぼ水田であったと言える数値を得た。時期は大畦畔内から出土した土器の型式からみて、奈良時代中頃まで遡るのは確実である。他に大量の土器が廃棄されていた平安時代の川や、用途不明の大型土坑23基を検出した。

北端部

小面積（約10㎡）であるが、調査区の北端部で奈良時代の居住域を検出した。4面調査を実施した。第1面で小畦畔を伴う中世水田、第2面で平安時代の大畦畔と溝、第3面で奈良時代後半の大畦畔と溝、第4面で祭祀色の強い土器を伴う奈良時代前半の溝と掘立柱建物と推定する複数の小坑を検出した。

その他

宮ヶ野際遺跡といえば、弥生時代前期の水出が注目されているが、今回は弥生時代の水田は検出されなかった。ただし1の弥生時代後葉の壺口縁が出土している。

第3節　遺　構

1．奈良時代の遺構（8世紀）

溝　SD01（第7図　写真図版5・15）

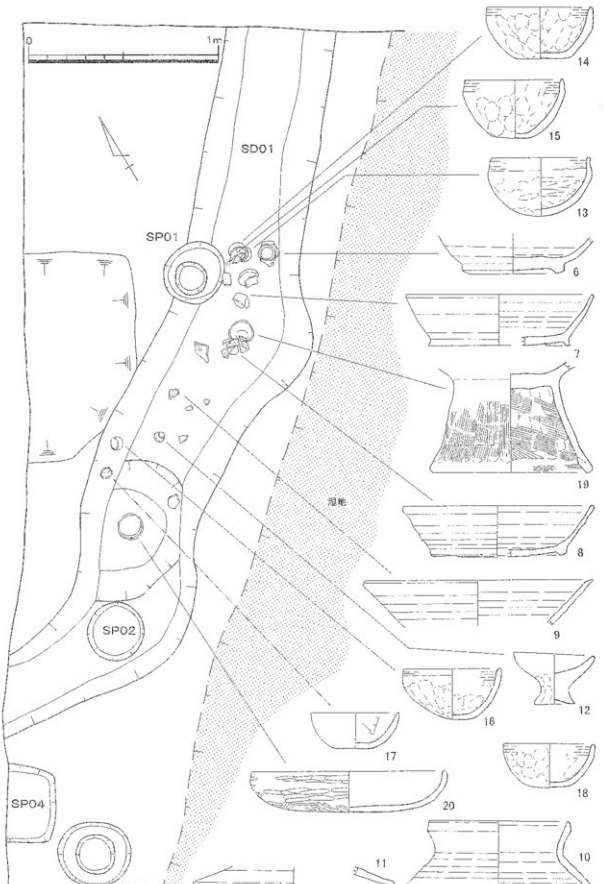
SD01は調査区の北端部に位置し、幅約60cm、深さ10cm、検出長約8mを測る。溝の形状はU字形であり、土層は単層で、覆土は周辺の土とほとんど変わらない。ただ溝の土の方がやや暗いと感じる程度である。この溝を検出することができたのは、土の色の違いではなく、酸化鉄による赤褐色の筋であった。精査時、表面に平行に延びる数条の筋が現れ、これを掘り進めると土器が出て溝となった。水の流れによってⅨ層の酸化鉄が溶け出して、溝内に筋状に沈着したものと考える。この溝からは、完形品に近いものを多く含む土器群（6～20）が出土した（第15図）。12と17の手づくね土器、20の両面が赤彩された土器、8、9、10、11の表面を黒色に焼成した須恵器など祭祀的要素がみられる。近くで何らかの祭祀が行われた後、土器が溝に廃棄されたと考える。廃棄時期は、土器型式からみて8世紀前半である。溝の東側では黒色粘土層（Ⅶ層）が厚みを増しながら下に滑り込んでいることから、当時SD01の東側は湿地（川の後背湿地）が広がっていたと推測する。

小坑　SP01～03（第7図　写真図版15）

直径約30cmのSP01、SP02、SP03が直線上に並び、SP01とSP03で直径20cmと22cmの柱痕が検出された。土器は出土していない。これらは調査区の外に延びる掘立柱建物の東端と考えるが、確証は無い。時期は、SD01の完掘後にはじめてSP01とSP02が見えたことから、SD01より古い8世紀初頭と考える。

小坑　SP04～06（第9・13図　写真図版15）

大きさ40cm×40cm前後のSP04、SP05、SP06が直線上に並び、SP05から直径約20cmの柱痕が検出された。土器はSP04から29の手づくね土器と30の土師器の甕底部が出土した。これらも調査区の外に延びる掘立柱建物の東端と考えるが、確証は無い。時期は8世紀前半であろう。



第7図　ＳＤ０１土器出土状態図

大畦畔　ＳＫ０１（第８・11図　写真図版３・14）

下端で幅1.6m、上端で幅1.5m、高さ５cm、検出長8mを測る。川SR01の影響によって酸化鉄・酸化マンガンが溶け出して斑文が巨立たなくなっていたため、基底部に達するまで大畦畔の存在に気付かなかった。後になって京壁をきれいに削ってみると、そこには明瞭に大畦畔の断面が現れていた。川SR01から遠ざかるほど影響は少なくなると推定する。この大畦畔の時期は、西端で川SR01に切られていることから、川より古い８世紀後半である。

大畦畔　ＳＫ０２（第８・11図　写真図版４・12）

下端で幅2.2m、上端で幅1.45m、高さ20cm、検出長14.6mを測る。酸化鉄・酸化マンガンの斑文が非常に発達しており、全体が赤褐色を呈し、土は堅く締まっている。そのために容易かつ正確に完掘することができた。そしてこの畦畔を解体している時に、21の完形に近い高盤が畦畔内部から出土した。解体前に高盤が入った遺構がまったく見えなかったこと、出土後に高盤周辺を調べたが土が堅く締まり遺構が発見されなかったことから、高盤はSK02が造られたのと同時期に埋められたと推定する。高盤は８世紀後半の製品であるから、畦畔は遅くとも８世紀後半には存在していたと考える。

大畦畔　ＳＫ０３（第９図）

下端で幅1.3m、上端で幅1.0m、高さ20cm、検出長８mを測る。次の《北端部の変遷》で詳しく触れる。

小畦畔　ＳＫ０４（第８図）

下端で幅0.95m、上端で幅0.6m、高さ10cm、検出長3.6mを測る。この周辺も川SR01の影響で酸化鉄・酸化マンガンが溶け出したとみられ、斑文が薄えて遺構の検出が難しかった。SK04は東へ延びていると思われるが、まったく見えなかった。

小畦畔　ＳＫ０５（第８図）

下端で幅0.8m、上端で幅0.4m、高さ15cmを測る。検出できたのはSK02に接する長さ0.8mだけである。延長線上で擬似畦畔などを探してみたが、発見できなかった。おそらく調査区外に川SR01が北から延びており、その影響で酸化鉄・酸化マンガンが溶け出して痕跡をすべて消したと考える。

小畦畔　ＳＫ０６（第８図　写真図版12）

下端で幅0.95m、上端で幅0.4m、高さ15cm、検出長11.5mを測る。赤橙色の精査面に、より濃い赤橙色の帯が現れて、検出することができた。大畦畔SK02と直交する方向に延びている。

小畦畔　ＳＫ０７（第８図）

下端で幅0.85m、上端で幅0.5m、高さ12cm、検出長7.6mを測る。赤橙色の精査面に、より濃い赤橙色の帯として検出した。SK07はSK06と平行に延びており、両者の距離は約10mである。

小畦畔　ＳＫ０８（第11図）

下端で幅0.85m、上端で幅0.6m、高さ５cm、検出長16.7mを測る。この畦畔の延びる方向はSK06やSK07とは異なっている。これは東側にある旧河道の河岸と同じ方向であり、地形の影響を強く受けた結果と推定する。同様に地形の影響を受けているものに、北端部のSK03とSK09がある。

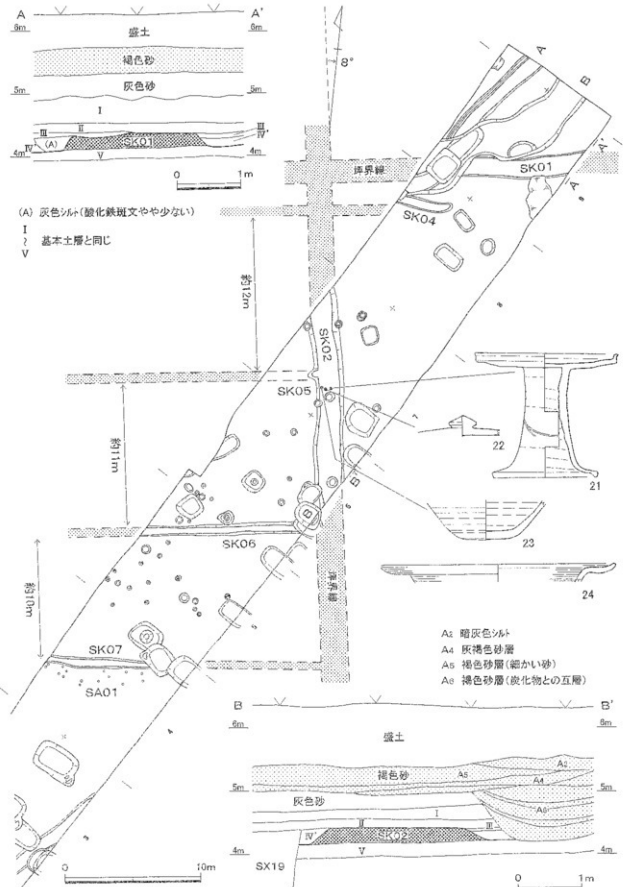
杭列　ＳＡ０１（第11図）

直径10cm、深さ10cmの小杭がSK07の南側に不規則に点在している。耕作関係の杭跡であろう。

《条里型水田》

当水田が条里型水田と言えるのか、またどこまで遡り得るのか、整理・検討する。

遺構から判明した重要な点は次の４点である。①大畦畔SK02は南北方向に延びているが、真北より約８度西へ振れている（Ｎ－８°－Ｗ）。②大畦畔SK01と大畦畔SK02が調査区外で交差することは確実であ



第8図　条里型水田想定図

り、その交差角度は88度前後である。そのまま方格区画をつくると菱形に歪む。③小畦畔SK07と小畦畔SK06は約10mの間隔で平行に並んでいる。④小畦畔SK05がそのまま西へ延びていると仮定すれば、小畦畔SK06との間隔は約11mである。

これまでに当遺跡を含む天竜川右岸平野を対象に表層条里をもとに古代広域条里復元の研究が行われてきたが、途中経過を省略して結果だけをあげると、南北方格軸をN－10°－Wとして、東西方格軸をN－81°30′－Eとする、やや菱形に歪んだ方格区画をもつ（歪み約1.5°）広域条里が想定されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994）（第29図）。そこで両者を比較してみると、南北方格軸の西側への「振れ角度」が当遺跡で約８度、想定広域条里で約10度とほぼ等しい。また菱形に歪んだ方格区画である点も同じである。次に③の約10mの間隔と④の約11mの間隔であるが、一平を長地型単溝で分割した場合に理論上では小畦畔の間隔が10.9mとなり、前２者の数値と近似している。

以上のことから、この水田を条里型水田とみてよいのではないかと考える。時期は、大畦畔SK01が９世紀前半を主体とする土器が大量に廃棄されている川SR01によって切られていることから８世紀代に遡ることは確かである。また大畦畔SK02の内部から出土した土器（21～24）からみて、８世紀中頃には水田として機能していたと考える。

《北端部の変遷》

北端部の遺構は他と大きく異なり、また他が２面調査であるのに対して４面調査を行っているので、この部分の変遷について少し触れておく。

第４面（８世紀前半）

調査区の北端角に10㎡ほどの居住域があるだけで、他はすべて湿地であった。上半にラミナが発達した黒色粘土層（Ⅶ層）が徐々に厚みを増して東に向かって落ち込んでいる。この黒色粘土層では水田耕作が行われていなかったことが自然科学分析（付編）によっても裏付けられている。居住域では、掘立柱建物と推定する複数の小杭と、祭祀的要素の強い土器が出土した溝SD01を検出した。

第３面（８世紀後半）

大畦畔SK03とそれに伴う溝SD02を検出した。SK03は道路であった可能性もあるが、それを裏付ける証拠は何もない。また溝からは土器が出土していない。このSK03は前記した大畦畔SK01およびSK02を伴う条里型水田と同時期で、SK03の東側は水田であったと推測する。

この面が南側の第２面と接続するのであるが、当初は次の第２面が接続するものと考えていた。そのために３区・４区の全景写真にもその様に写っている。ここでその点を訂正しておきたい。

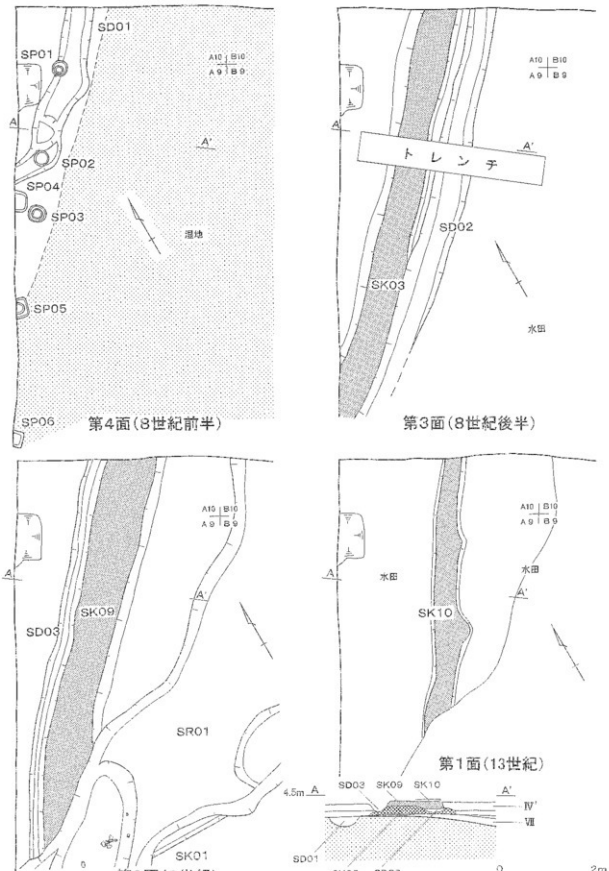
第２面（９世紀）

土器が大量に廃棄された川SR01と、川に切られている大畦畔SK09を検出した。この面については、後のページで詳しく触れる。

第１面（13世紀）

Ⅲ層上面を精査時に、わずかに見える赤橙色をした幅45cmの帯が現れた。これがSK10で、高さ４㎝、長さ5.4mを検出した。さらに西へ延びる筈であるが、途中で途切れている。これは埋められた川の含有水分が酸化鉄・酸化マンガンの沈着に影響して斑文の発達を抑えたと考える。

以上の４面をみると、８世紀前半から13世紀まで同じ場所に同じ方向で畦畔（もしくは道）と溝が折り重なって造られていることが分かる（第９図）。これは地形（東隣にある旧河道の河岸）の影響を強く受けた結果であり、このラインが奈良・平安時代に居住域と水田域を分ける境界線になり、更に言えば近世の笠井御道や現代の県道もこのラインに規制されている。


SD01
SP01
SP02
SP04
SP03
SP05
SP06
湿地
第4面(8世紀前半)
トレンチ
SD02
SK03
水田
第3面(8世紀後半)
SD03
SK09
SR01
SK01
第2面(9世紀)
SK10
第1面(13世紀)
4.5m
SD02
SK09
SK10
Ⅳ'
Ⅶ
SD01
SK03
SD02
0
2m

第9図　北壕部変遷図

2．平安時代の遺構（9世紀～12世紀）

川　SR01（第10図　写真図版14）

調査区の北端で約16mが検出された。調査区の北東から入り、南に流れて、南西側の現道路下に抜けている。幅は最大で3.5mであり、検出時における平均の深さが約8cm、最深部で20cmと非常に浅い。流れは緩やかであったとみえ、砂や小石の大きな堆積は見られない。土層は単層であるが、土色と土質が他の層と類似しているために古代水田面との分層に困難が伴った。ただ所々に非常に脆かな炭化物が混じるので、この炭化物と多量の土器片を目安に掘り進めた。川が機能していた当時はもう少し深かったが、中世の水田開発によって削平されたものと推定する。その根拠として、直上に中世水田下層（旧層）が明確に認められる点と、周辺の中世水田内に奈良・平安時代の土器片が大量に入っており（第14図参照）、それらの多くと川から出土した土器片が接合する事実をあげる。

第10図は川の最深部から出土した遺物の出土状態図である。最深部は中世水田による撹乱を受けていないので、川の出現時期を考えるのに最適である。64は灰釉陶器で尾張産K－14窯式の碗、141は須恵器の平頂壺であり、9世紀前半の製品である。122の高盤や374の角を出して丁寧に作ってある二面風字硯の時期とも矛盾しないと考える。もう1つ付け加えると、8世紀後半と想定しているSK01を切っている点でも時期が符合する。消滅時期は、川を切っている大型土坑で判明するのであるが、残念ながら大型土坑の時期が明確ではない。そこで川から出土した土器を見ると、9世紀前半が主体で、10世紀以降の土器は少ない。以上のことから、川は9世紀初頭頃に出現して、9世紀前半に多量の土器と共に墨書土器や風字硯が捨てられ、確証はないが10世紀末頃に機能を失ったと推測する。

大畦畔　SK09（第10図　写真図版14）

下端の幅1.2m、上端の幅1.1m、高さ15cm、検出長8.2mを測り、西側に溝SD03を伴う。土は堅く締まり、酸化鉄・酸化マンガン沈着のために赤褐色をしている。SK09は北端部の第2面で検出した遺構で、時期は9世紀初頭と推定する。その根拠は畦に伴う溝SD03から出土した350の墨書土器である。糸切り痕が残る無台坏で、土器型式からみて時期を9世紀初頭と考える。また9世紀前半の土器を多く含む川SR01に切られていることから、溝SD03は川SR01より古いことは確かで、その点からも符合する。

溝　SD03（第10図）

幅35cm、深さ7cm、長さ8.4mを測る。断面形状は浅いU字形であり、SK09の西側に沿ってまっすぐ延びる。その位置から見て、SK09に伴うことは確かである。土層は単層で、他層との違いは土色がやや暗く見える程度である。土器の量は少ないが、350の墨書土器と400の手づくね土器が各1点出土している。350の土器型式からみて、溝の時期を9世紀初頭と考える。

土坑　SF01（第13図　写真図版13）

0.9m×1.6m、深さ35cmを測る。土層は単層で、斑文があまり発達していない灰色シルト層である。平面形状は隅丸長方形で、33の灰釉陶器の碗底部が出土した。33は三日月高台を持つ浜北産で、時期は9世紀後半である。SF01が掘られたのも同時期であろう。

土坑　SF02（第13図）

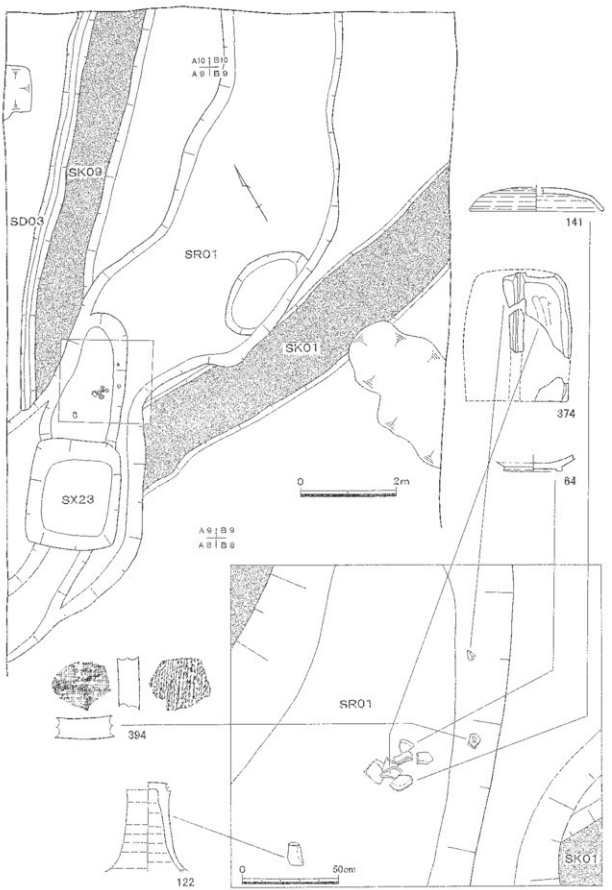
1.3m×1.1m、深さ35cmを測る。平面形状は楕円形で、土器は小片だけで図化できるものは出土していない。土層は単層で、斑文があまり発達していない灰色シルト層である。

土坑　SF03（第13図）

1.2m×1.4m、深さ20cmを測る。平面形状は隅丸方形で、土器は出土していない。土層は単層で、斑文があまり発達していない灰色シルト層である。

土坑　SF04（第13図）

1.5m×1.55m、深さ60cmを測る。平面形状が隅丸台形で、底の中央に柱痕らしき小穴がある。土器は



第10図　ＳＲ０１土器出土状態図

出土していない。

土坑　ＳＦ０５（第13図）

0.95m×1.0m、深さ35cmを測る。平面形状が隅丸台形で、底に柱痕らしき小坑がある。土器は出土していない。SF04とSF05は掘立柱建物の一部と考え、周辺を丹念に精査したが、対となる土坑は検出できなかった。

小坑　ＳＰ０８～１０（第11図）

SK02と直交する方向にSP08～SP10が直線上に並び、SP08に柱痕がある。掘立柱建物である可能性があるが、周辺から対となる小坑を発見できなかった。時期は、SP09から32の灰釉陶器（尾張産Ｋ－14窯式の碗底部）が出土しているので、９世紀前半と推定する。

その他（第11図）

SF02～SF05およびその周辺にある土坑と小坑は、土器が出土していないために明確な時期を特定できないが、古代水田が荒廃した後で掘られたのではないかという観点から、時期を11世紀～12世紀と考える。

《大型土坑》

（黒色粘土ブロック）　大型土坑は、全体を完掘したものが11基、調査区の外に続くためその一部を掘ったものが９基、東壁の土層中に発見したが掘っていないものが３基、合計23基を確認した。大型土坑には、共通する重要な特徴がみられる。それは土層にある。すべての層に10～15cm大の黒色粘土ブロック（これはⅦ層の黒色粘土と同じ）が入ってまだら模様になっている。例えばSX05の土層を見ると（第12図参照）、酸化鉄斑文量の多少や土の粘性の強弱によって一応４層に分けている。しかし本来は同じ層である。なぜならばすべての層に濃淡の差はあるがⅦ層の黒色粘土ブロックが入っているからである。これから言えることは、大型土坑は自然に埋まったものではなく、掘った直後に埋め戻したということである。

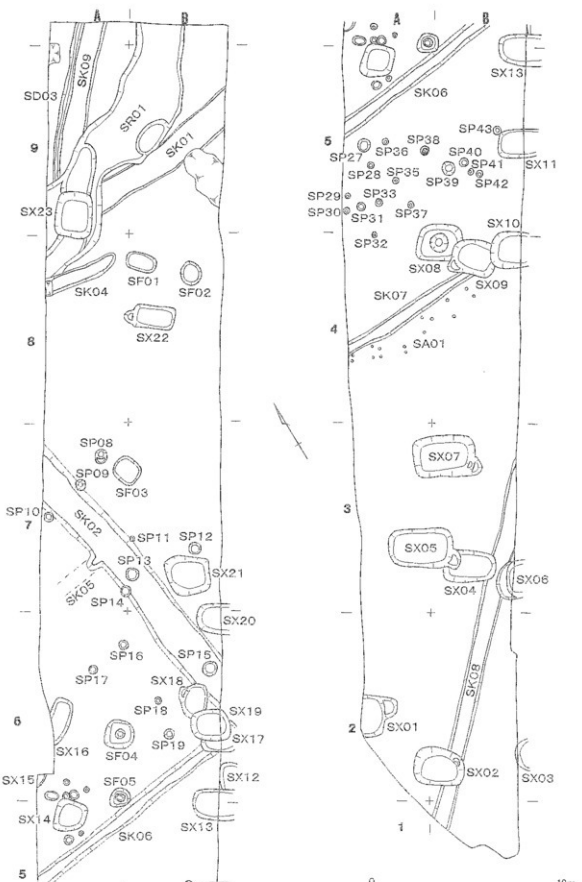
酸化鉄斑文の多少や土の粘性の強弱など土層に現れた違いは、埋没後の水分含有量の差などの後発的要因により発生したと考える。

（酸化鉄の斑文）　当発掘調査において、判断に迷い結果的に一部で失敗したものがある。それは大型土坑の時期である。第１面の精査時、すなわち中世水田下層（Ⅲ層）で大型土坑が見えていた。したがって中世水田より新しいと判断した。ただ中世水田上層（Ⅱ層）で見えていなかったのが矛盾していた。結局、新しいと判断して第１面で掘ったのであるが、次の第２面からも同じ大型土坑が検出された。同時期の大型土坑が第１面と第２面に分れる結果になってしまった。明らかにどこかで間違っている。

のちに検討した結果、土坑の水分含有量の違いが中世水田下層の酸化鉄集積量に影響する、に違いないという結論になった。すなわち水分含有量の多い土坑では酸化鉄の集積が少なく、水分含有量の少ない土坑では酸化鉄の集積が多くなると考える。そこで第１面で検出したSX05の土層を再度見てみると（第12図参照）、①層に少ないけれど酸化鉄の集積が認められる。SX05は中世水田の下にあったのである。

大型土坑は中世水田以前に掘られている、という結果を受けて全体図では古代面に再掲載した。しかし写真図版では第１面と第２面に分かれたままである。

（グループ分け）　大型土坑はいくつかのグループに分けることが可能である。その代表例として、調査区中央部にあるSX08、SX09、SX10グループを見てみる。最初に掘られたのはSX08である。次にSX09が掘られた。ただSX09は少しだけ前の土坑と重複している。そして最後にSX10が掘られたが、これも少しだけ前の土坑と重複している。なぜこのように少しだけ重複して掘っているのであろうか。１つの仮説として、労力の低減をあげる。今掘っている土坑の土を以前に掘った土坑に捨てる。次に掘る土坑の土は



第11図　古代面（第２面）全体図

今掘っている土坑に捨てる。これをくりかえせば、土を上に提げ上げる労力と埋め戻す労力の低減となる。

同様の例がSX04、SX05、SX06のグループ、SX17、SX18、SX19のグループ、SX12、SX13のグループに見られる。

(時期) 長軸方向が一致している点、グループ単位で掘っている点、どれも掘った直後に埋め戻している点で、大型土坑は同時期に掘られたものと推定する。またSX23が9世紀前半を主体に10世紀末までの土器を包含するSR01を切っている点、13世紀の中世水田以前であることが確実な点、掘られたのは水田が荒廃した時期と推測される点から、大型土坑は11世紀～12世紀に掘られたと考える。

(用途) 用途不明である。ただし明確な根拠はないが、粘土採取土坑の可能性がある。

SX01 (第12図)

幅2.3m、深さ0.5mを測る。調査区外に延びているため、長辺の長さは不明。階段状の窪みをもつ。

SX02 (第12図 写真図版9)

2.0m×2.7m、深さ1.2mを測る。平面形状は隅丸長方形であり、階段状の窪みをもつ。

SX03 (第11図)

調査区東壁の土層中に一部が見えていたもので、調査終了時に東壁斜面を少し削り再確認した。

SX04 (第11図)

1.6m×2.7m、深さ0.8mを測る。平面形状は隅丸長方形である。SK08より確実に新しい。

SX05 (第12図 写真図版9)

2.0m×3.4m、深さ1.1mを測る。平面形状は隅丸長方形で、階段状の窪みをもつ。

SX06 (第11図)

調査区に一部と東壁土層中に見えていたもので、調査終了時に斜面を少し削り再確認した。

SX07 (第12図 写真図版3・9)

2.2m×3.2m、深さ1.1mを測る。平面形状は隅丸長方形で、階段状の窪みを東側に2段もつ。

SX08 (第11図 写真図版11)

1.9m×2.4m、深さ0.9mを測る。平面形状は隅丸長方形で、底部中央に窪みがある。

SX09 (第12図 写真図版11)

1.9m×2.4m、深さ1.0m。平面形状は隅丸長方形で、階段状窪みをもち、底面に杭が打ち込まれていた。

SX10 (第11図 写真図版11)

幅1.8m、深さ1.0mを測る。長辺は調査区外に延びているために不明。形状は隅丸長方形と推測。

SX11 (第12図)

平面形状は隅丸長方形と推定。長辺は調査区外に延びているために不明である。

SX12 (第11図)

調査区東壁の土層中に見えていたもの。調査終了時に斜面を少し削り再確認した。

SX13 (第13図 写真図版11)

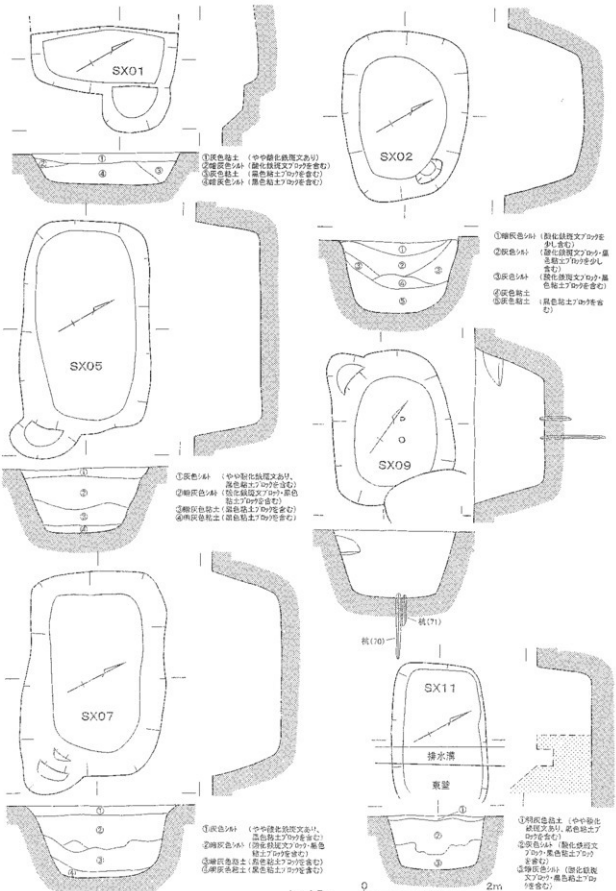
1.5m×2.4m、深さ1.0mを測る。平面形状は隅丸方形と推定。

SX14 (第11図 写真図版11)

1.8m×1.7m、深さ0.8mを測る。識別が非常に難しかったが、黒色ブロックを目印に掘り進めた。

SX15 (第11図)

ごく一部を検出しただけである。大部分が調査区外のため、規模などは不明である。



第12図　遺構土層図・断面図①

ＳＸ１６（第11図）

幅1.1m、深さ0.4mを測る。この土坑は主軸方向が異なることから、性格も異なる可能性がある。

ＳＸ１７（第11図　写真図版11）

推1.8m、深さ0.5mを測る。平面形状は隅丸長方形と推測。長辺は調査区外に延びているために不明。

ＳＸ１８（第11図　写真図版11）

1.8m×1.3m、深さ0.7mを測る。階段状の窪みをもつ。SK02を確実に切っている。

ＳＸ１９（第11図　写真図版11）

1.6m×2.0m、深さ0.6mを測る。平面形状は隅丸長方形である。調査終了時に東端を確認した。

ＳＸ２０（第11図　写真図版12）

幅1.55m、深さ0.4mを測る。平面形状は隅丸長方形と推測。長辺は調査区外に延びているために不明。

ＳＸ２１（第11図　写真図版13）

2.1m×2.4m、深さ0.6mを測る。平面形状は隅丸台形である。

ＳＸ２２（第13図）

1.2m×2.4m、深さ0.6mを測る。平面形状は長方形である。階段状の窪みをもつ。

ＳＸ２３（第13図　写真図版14）

2.3m×1.9m、深さ0.65mを測る。平面形状は隅丸長方形である。灰釉陶器や土師器が多く出土した。

３．鎌倉時代の遺構（13世紀～）

第１面で、Ⅱ層を上層としⅢ層を下層とする中世水田を検出した。小畦畔はSK10～15のうち、SK12とSK14とSK15をⅡ層中で、SK10とSK11とSK13をⅢ層上面で検出した。途切れとぎれであるが、他は擬似畦畔も含めてまったく検出できなかった。水田面は北端部に向かって徐々に高くなっており、南端と北端部の比高差は約15cmである。比高差が15cmもあったのであるから、必然的に小畦畔があったはずである。それが5SK12とSK10であったと推測する。北側のトーンを入れた部分（第14図）のⅢ層中に奈良・平安時代の土器片が多く包含されていたが、これはSR01を潰して水田を造った結果である。水田の時期は、Ⅱ層から出土した山茶碗からみて、13世紀と考える。

小畦畔　ＳＫ１０（第14図）

下端の幅60cm、上端の幅45cm、高さ４cm、検出長5.4mを測る。この畦畔は地形の影響を受けて造られたものであり、徐々に西へ曲がり調査区の外に延びると推測する。

小畦畔　ＳＫ１１（第14図）

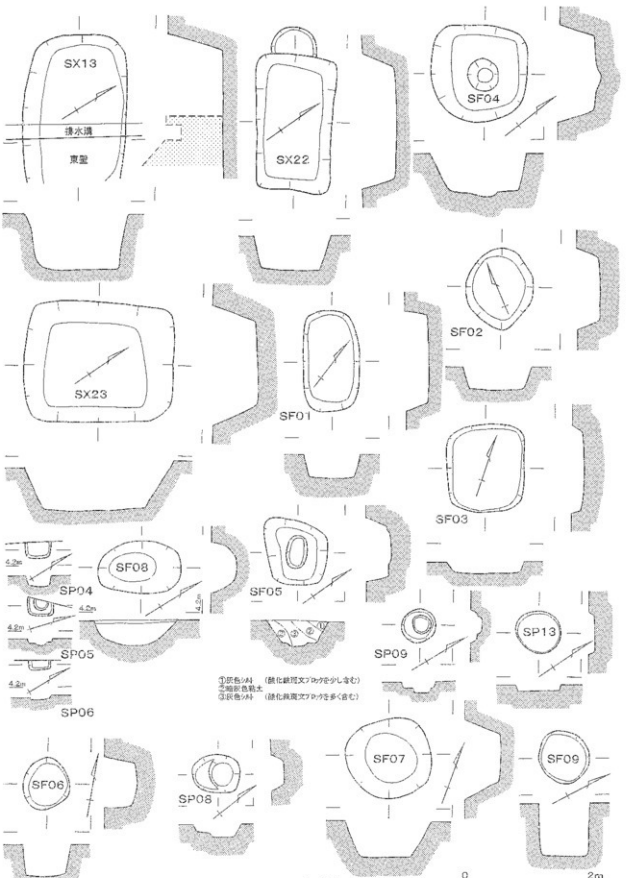
下端の幅45cm、上端の幅40cm、高さ３cm、検出長3.5mを測る。下層に赤橙色のSK01があったために土色の違いが明瞭になり検出することができた。曲がった端がSK10の中程に接続すると考える。

小畦畔　ＳＫ１２（第14図）

下端の幅50cm、上端の幅40cm、高さ５cm、検出長2.7mを測る。明灰色粘土（Ⅱ層）の中にわずかに黄色い帯として検出した。北端延長線上を精査したが検出できなかった。擬似畦畔も見えなかった。

小畦畔　ＳＫ１３（第14図）

下端の幅60cm、上端の幅50cm、高さ７cm、検出長10.2mと3.3mを測る。土が赤褐色をしていて堅く締まっていたために容易かつ確実に検出できた。途切れている場所に水口があったと推定され、SD04が南から延びている。



第13図　遺構土層図・断面図②

この小畦畔は古代水田の大畦畔SK02の東端に乗っており、古代条里型水田の坪界線が中世水田まで存続したことを意味する。中世の水田開発においては、新たな方向の畦畔や地形に規制された畦畔を取り入れる一方で、一部に古代条里型水田の坪界線も残されたと考える。

小畦畔　ＳＫ１４（第14図）

下端の幅0.8cm、高さ15cm、検出長7.8mを測る。SK14とSK15は明灰色粘土（Ⅱ層）の中でやや光沢がある土として検出した。判別が最も難しい遺構であった。SK14の真下から13世紀の山茶碗の底部破片が出土した。

小畦畔　ＳＫ１５（第14図）

下端の幅0.7cm、高さ10cm、検出長0.6mを測る。Ｔ字形に枝分かれしている部分は検出できたが、その先は消えていた。

溝　ＳＤ０４（第14図　写真図版10）

幅35cm、深さ８cm、検出長8.4mを測る。土層は単層で、周辺の土色よりやや暗い土が入っていた。小破片の土器は出土したが、図化できるものは無い。SD04はそのまま延びてSK13の水口に接続すると思われるが、その部分は検出できなかった。

溝　ＳＤ０５（第14図）

幅45cm、深さ５cm、検出長1.8mを測る。SD05は先端をSD04に切られていることから、SD04より古い。土器は小破片が出土しているが、図化できるものは無い。

土坑　ＳＦ０６　（第13図　写真図版10）

0.75m×0.8m、深さ10cmを測る。土器は34の山茶碗の小皿が出土している。時期は13世紀である。

土坑　ＳＦ０７（第13図　写真図版10・11）

1.3m×1.25m、深さ55cmを測る。土器片は多く出土したが、図化したのは35の須恵器の壺底部と332の青磁碗の口縁部である。土坑の時期は青磁碗からみて14世紀と考える。須恵器の壺底部は混入である。

土坑　ＳＦ０８　（第13図）

0.8m×1.3m、深さ40cmを測る。

４．その他の遺構

杭列　ＳＡ０２（第14図　写真図版９）

直径25～30cmの小杭２つが組みになって並んでいる。小杭の深さは約10cmで、内部に上層（Ⅱ層）の明灰色粘土が入っている。杭は残っていない。これは近世～近代の小川を横断するように打たれた杭列の先端部分の圧痕と推測する。

杭列　ＳＡ０３（第14図　写真図版９）

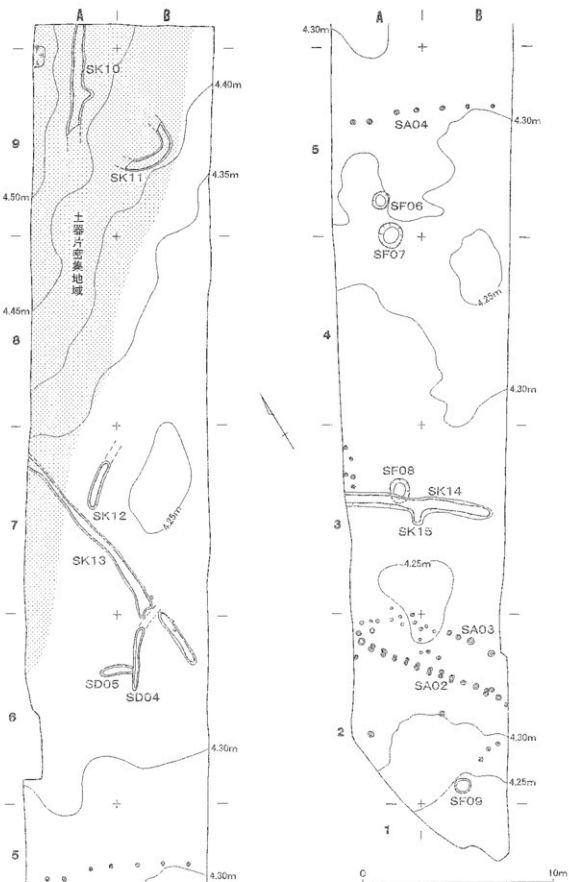
直径20～25cmの小杭が弧を描いて並んでいる。これも小川を横断するように打たれた杭の先端部分の圧痕と推測する。

杭列　ＳＡ０４（第14図）

直径10～30cmの小杭が9.2mにわたって並んでいる。やや間隔が広いが、上記と同じものであろう。

土坑　ＳＦ０９（第13図　写真図版９）

0.8m×0.8m、深さ80cmを測る。この土坑はⅠ層の中程から掘り込まれていることから、時期は近世である。井戸のように見えるが、水源の砂層に達しておらず、これでは水が湧かない。用途不明の土坑である。



第14図　中世以降面（第1面）全体図

第4節　遺　物

弥生・古墳時代の土器（第15図　写真図版16）［遺物番号１～５］

今回の調査において弥生時代および古墳時代の遺構は検出されなかったが、土器は１～５の５点が出土した。１は後期弥生土器である。菊川式（土器型式）に属する壺の口縁部であり、天竜川以東からの搬入品である。口縁部の内面に羽状文が施されている。２は古墳時代前期の高坏脚部であり、未完成の透かし孔が１方向にある。３、４、５はＳ字状口縁台付甕であり、おそらく同一個体であろう。大型土坑SX08から出土したが、土坑掘削時に混入したものと推定する。口縁部が外に大きく開き、頸部に沈線をもち、肩部にヨコハケが認められる。定型後の型式で、時期は古墳時代前期である。

ＳＤ０１出土土器（第15図　写真図版５・16）［遺物番号６～20］

溝からの一括遺物である。完形品に近いものが多く、今回の調査区の中で最も残存状態が良好である。６～11が須恵器、13～16と18～20が土師器、12が高坏形の手づくね土器、17が坏形の手づくね土器。８～11は須恵器であるが、通常の灰色ではなく表面を黒色に焼成している。20は内外面とも赤彩されている。これらのことからみて、この溝から出土した土器は祭祀的要素が強いと言える。廃棄時期は、６と19が７世紀末に遡る可能性があるが、全体的にみると８世紀前半である。

ＳＫ０２出土土器（第15図　写真図版４・16）［遺物番号21～24］

21～23が須恵器、24が土師器。21は高盤で、脚部の中ほどにヘラ記号がある。22は坏蓋の宝珠つまみ部分、23は坏の底部、24は長胴甕の口縁部であり、時期は８世紀後半と考える。

ＳＫ・ＳＰ・ＳＦ出土土器（第15図　写真図版17）［遺物番号25～35］

25はSK03から出土した須恵器の坏蓋で、時期は８世紀前半である。26はSK04から出土した灰釉陶器の長頸壺で、時期は９世紀代である。27と28はSK09から出土した須恵器の長頸壺と皿で、時期は８世紀後半であろう。29と30はSP04から出土した手づくね土器と土師器の甕底部である。

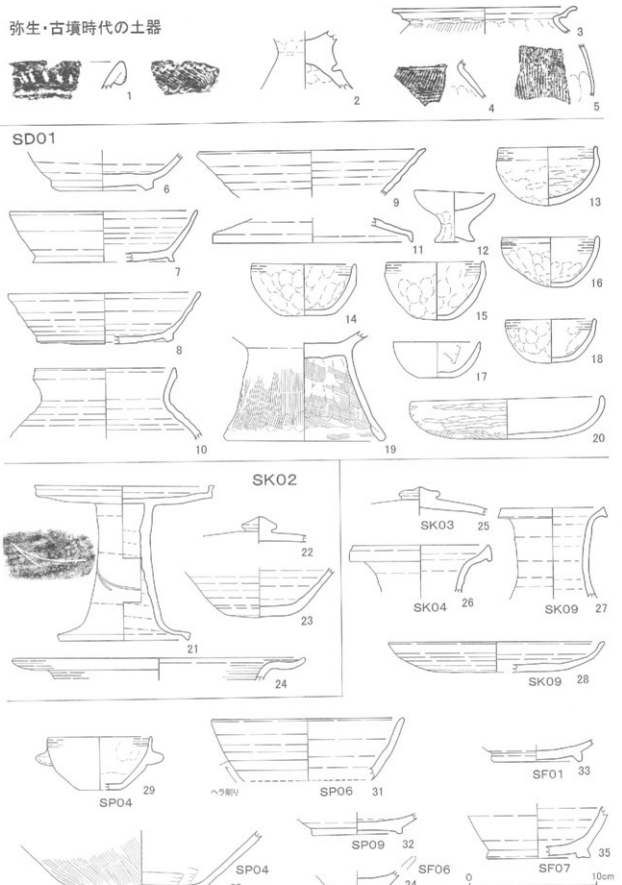
31はSP06から出土した須恵器の箱坏で、８世紀初頭である。32はSP09から出土した灰釉陶器の碗で、９世紀前半である。33はSF01から出土した灰釉陶器の碗、34はSF06から出土した山茶碗の小皿、35はSF07から出土した須恵器の壺底部である。

ＳＸ出土土器（第16図　写真図版17）［遺物番号36～69］

36は須恵器の坏、37は浜北産の灰釉陶器の碗である。38は高台の低い山茶碗で、内面全体に墨が付着している。面がやや滑らかであるが、墨を擦った痕跡は残っていない。39は台付甕の台部破片、40は土師器坏蓋のつまみ部分である。41は高台のやや高い山茶碗の底部で、12世紀のものである。42は須恵器壺の底部、43は須恵器の坏蓋である。

44～50がSX22から出土した。44は土師器の甕の口縁部、45は須恵器の箱坏、46は灰釉陶器の小型長頸壺である。47は尾張産（Ｋ－14窯式）の灰釉陶器の碗である。内面に塗られた灰釉が緑に発色している。48は角高台をもつ皿で、内外面に灰釉が見られない。49は尾張産（Ｋ－14窯式）の灰釉陶器の皿である。50は比較的高い高台をもつ初期の山茶碗である。

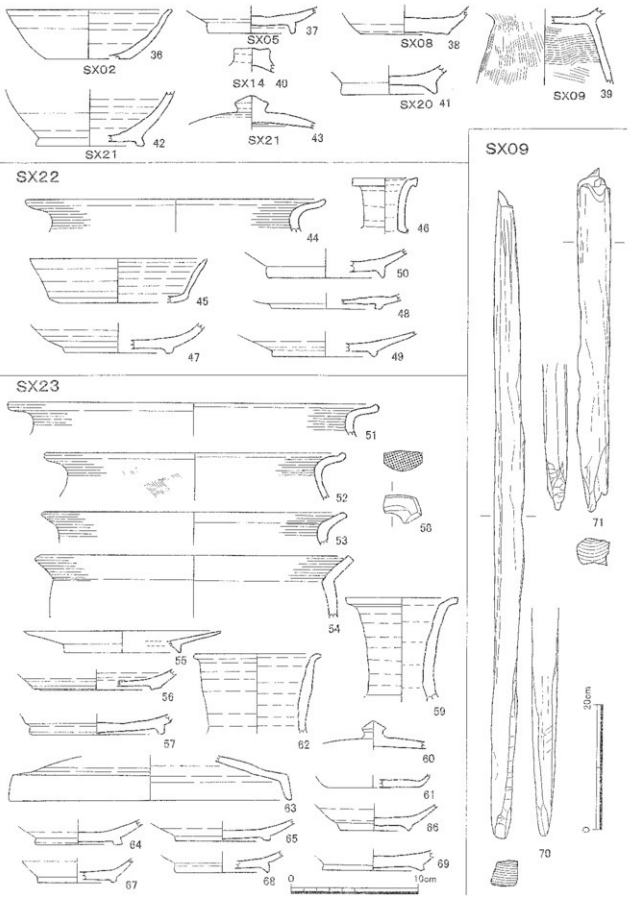
51～69がSX23から出土した。51～54は土師器の甕であり、54は三河型の甕である。55は土師器の有台皿と思われる。56と57は須恵器の有台坏である。58は平瓶の把手部分、59は長頸壺の口縁部、60は坏蓋、61は箱坏底部である。62は灰釉陶器平瓶の口の部分で、灰釉が内面にも塗られている。



第15図　遺物実測図（弥生・古墳時代の土器・遺構出土①）

表4　出土遺物観察表1

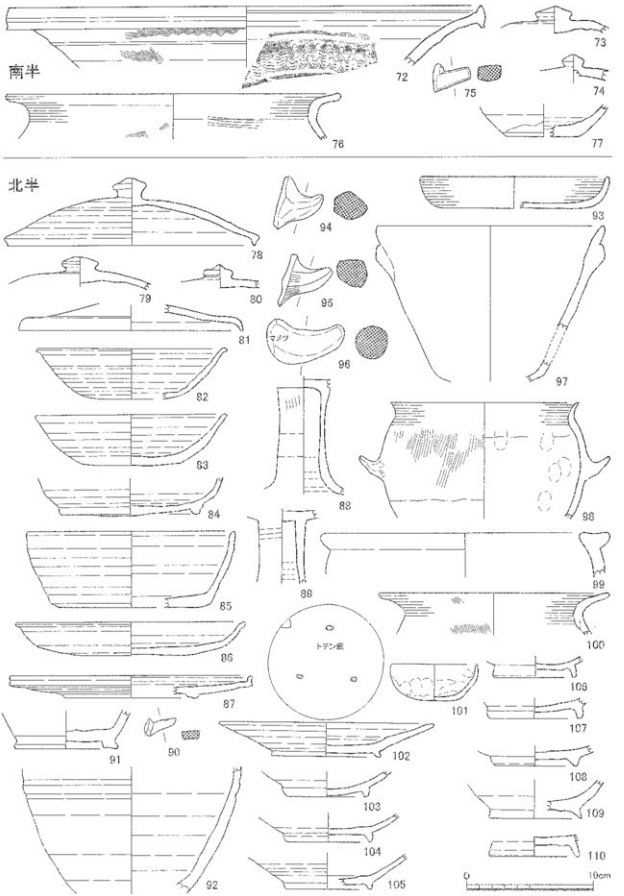
遺物番号	図	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	残存(%)	備考
1	15	16	弥生土器	壺	古代水田	A9		黄橙色	2	弥生後期（朝日式）
2	15	16	古式土師器	高杯	古代水田	A9		黄橙色	20	未完通の透かし孔一ヶ所
3	15	16	古式土師器	S字甕	SX08	B4	口径14.4	黒褐色	5	内外面煤付着
4	15		古式土師器	S字甕	SX08	B4		黒褐色	2	内外面煤付着、3と同一個体？
5	15		古式土師器	S字甕	SX08	B4		黒褐色	2	内外面煤付着、3と同一個体？
6	15		須恵器	有台坏	SD01	A9	底径8.0	灰色	50	
7	15	16	須恵器	有台坏	SD01	A9	口径14.7　器高4.0　底径11.2	灰色	25	
8	15	16	須恵器	有台坏	SD01	A9	口径14.6　器高4.0　底径10.5	灰色	40	外面黒色
9	15		須恵器	坏	SD01	A9	口径18.0	灰色	2	内外面無色
10	15		須恵器	広口壺	SD01	A9	口径11.9	灰色	5	内外面黒色
11	15		須恵器	蓋	SD01	A9	口径15.7	灰色	5	内外面黒色
12	15	16	手づくね土器	高坏形	SD01	A9	口径6.2　器高4.1　底径3.0	灰褐色	90	
13	15	16	土師器	坏	SD01	A9	口径7.6　器高4.6　器径8.0	黄褐色	99	
14	15	16	土師器	坏	SD01	A9	口径8.1　器高4.2	橙色	100	外側の1/2程度に黒斑
15	15	16	土師器	坏	SD01	A9	口径7.4　器高4.6	灰赤色	95	
16	15	16	土師器	坏	SD01	A9	口径7.4　器高3.9	灰白色	99	口縁にゆがみ
17	15	16	手づくね土師	坏形	SD01	A9	口径5.8　器高2.9	灰黄色	40	
18	15	16	土師器	坏	SD01	A9	口径6.8　器高3.5	橙色	50	
19	15	16	土師器	台付甕	SD01	A9	底径12.7	灰黄色	20	台部分・外面に煤付着
20	15	16	土師器	鉢	SD01	A9	口径15.0　器高3.2	黄橙色	99	内外面に赤彩
21	15	16	須恵器	高盤	SK02	A7	口径13.7　器高12.2　底径10.2	灰色	80	へラ記号あり
22	15		須恵器	坏蓋	SK02	A7	つまみ径2.7	灰色	15	
23	15		須恵器	坏	SK02	A7		灰白色	30	
24	15		土師器	甕	SK02	A7	口径23.1	黄褐色	5	
25	15	17	須恵器	坏蓋	SK03	A9	つまみ径3.1	灰白色	15	上面に自然釉
26	15		灰釉陶器	長頸壺	SK04	A8	口径10.7	灰白色	10	内外面施釉
27	15		須恵器	長頸壺	SK09	A10	口径8.0	灰白色	10	
28	15		須恵器	皿	SK09	A10	口径16.8　器高2.4	灰褐色	20	
29	15	17	手づくね土器	鉢形	SP04	A9	口径8.0　器高4.2	灰白色	20	
30	15	17	土師器	甕	SP04	A9	底径9.7	浅黄色	20	底部
31	15		須恵器	瓶耳	SP06	A9	口径15.0	灰色	20	
32	15		灰釉陶器	碗	SP09	A7	底径7.1	灰白色	30	内面施釉、尾張産K－14
33	15		灰釉陶器	碗	SF01	B8	底径7.0	灰白色	10	
34	15		山茶碗	小皿	SF06	A5	底径4.3	灰白色	30	内面に自然釉少々付着
35	15		須恵器	壺	SF07	A5	底径8.2	灰白色	10	底部
36	16		須恵器	坏	SX02	B2	口径13.0	灰白色	25	
37	16		灰釉陶器	碗	SX05	A3	底径6.4	灰白色	30	
38	16		山茶碗	碗	SX08	B4	底径5.8	灰白色	40	
39	16		土師器	台付甕	SX09	B4		灰黄色	10	外面煤付着
40	16		土師器	坏蓋	SX14	A5	つまみ径2.7	明赤褐色	5	
41	16		山茶碗	碗	SX20	B6	底径7.2	灰色	20	
42	16		須恵器	壺	SX21	B7	底径6.2	灰白色	10	
43	16		須恵器	坏蓋	SX21	B7	つまみ径2.1	灰白色	20	
44	16		土師器	甕	SX22	B8	口径25.6	橙色	3	
45	16		須恵器	瓶耳	SX22	B8	口径13.8　器高3.5　底径8.6	灰白色	8	
46	16	17	灰釉陶器	長頸壺	SX22	B8	口径5.0	灰白色	15	口縁部分、内外面施釉
47	16		灰釉陶器	碗	SX22	B8	底径8.2	灰白色	15	内面施釉、尾張産K－14
48	16		灰釉陶器	皿	SX22	B8	底径6.6	灰白色	10	尾張産K－14？
49	16		灰釉陶器	皿	SX22	B8	底径6.2	灰白色	30	内面施釉、尾張産K－14
50	16		山茶碗	碗	SX22	B8	底径9.0	灰色	10	
51	16		土師器	甕	SX23	A9	口径29.1	灰白色	8	
52	16		土師器	甕	SX23	A9	口径23.6	橙色	5	
53	16		土師器	鍋	SX23	A9	口径24.0	灰白色	10	
54	16		土師器	鍋（三河型）	SX23	A9	口径24.0	褐灰色	5	



第16図　遺物実測図（遺構出土②）

表5　出土遺物観察表2

遺物番号	図	写真図版	器種	器種	遺構	グリッド	法量(cm)	色調	残存(%)	備考
55	16		土師器	皿	SX23	A9	口径15.4　器高1.7　底径9.0	浅黄橙色	15	
56	16		須恵器	有台杯	SX23	A9	底径8.6	灰白色	10	
57	16		須恵器	有台杯	SX23	A9	底径10.6	灰白色	50	
58	16		須恵器	平瓶	SX23	A9		灰色	1	肩部分
59	16	17	須恵器	長頸壺	SX23	A9	底径8.7	灰色	30	口部分
60	16		須恵器	坏蓋	SX23	A9	つまみ径2.0	灰白色	20	
61	16		須恵器	鉢坏	SX23	A9	底径7.0	暗赤褐色	8	
62	16		灰釉陶器	平瓶	SX23	A9	口径9.6	灰白色	5	口部分,内外面施釉,尾張産K-14
63	16	17	灰釉陶器	壺蓋	SX23	A9	口径22.0	灰白色	20	外面施釉、尾張産 K-14
64	16		灰釉陶器	碗	SX23	A9	底径6.4	灰白色	20	内面施釉、尾張産K-14
65	16		灰釉陶器	碗	SX23	A9	底径7.5	灰白色	10	内面施釉、尾張産K-14
66	16	17	灰釉陶器	碗	SX23	A9	底径5.3	灰白色	50	
67	16		灰釉陶器	碗	SX23	A9	底径5.8	灰白色	20	尾張産O-53
68	16		灰釉陶器	碗	SX23	A9	底径7.0	灰白色	10	
69	16		山茶碗	碗	SX23	A9	底径7.8	灰白色	15	
72	17		須恵器	壺	古代水田	A5・B6	口径37.0	灰色	2	櫛描き波状文
73	17		須恵器	坏蓋	古代水田	A4	つまみ径2.8	灰白色	20	上面に自然釉
74	17		須恵器	坏蓋	古代水田	B5	つまみ径1.9	灰白色	8	
75	17		土師器	双耳坏	古代水田	A5		淡橙色	1	把手部分
76	17		土師器	甕	古代水田	A4	口径25.8	にぶい橙	10	
77	17		須恵器	壺	古代水田	B4	底径5.7	灰白色	10	底部
78	17	17	須恵器	坏蓋	古代水田	A9	口径19.3　器高3.4	灰色	50	
79	17		須恵器	坏蓋	古代水田	A9	つまみ径2.8	灰白色	40	内外面黒色
80	17		須恵器	坏蓋	古代水田	A8	つまみ径2.3	灰色	2	
81	17		須恵器	蓋	古代水田	A9	口径17.4	灰色	15	内外面黒色
82	17		須恵器	坏	古代水田	A9	口径14.6　器高4.0　底径6.3	灰白色	15	外面黒色
83	17		須恵器	坏	古代水田	A10	口径14.8　器高4.0　底径7.7	灰色	25	
84	17		須恵器	有台坏	古代水田	A9	底径10.7	灰白色	50	
85	17	17	須恵器	鉢坏	古代水田	A9	口径15.0　器高6.0　底径11.0	灰色	30	
86	17	17	須恵器	皿	古代水田	A9・A10	口径17.8　器高2.6　底径8.4	灰白色	40	
87	17		須恵器	盤	古代水田	A7	口径19.0　器高1.7	灰色	10	
88	17		須恵器	高盤	古代水田	B7		灰色	30	
89	17		須恵器	高盤	古代水田	B7		灰色	10	
90	17		須恵器	双耳坏	古代水田	A8		灰色	2	把手部分
91	17		須恵器	壺	古代水田	B8	底径7.9	灰色	10	底部
92	17		須恵器	壺	古代水田	A9	最大径17.2	灰白色	25	体部中央に沈線2条
93	17		土師器	皿	古代水田	A9	口径14.7　器高2.5　底径12.9	黄橙色	25	
94	17		土師器	甑	古代水田	A10		にぶい橙	2	把手部分
95	17		土師器	甑	古代水田	A10		褐灰色	2	把手部分
96	17		土師器	甑	古代水田	A8		灰黄色	2	把手部分、摩滅大
97	17	18	土師器	甑	古代水田	A10	口径17.8　器高12.3	淡橙色	50	
98	17	18	土師器	把手付鉢	古代水田	A9	口径14.8　器高9.2	黄橙色	25	
99	17	18	土師器	甕(清郷型)	古代水田	A8	口径22.8	赤褐色	5	
100	17		土師器	甕	古代水田	B7	口径18.0	赤褐色	5	
101	17	18	手づくね土師	坏形	古代水田	A9	口径6.5　器高3.0　底径5.8	にぶい橙	90	
102	17	18	灰釉陶器	段皿	古代水田	A9・B9	口径16.8　器高2.7　底径8.5	灰白色	60	トチンの痕跡,尾張産K-14
103	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A8	底径5.9	灰白色	50	重ね焼き痕あり
104	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A8	底径6.5	灰黄白色	40	重ね焼き痕あり
105	17		灰釉陶器	碗	古代水田	B7	底径6.6	灰白色	15	
106	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A7	底径5.0	灰白色	20	
107	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A8	底径7.9	灰白色	20	
108	17		灰釉陶器	碗	古代水田	B8	底径6.2	灰白色	25	
109	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A8	底径7.4	灰色	10	重ね焼き痕あり
110	17		灰釉陶器	碗	古代水田	A4	底径6.8	灰白色	20	高台にゆがみあり



第17図　遺物実測図（古代水田出土）

63は尾張産（K－14窯式）の灰釉陶器の壺蓋で、外面の灰釉が鮮やかな緑色である。64は尾張産（K－14窯式）の灰釉陶器の椀であり、内面に塗られた灰釉が緑色に発色している。65は尾張産（K－14窯式）の灰釉陶器の椀である。66と68は浜北産の灰釉陶器の碗である。尾張産の灰釉陶器と浜北産の灰釉陶器では、胎土と製作技術に歴然とした差がある。67は尾張産（O－53窯式）の灰釉陶器の椀である。69は高台の低い新しい時期の山茶椀である。

SX23出土土器は、数量が他のSXと比較して非常に多いこと、SR01と同じ９世紀前半の土器が主体となっていることから、SR01を切ってSX23が掘られたことは確実である。

ＳＸ０９出土木製品（第16図　写真図版17）［遺物番号70、71］

70は木製品を転用して杭にしたもの。転用前の加工痕が一部に残る。杭状加工は両面の２方向から削り、先端を平たく尖らせている。法量は、5.2cm×4.2cm×104.2cmを測る。71も杭で、先端を４方向から削り杭状加工をしている。法量は、5.5cm×4.3cm×60.4cmを測る。

古代水田出土土器（第17図　写真図版６・17・18）［遺物番号72～110］

調査区の北側と南側では、土器の出土量と性格が異なるため、Ｂ５杭を境にして南半と北半に分ける。

（南半）

72～77が調査区南半のⅣ層（古代水田上層）から出土した土器である。72は須恵器の甕口縁で、櫛描き波状文がある。73と74は坏蓋、77は自然釉が付着した壺底部である。75は土師器の双耳坏の把手、76は土師器の長胴甕口縁である。時期はすべて奈良時代（８世紀代）である。北半と比べて土器の出土数が少ないが、水田内に紛れ込む土器はこの程度であり、これが本来の水田の姿である。

（北半）

78～110が調査区北半から出土した土器である。78～92が須恵器、93～100が土師器、101が手づくね土器、102～110が灰釉陶器と、多量に出土している。北半で出土数が多くかつ灰釉陶器が目立つのはSR01が原因である。SR01から混入したものと推定する。

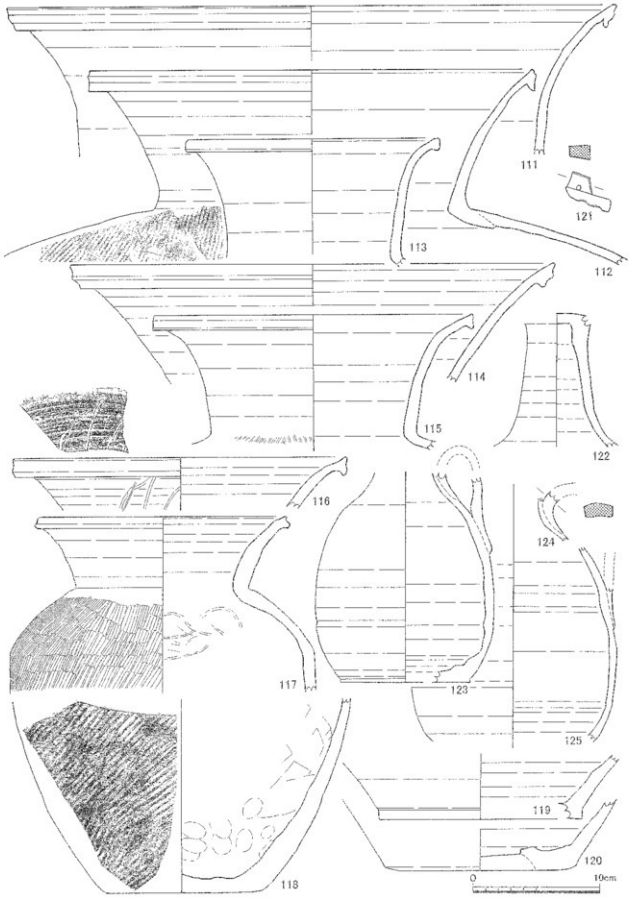
79は坏蓋、81は蓋、82は坏であるが、これらは表面が黒色に焼成されている。北壁部のSD01から出土した土器と同じであり、SD01内にあったものが水田に混入したと推測する。

88と89は高盤の脚部。96は甕の把手もしくは把手付鉢の把手であるが、水田内で踏まれたのか極度に摩滅している。99は清郷型の甕口縁。101は坏形の手づくね土器であり、おそらくSD01からの混入品であろう。102は尾張産（K－14窯式）の段皿であり、灰釉の緑色がきれいに出ている。時期は９世紀前半である。またこの段皿は古代水田出土の複数の破片とSR01出土の複数の破片と接合して完形品に近いものとなった。この点からもSR01の土器が古代水田に混入したことは確実である。103と104は三日月高台をもつ浜北産の灰釉陶器、108～110は三角高台をもつ浜北産の灰釉陶器である。103～110の時期は９世紀後半から11世紀である。

ＳＲ０１出土土器（第18・19図　写真図版６・18～20）［遺物番号111～168］

111～122と126～144が須恵器である。145～153が土師器、123～125と154～166が灰釉陶器、167と168が山茶椀である。SR01から出土した土器は甕や水瓶のような大物が目立つ。

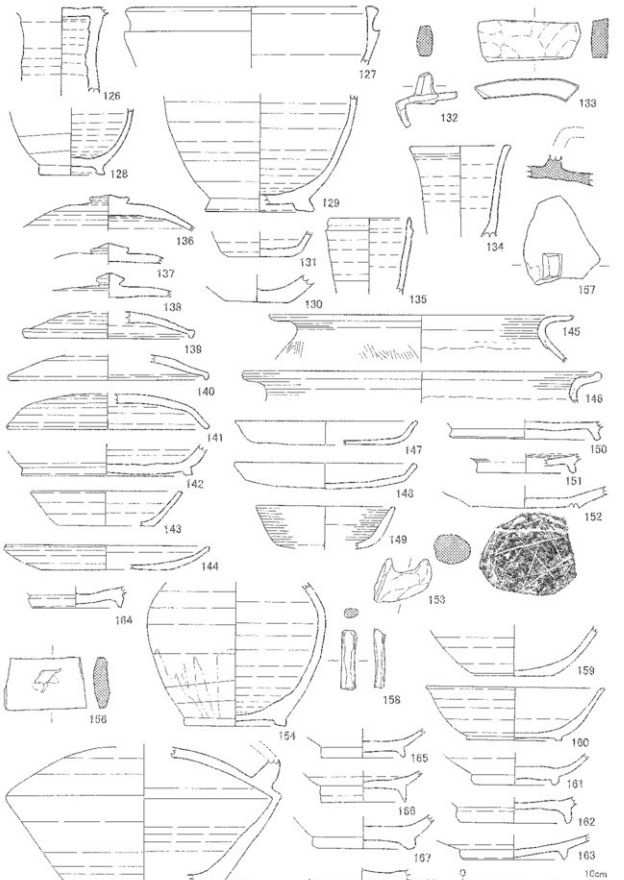
111～120は甕の口縁部および底部である。123は尾張産（K－14窯式）の水瓶である。124と125は接点がないが同一個体と推定する。これも尾張産（K－14窯式）の水瓶である。灰釉の緑色が鮮やかである。127は鉢の口縁部分。132と133は平瓶（須恵器）の把手部分である。135は底部が無くて残念であるが、コップ型坏と考える。136～141は蓋であり、141は平頂蓋であろう。147と148は土師器の皿であり、内外



第18図　遺物実測図（ＳＲ０１出土①）

表6　出土遺物観察表3

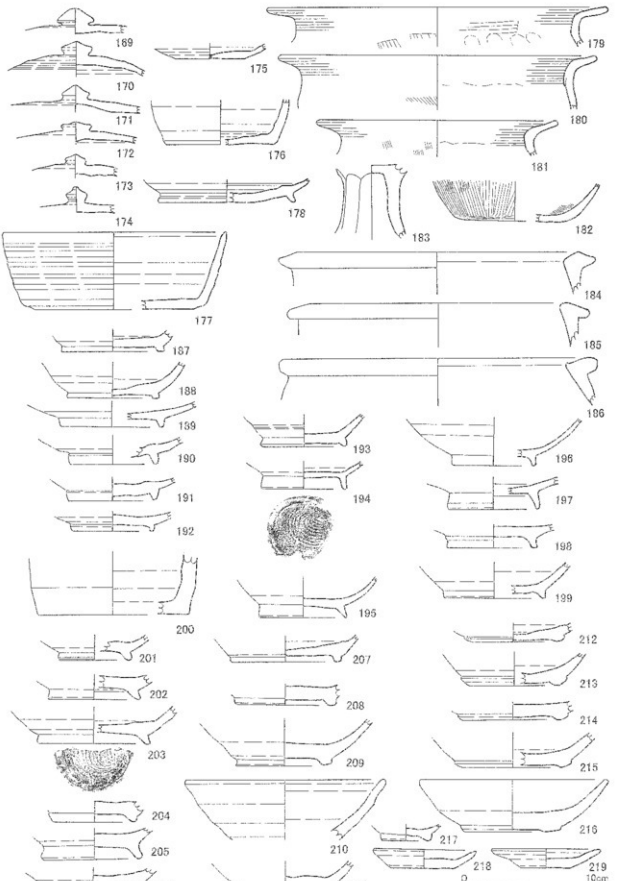
遺物番号	区	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量(cm)	色調	残存(%)	備考
111	18		須恵器	甕	SR01	A9・B9	口径47.8	灰色	5	
112	18	18	須恵器	甕	SR01	A9	口径34.8	灰色	10	
113	18	18	須恵器	壺	SR01	A9	口径19.6	灰色	15	
114	18		須恵器	甕	SR01	A9	口径38.0	灰色	3	
115	18	18	須恵器	甕	SR01	A9	口径24.2	灰白色	10	内面に自然釉
116	18		須恵器	壺	SR01	A10	口径26.0	灰色	1	内面に自然釉
117	18	18	須恵器	甕	SR01	A9	口径18.4	灰色	20	内面に自然釉
118	18	19	須恵器	壺	SR01	A9	底径12.4	灰色	20	外面たたき・内面なで
119	18		須恵器	甕	SR01	B9	底径15.8	灰色	5	底部、底に自然釉付着
120	18		須恵器	甕	SR01	A9	底径15.0	灰色	10	底部
121	18	19	須恵器	短頸壺	SR01	A10	孔φ9.4	灰色	1	耳部分
122	18	19	須恵器	高盤	SR01	B9	底径9.8	灰色	50	脚部
123	18	6	灰釉陶器	水瓶	SR01	A9	最大径12.0　底径10.0	灰白色	40	外面施釉、尾張産K－14
124	18	19	灰釉陶器	水瓶	SR01	A9		灰白色	2	把手部分施釉、尾張産K－14
125	18	6	灰釉陶器	水瓶	SR01	A9・B9	最大径16.4	灰白色	40	外面施釉、尾張産K－14
126	19		須恵器	高坏	SR01	A9		灰色	20	脚部
127	19		須恵器	鉢	SR01	A8	口径18.4	灰色	5	
128	19	19	須恵器	小壺	SR01	A9・B9	底径5.6	灰白色	30	底に自然釉
129	19		須恵器	壺	SR01	A9・B9		灰色	20	底部
130	19		須恵器	壺	SR01	A9		灰色	5	内面に自然釉、底部
131	19		須恵器	坏	SR01	A9・B10	底径5.1	灰色	30	底部
132	19		須恵器	平瓶	SR01	A9		灰白色	2	把手部分
133	19	19	須恵器	平瓶	SR01	A9		灰色	3	把手部分
134	19	19	須恵器	平瓶	SR01	A9	口径8.0	灰色	10	口部分
135	19		須恵器	コップ型?	SR01	A8	口径6.4	灰色	5	
136	19		須恵器	坏蓋	SR01	A9	つまみ径3.2	灰色	25	
137	19		須恵器	坏蓋	SR01	A10	つまみ径3.1	灰白色	30	
138	19		須恵器	坏蓋	SR01	A8	つまみ径2.2	灰色	40	
139	19		須恵器	蓋	SR01	A8	口径13.0　器高2.1	灰色	10	
140	19		須恵器	蓋	SR01	A9	口径15.4	灰色	10	
141	19	19	須恵器	平瓶蓋	SR01	B9	口径15.6　器高2.8	灰色	50	外面に墨痕あり
142	19		須恵器	有台坏	SR01	A8・A9	底径12.9	灰色	15	
143	19	19	須恵器	杯	SR01	A9	口径11.6　器高2.8　底径6.7	灰色	50	
144	19		須恵器	皿	SR01	A9	口径10.0　器高1.8	灰色	30	
145	19		土師器	甕	SR01	A9	口径24.0	にぶい橙	5	
146	19		土師器	甕	SR01	A9	口径28.4	灰白色	5	
147	19	19	土師器	皿	SR01	A8	口径14.5　器高1.9　底径12.0	にぶい橙	50	内外面に赤彩
148	19	19	土師器	皿	SR01	A8	口径14.0　器高2.0　最大径14.4	淡黄色	40	内外面に赤彩が残る
149	19		土師器	杯	SR01	A8	口径16.8　器高3.4	灰白色	25	内外面に赤彩が残る
150	19		土師器	有台皿	SR01	A9	底径11.2	黄橙色	20	一部に赤彩残る
151	19		土師器	有台皿	SR01	A8	底径7.6	黄橙色	20	内面赤彩・ヘラ磨き
152	19	19	土師器	有台皿	SR01	A9		黄色	40	内外面赤彩
153	19		土師器	鍋	SR01	B10		赤茶色	2	把手部分
154	19	19	灰釉陶器	壺	SR01	A9・B10	底径8.0	灰白色	40	施釉、焼きぶくれあり
155	19	6	灰釉陶器	平瓶	SR01	A9	底径10.2	灰白色	40	施釉
156	19		灰釉陶器	平瓶	SR01	B9		灰色	2	把手部分・施釉
157	19		灰釉陶器	平瓶	SR01	A9		灰色	3	把手部分
158	19	19	灰釉陶器	小型平瓶?	SR01	A8		灰白色	2	把手部分・施釉
159	19		灰釉陶器	鉢	SR01	A9	底径6.6	灰白色	35	内面施釉、尾張産K－14
160	19	20	灰釉陶器	鉢	SR01	B8	口径14.0　器高4.2　底径7.4	灰白色	60	内外面施釉、尾張産K－14
161	19	20	灰釉陶器	鉢	SR01	A9	底径6.3	灰白色	40	裏面に黒斑・重ね焼き痕あり
162	19		灰釉陶器	鉢	SR01	A9	底径7.8	灰白色	20	
163	19		灰釉陶器	皿	SR01	B9	底径6.6	灰白色	25	
164	19		灰釉陶器	鉢	SR01	A8	底径7.0	灰色	15	
165	19		灰釉陶器	鉢	SR01	B10	底径6.3	灰白色	5	



第19図　遺物実測図（ＳＲＯ１出土②）

表7　出土遺物観察表4

遺物番号	図	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	残存（%）	備考
166	19		灰釉陶器	椀	ＳＲ０１	A10	底径6.6	灰白色	10	
167	19		山茶椀	椀	ＳＲ０１	A10	底径7.7	灰白色	20	自然釉・重ね焼き痕あり
168	19		山茶椀	椀	ＳＲ０１	A10・B10	底径6.3	灰白色	20	内面に墨痕
169	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ａ７	つまみ径2.9	灰色	40	外面に自然釉
170	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ａ７	つまみ径2.3	灰色	20	
171	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ｂ６	つまみ径2.2	灰色	30	
172	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ｂ５	つまみ径2.3	灰色	15	
173	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ａ６	つまみ径1.5	灰色	40	
174	20		須恵器	坏蓋	中世水田	Ａ７	つまみ径1.6	灰色	15	
175	20		須恵器	坏	中世水田	Ａ２	底径5.4	灰色	20	
176	20		須恵器	鏡坏	中世水田	Ａ７	底径8.4	灰色	25	
177	20		須恵器	高坏	中世水田	Ｂ６	口径7.4　器高6.1　底径12.4	灰色	30	
178	20		須恵器	有台坏	中世水田	Ｂ６	底径10.7	灰色	30	
179	20		土師器	甕	中世水田	Ａ５	口径13.3	浅黄橙色	5	
180	20		土師器	甕	中世水田	Ａ７	口径24.8	浅黄橙色	5	
181	20		土師器	甕	中世水田	Ａ７	口径18.6	浅黄橙色	5	
182	20		土師器	壺	中世水田	Ａ７	底径7.0	灰黄色	8	底部外面にスス付着
183	20	20	土師器	高盤	中世水田	Ａ６		灰黄色	20	赤彩が一部に残る
184	20		土師器	鍋(清郷型)	中世水田	Ｂ４	口径25.0	暗褐色	5	
185	20	20	土師器	鍋(清郷型)	中世水田	Ａ９	口径23.8	暗褐色	5	
186	20		土師器	鍋(清郷型)	中世水田	Ａ５	口径25.0	暗褐色	5	
187	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ６	底径8.0	灰白色	20	内面に施釉、尾張産K-14
188	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ５	底径7.0	灰白色	30	内面に施釉、尾張産K-14
189	20		灰釉陶器	皿	中世水田	Ａ５・Ａ６	底径8.0	灰白色	30	内面に施釉、尾張産K-14
190	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ６	底径6.7	灰白色	20	重ね焼き痕あり
191	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ｂ６	底径6.5	灰白色	50	重ね焼き痕あり
192	20		灰釉陶器	皿	中世水田	Ａ５	底径6.2	灰白色	40	重ね焼き痕あり
193	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ｂ４	底径6.4	灰白色	40	
194	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ｂ７	底径6.4	灰白色	50	内面に自然釉
195	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ７	底径6.2	灰白色	60	
196	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ６・Ａ７	底径6.4	灰白色	35	
197	20		灰釉陶器	椀	中世水田	Ａ５	底径6.6	灰白色	50	
198	20		灰釉陶器	碗	中世水田	Ｂ４	底径8.4	灰白色	30	自然釉・重ね焼き痕あり
199	20		灰釉陶器	碗	中世水田	Ａ４	底径7.8	灰白色	20	自然釉・重ね焼き痕あり
200	20		中世陶器	壺	中世水田	Ａ６	底径11.9	灰色	8	
201	20		山茶椀	小碗	中世水田	Ａ５	底径5.6	灰白色	40	重ね焼き痕あり
202	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ５	底径6.8	灰白色	50	
203	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ４	底径7.0	灰白色	30	
204	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ４	底径8.7	灰白色	40	
205	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ４	底径6.1	灰白色	40	
206	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ４	底径7.4	灰白色	40	
207	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ５	底径7.2	灰白色	60	
208	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ２	底径8.0	灰白色	40	
209	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ３	底径7.2	灰白色	70	内面に炭化物付着
210	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ５	口径15.4	灰白色	20	
211	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ５	底径6.5	灰白色	60	内面に墨痕あり
212	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ６	底径6.2	灰白色	40	
213	20		山茶椀	椀	中世水田	Ａ４	底径7.0	灰白色	40	
214	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ３	底径7.8	灰白色	35	内面全体に墨痕あり
215	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ７	底径9.2	灰白色	40	
216	20		山茶椀	椀	中世水田	Ｂ５	底径7.5	灰白色	70	
217	20		山茶椀	小碗	中世水田	Ａ７	底径3.6	灰白色	60	
218	20	20	山茶椀	小皿	中世水田	Ａ７	口径7.9　器高2.0　底径4.8	灰白色	80	内面に自然釉
219	20		山茶椀	小皿	中世水田	Ｂ５	口径8.7　器高1.5　底径5.8	灰白色	60	内面に自然釉
220	21	20	須恵器	壺	中世水田	Ａ９	口径44.6	灰色	10	櫛描き波状文



第20図　遺物実測図（中世水田出土南半）

面に赤彩が残る。154は灰釉陶器の長頸壺、155は灰釉陶器の平椀である。154と155には灰釉が厚く塗られているが、やや粗雑な点もみられるため地元産と考える。159は尾張産（K－14窯式）の碗である。高台が細く、1条の沈線が廻る。160はこれも尾張産（K－14窯式）の碗である。161～166は三日月高台から三角高台をもつ碗である。

中世水田出土土器（第20～23図　写真図版20・21）［遺物番号169～328］

調査区の北側と南側では、土器の出土量と性格が異なるため、B5杭を境にして南半と北半に分ける。

（南半）

169～178が須恵器である。169～174が宝珠形つまみを持つ坏蓋、175～178が坏、箱坏、有台坏。179～186が土師器である。179～181が長胴甕の口縁部、182が長胴甕の底部、183が高盤の脚部、184～186が清郷型の甕である。187～199が灰釉陶器である。187～189は角高台を持ち内面が施釉された、尾張産K－14窯式の碗である。189については皿の可能性もある。190～192は三日月高台を持ち、193～199は三角高台を持つ灰釉陶器の碗と皿であり、すべて浜北産である。200は中世陶器の壺底部と見られる。201～219が山茶碗である。201と217が小碗で、218と219が小皿である。

（北半）

北半は南半と比較すると、大物が多くまた数も多く出土している。これは13世紀にSR01を削平して埋め立てて中世水田を拡大・整備した結果と考える。

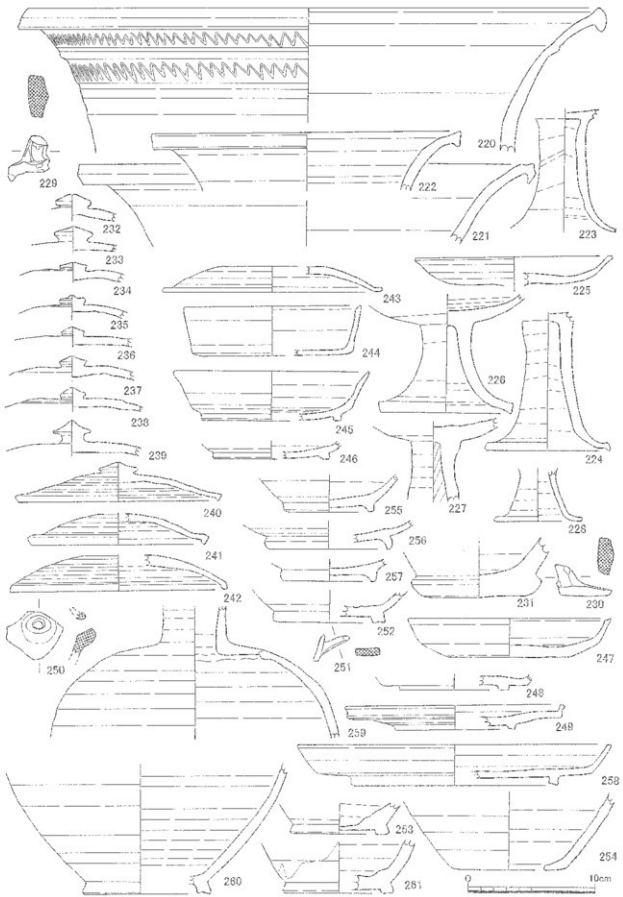
220～254が須恵器である。220～222が甕の口縁部、223と224が高盤、225～228が高坏、229と230が平瓶の把手、231がこね鉢である。232～240が坏蓋で、241は蓋であるが宝珠つまみの有無は不明、242と243が平底蓋である。244は箱坏で、245と246は有台坏、247～249は皿と盤、250ははそうの口の部分、251は双耳坏の把手（耳）である。254は底部が開いているから甕であろう。255～298は灰釉陶器である。255～257は碗である。258は有台皿、259は長頸壺の頸から体部にかけての部分、270～295は灰釉陶器の碗である。270と271は角高台を持ち、内面が施釉された、尾張産K－14窯式の碗である。299～315は土師器である。299と300は土師質の碗または皿である。301～307は甕の口縁部、308は甕の底部、309は三河型の甕、310と311は清郷型の甕である。316～328は山茶碗である。316～323は比較的高台の高い山茶碗、324～325は高台の低い新しい山茶碗である。326～328は小皿である。

白磁・青磁（第23図　写真図版8）［遺物番号329～344］

329～331、343の白磁と332～342、344の青磁、合計16点が出土した。329～331は白磁碗の玉縁口縁部分の小破片、332～335は青磁碗の口縁部分であり、334と335には片彫蓮弁文が見える。336は青磁碗の底部で、見込に1.9cm×1.9cmの「金玉満堂」の印がある。「満」の字と「堂」の字の半分が欠損しているが、間違いなかろう。337は青磁碗の口縁部分で、片彫蓮弁文が施されている。338は青磁碗の体部破片で、片彫蓮弁文が施されている。339～341は青磁の小破片であるが、器形は不明である。342と344は底部の小破片である。

天目茶碗（第23図）［遺物番号　345］

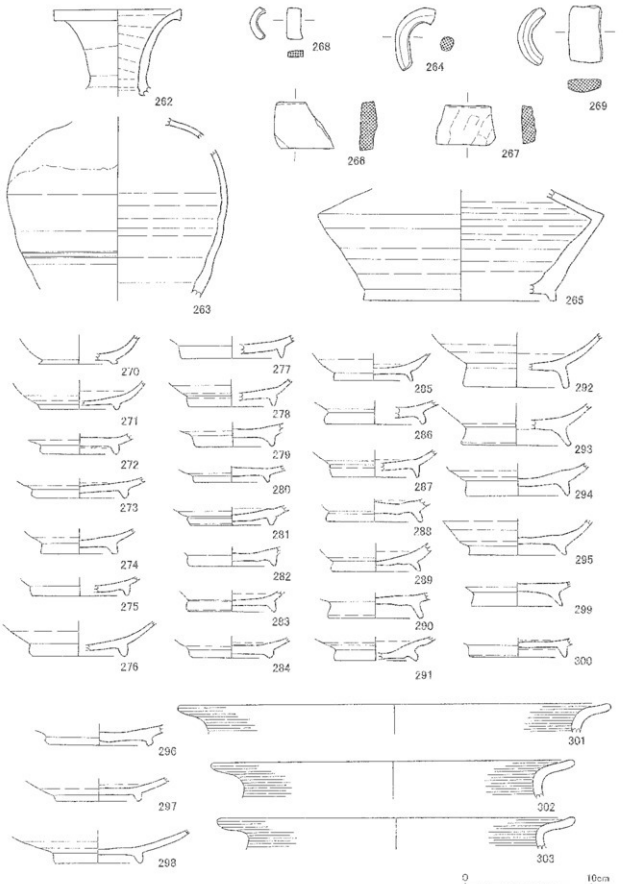
天目茶碗の少破片が調査区の南（A3グリッド）の中世水田から出土した。時期は15世紀である。この時期の遺物はこれ1点である。近くの集落は衰退したと考える。



第21図　遺物実測図（中世水田出土北半①）

表８　出土遺物観察表５

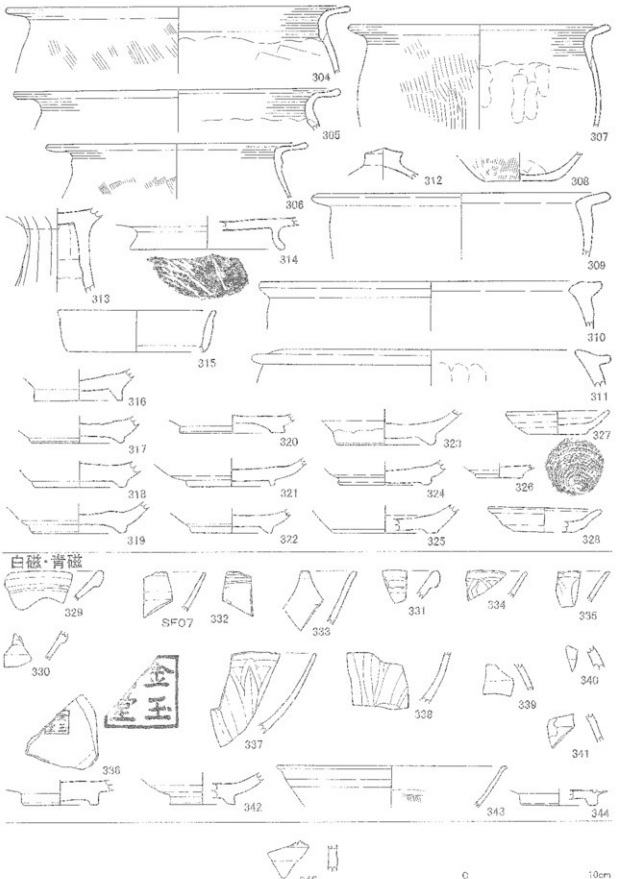
遺物番号	区	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量(cm)	色調	残存(%)	備考
221	21		須恵器	甕	中世水田	B10	口径35.6	灰色	2	
222	21		須恵器	甕	中世水田	A9	口径24.4	灰色	3	内面に自然釉
223	21	20	須恵器	高盤	中世水田	A10	底径8.8	灰色	45	脚部
224	21	20	須恵器	高盤	中世水田	A9	底径9.8	灰色	50	脚部
225	21		須恵器	高坏	中世水田	A9・A10	口径15.2	灰色	30	坏部
226	21	20	須恵器	高坏	中世水田	A9	底径10.2	灰色	70	
227	21		須恵器	高坏	中世水田	A8		灰白色	30	脚部
228	21		須恵器	高坏	中世水田	B9	底径7.0	灰色	30	
229	21		須恵器	平瓶	中世水田	A8		灰色	2	把手部分
230	21		須恵器	平瓶	中世水田	A6		灰色	3	把手部分　全面に自然釉
231	21		須恵器	こね鉢	中世水田	A9	底径8.4	灰色	20	底部
232	21		須恵器	坏蓋	中世水田	B10	つまみ径2.8	灰色	10	
233	21		須恵器	坏蓋	中世水田	A9	つまみ径2.9	灰色	10	
234	21		須恵器	坏蓋	中世水田	B8	つまみ径2.2	灰色	10	
235	21		須恵器	坏蓋	中世水田	A9	つまみ径2.1	灰色	10	
236	21		須恵器	坏蓋	中世水田	A9	つまみ径1.8	灰色	10	
237	21		須恵器	坏蓋	中世水田	A10	つまみ径2.2	灰白色	10	
238	21		須恵器	坏蓋	中世水田	B10	つまみ径2.0	暗灰色	40	
239	21		須恵器	坏蓋	中世水田	B10	つまみ径2.0	灰色	50	
240	21	20	須恵器	坏蓋	中世水田	A10	口径15.7　器高3.1　つまみ径3.0	灰色	70	
241	21		須恵器	蓋	中世水田	A10	口径13.5	暗灰色	10	
242	21		須恵器	平頂蓋	中世水田	A9	口径16.8	灰白色	25	
243	21		須恵器	平頂蓋	中世水田	A9	口径17.3	暗灰色	25	
244	21	20	須恵器	箱坏	中世水田	A9	口径13.8　器高4.0　底径12.0	灰白色	25	
245	21		須恵器	有台坏	中世水田	A10	口径15.2　器高3.9	灰白色	25	内外面黒色
246	21		須恵器	有台坏	中世水田	A9	底径9.0	灰色	20	
247	21	20	須恵器	皿	中世水田	A10	口径15.8　器高3.1　底径10.5	灰色	50	
248	21		須恵器		中世水田	A9	底径8.5	灰色	40	
249	21		須恵器	盤	中世水田	A9	器高2.0　底径9.4	灰色	20	
250	21	21	須恵器	はそう	中世水田	B9		灰色	2	口部分
251	21		須恵器	双耳坏	中世水田	A8		灰色	2	把手部分（耳）
252	21		須恵器	壺	中世水田	B10		灰色	25	内面底部に自然釉
253	21		須恵器	壺	中世水田	A10	底径7.4	灰色	10	
254	21		須恵器		中世水田	A9	底径9.0	灰色	10	
255	21		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径7.0	灰色	50	内面全体に墨痕
256	21		灰釉陶器	碗	中世水田	A9		灰色	15	重ね焼き痕あり
257	21		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径7.4	灰色	20	
258	21		灰釉陶器	有台皿	中世水田	A9	底径16.3	灰色	40	上面に自然釉
259	21	21	灰釉陶器	長頸壺	中世水田	A9	最大径10.5	灰白色	50	外面全面にハケ塗り施釉
260	21		灰釉陶器	壺	中世水田	A9	底径11.0	灰白色	25	底部内面に自然釉付着
261	21		灰釉陶器	壺	中世水田	B5	底径8.5	灰色	10	底部内面に自然釉付着
262	22	21	灰釉陶器	長頸壺	中世水田	A9	口径9.8	灰白色	20	外面施釉、口縁部
263	22	21	灰釉陶器	長頸壺	中世水田	A9		灰白色	70	外面施釉、262と同一個体？
264	22	21	灰釉陶器	長頸壺	中世水田	A8・B8		灰白色	2	把手部分（耳）、全面施釉
265	22	21	灰釉陶器	平瓶	中世水田	A9	底径15.0	灰白色	30	外面施釉
266	22		灰釉陶器	平瓶	中世水田	A8		灰白色	2	把手部分、外面施釉、尾張産K－14
267	22		灰釉陶器	平瓶	中世水田	A9		灰白色	2	把手部分
268	22		灰釉陶器	小型水瓶	中世水田	A9		灰白色	2	把手部分
269	22	21	灰釉陶器	水瓶	中世水田	A9		灰白色	3	把手部分、全面施釉
270	22		灰釉陶器	碗	中世水田	B9	底径5.8	灰白色	10	内面施釉、尾張産K－14
271	22		灰釉陶器	碗	中世水田	A8	底径6.0	灰白色	30	内面施釉、尾張産K－14
272	22		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径5.6	灰色	10	
273	22		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径6.9	灰白色	50	
274	22		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径5.7	灰白色	60	底部裏面に朱墨痕、転用硯？
275	22		灰釉陶器	碗	中世水田	A9	底径7.4	灰白色	15	



第22図　遺物実測図（中世水田出土北半②）

表9　出土遺物観察表6

遺物番号	図	写真図版	種類	器種	遺構	グリッド	法量(cm)	色調	残存(%)	備考
276	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径7.0	灰白色	10	
277	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径7.8	灰白色	15	重ね焼き痕あり、自然釉
278	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径6.6	灰白色	50	重ね焼き痕あり
279	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径5.8	灰白色	25	
280	22		灰釉陶器	椀	中世水田	B7	底径5.8	灰白色	40	
281	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径6.1	灰白色	30	重ね焼き痕あり
282	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A10	底径6.9	灰白色	10	
283	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A8	底径7.0	灰白色	15	重ね焼き痕あり
284	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9・A10	底径6.8	灰白色	30	内面に自然釉
285	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径6.1	灰白色	40	重ね焼き痕あり
286	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径7.6	灰白色	40	重ね焼き痕あり
287	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径6.6	黄橙色	45	
288	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径7.3	灰白色	40	
289	22		灰釉陶器	椀	中世水田	B10	底径6.3	灰白色	30	
290	22		灰釉陶器	椀	中世水田	B10	底径7.4	灰白色	40	重ね焼き痕あり
291	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径6.4	灰白色	20	重ね焼き痕あり
292	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径7.8	灰白色	20	
293	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A8	底径8.8	灰白色	30	
294	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A9	底径8.0	灰白色	50	
295	22		灰釉陶器	椀	中世水田	A8	底径7.8	灰白色	40	重ね焼き痕あり
296	22		灰釉陶器		中世水田	A9	底径7.7	灰白色	40	
297	22		灰釉陶器	皿	中世水田	A9	底径6.4	灰白色	40	重ね焼き痕あり
298	22		灰釉陶器	皿	中世水田	A7～A9	底径6.6	灰白色	60	重ね焼き痕あり
299	22		土師器		中世水田	B9		黄白色	20	
300	22		土師器		中世水田	A9		黄白色	10	高台一部に赤彩が残る
301	22		土師器	甕	中世水田	A7	口径34.0	黄灰色	5	
302	22		土師器	甕	中世水田	A9	口径28.6	黄橙色	5	
303	22		土師器	甕	中世水田	A9	口径28.1	黄橙色	5	
304	23	21	土師器	甕	中世水田	A9	口径27.0	黄橙色	5	
305	23		土師器	甕	中世水田	A9	口径25.7	黄橙色	5	
306	23		土師器	甕	中世水田	A9	口径20.0	黄橙色	5	
307	23		土師器	甕	中世水田	A9	口径19.8	黄橙色	5	
308	23		土師器	甕	中世水田	A8	底径6.0	黄橙色	5	底部、外面にスス付着
309	23		土師器	鍋(三河型)	中世水田	A9	口径23.5	黄橙色	5	
310	23	21	土師器	鍋(清郷型)	中世水田	A8	口径27.0	黒褐色	5	
311	23		土師器	鍋(清郷型)	中世水田	A9	口径22.6	暗褐色	5	
312	23		土師器	庇付	中世水田	A9	つまみ径3.1	黄橙色	5	
313	23	21	土師器	鍋蓋	中世水田	A9		黄橙色	20	一部に赤彩が残る
314	23		土師器	脚付皿	中世水田	B9	底径11.8	灰色	30	
315	23		土師器	箱形	中世水田	B9	口径12.2　器高3.5　底径10.5	橙色	40	内外面に赤彩が残る
316	23		山茶碗	椀	中世水田	A10	底径6.8	灰白色	20	内面に自然釉
317	23		山茶碗	椀	中世水田	B6	底径7.3	灰白色	40	重ね焼き痕あり
318	23		山茶碗	椀	中世水田	A9	底径7.0	灰白色	40	
319	23		山茶碗	椀	中世水田	A9	底径6.4	灰白色	20	内面に自然釉
320	23		山茶碗	椀	中世水田	B9	底径8.2	灰白色	20	
321	23		山茶碗	椀	中世水田	B6	底径6.2	灰白色	30	内面に自然釉
322	23		山茶碗	椀	中世水田	A9	底径6.2	灰白色	40	
323	23		山茶碗	椀	中世水田	B6	底径7.1	灰白色	60	内面に自然釉
324	23		山茶碗	椀	中世水田	A9	底径6.3	灰白色	15	
325	23		山茶碗	椀	中世水田	A10	底径7.4	灰白色	10	
326	23		山茶椀	小皿	中世水田	B9	底径3.6	灰白色	50	底部
327	23	21	山茶碗	小皿	中世水田	A9	口径8.2　器高1.9　底径4.8	灰色	98	底部に糸切り痕
328	23	21	山茶碗	小皿	中世水田	A8	口径8.8　器高1.9　底径3.8	灰白色	60	内面に自然釉
346	23		中世陶器	天目茶碗	中世水田	A3		灰白色	2	



第23図　遺物実測図（中世水田出土北半③・白磁・青磁）

墨書・刻書土器（第25図　写真図版８・22・23）［遺物番号　346～373］

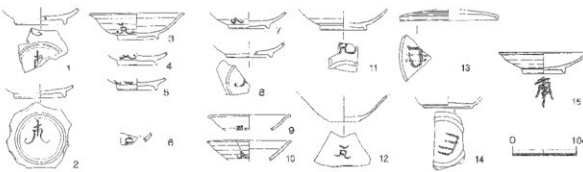
346は灰釉陶器（尾張産Ｋ－14窯式）の碗で、底部外面に大きく「生」と書かれている。墨書の残りは悪く、薄い。時期は９世紀前半である。347は灰釉陶器の碗で、底部外面に１条の横線がある。時期は９世紀前半であろう。348は灰釉陶器（尾張産Ｋ－14窯式）の皿で、底部外面に１条の線と丸がある。時期は９世紀前半である。349は須恵器箱坏で、底部外面に「生」とある。350は坏の底部と体部に横位で墨書がある。現状では欠損したり消えたりして違って見えるが、同じ文字または記号を書いたと推定する。これは則天文字もしくは篆書体などの特殊文字である可能性がある。８世紀末から９世紀前半である。351は灰釉陶器の皿で、底部外面に「生」とある。352は平瓜蓋の外面に大きく「生」と書かれている。墨書の残りは良い。時期は９世紀前半である。353は須恵器の小破片に「千」とある。354は須恵器の蓋の小破片で、墨書があるが判読できない。355は須恵器の蓋の小破片で、「中」と書かれている。356は須恵器の平蓋で、内面に「中□」とある。357は須恵器の蓋の小破片で「中」とある。358は須恵器の蓋の小破片で、「中」と書かれている。359は須恵器の蓋の内面に、小さく「大」と書かれている。360～362は墨書が判読できない。363と364は「大」である。366は箱坏の底部外面に墨書があるが判読できない。368は土師器皿の底部外面に「十」とある。369は須恵器箱坏の内面底に、焼成前に「□十二日？」とヘラ描きされている。370は須恵器箱坏の内側の底に、焼成前に「大夫」とヘラ描きされている。371は山茶碗の底部外面に「佐」と書かれている。372は山茶碗の底部外面に曲がった線があるが、判読できない。373は山茶碗の底部外面に「の」と書かれている。

以上の墨書土器と刻書土器は、346～370の８世紀末～９世紀前半と、371～373の12世紀～13世紀の２時期に分けられる。

《特殊文字》

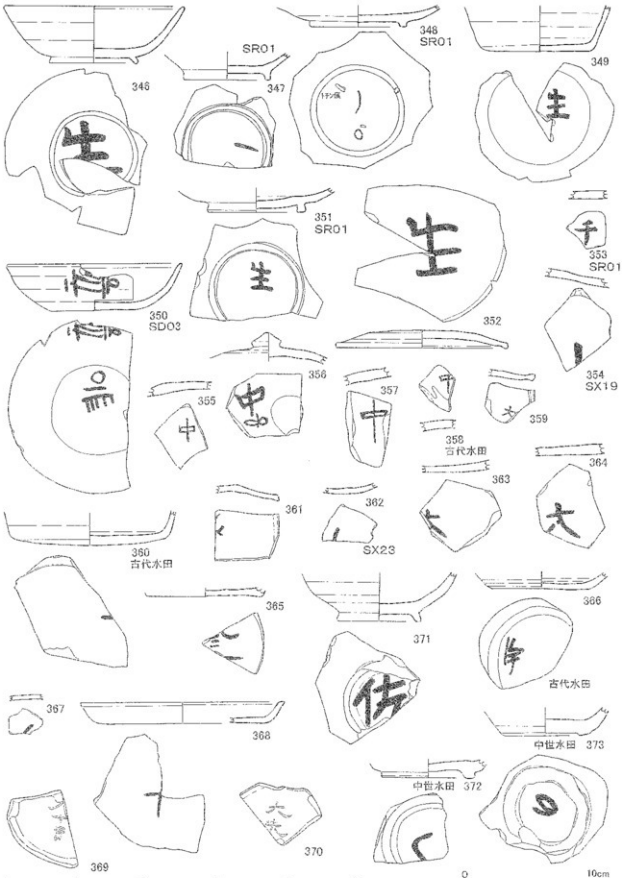
350の墨書土器は則天文字または篆書体等の特殊文字である可能性があるため、則天文字と篆書体について少し触れる。則天文字は唐の則天武后（624～705）が690年に独特の文字・17文字を考案し、その使用を全国に命じたものである。しかし705年の武后の死によって、中国ではその使用が禁じられた。日本には遣唐使によってもたらされ、地方に広く普及して行った。東日本の調査例では、一般集落遺跡からも多数発見されている（平川　2000）。則天文字は文字としてではなく、一種の吉祥または呪術的な意味をふくむ記号として普及したために、数多くの変形された字形が存在している。また則天文字は篆書体の影響を強く受けてつくられたため両者には類似した文字がある。特に「而」は則天文字か篆書体かの判別は難しい。

350が則天文字であると仮定すると、「○」が星で、「而」が天であり、星天と判読される。しかし疑問点も多く、引き続き調査研究の必要がある。第24図に周辺地域から出土した「而」の変形した字体の可能性のあるものを集成した。



１・２梅橋北遺跡、３～10川田・藤蔵淵遺跡、11～14御子ヶ谷遺跡、15諏田Ⅱ遺跡

第24図　宮竹野際遺跡周辺の特殊文字字集成図



第25図　遺物実測図（擂鉢土器・刻書土器）

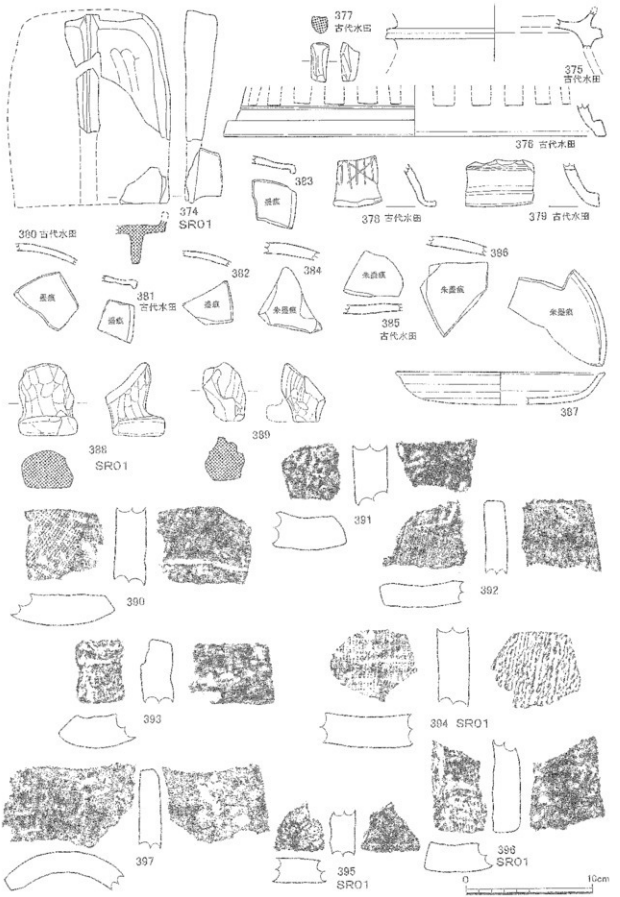
表10　墨書・刻書土器観察表

遺物番号	図	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	残存(%)	文字	備考
346	25		灰釉陶器	碗		A９	口径14.0　器高4.5　底径6.8	灰白色	60	「生」	内面施釉,尾張産K－14
347	25		灰釉陶器	碗	ＳＲ０１	Ｂ９	底径6.6	灰白色	40		
348	25		灰釉陶器	皿	ＳＲ０１	Ａ９	底径7.4	灰白色	60		内面施釉,尾張産K－14
349	25	22	須恵器	箱坏		Ａ９	底径8.0	赤褐色	65	「生」	
350	25	8・22	須恵器	坏	ＳＤ０３	Ａ９	口径13.6　器高3.7　底径7.0	灰色	65	不明	糸切り痕あり
351	25		灰釉陶器	皿	ＳＲ０１	Ａ９	底径7.4	灰色	60	「生」	重ね焼き痕あり
352	25	22	須恵器	平頂蓋		Ａ８	口径13.4	灰色	70	「生」	
353	25	22	須恵器		ＳＲ０１	Ａ10		灰色	2	「千」	
354	25		須恵器	蓋	ＳＸ１９	Ｂ６		灰色	15		
355	25		須恵器	蓋		Ａ９		灰色	2	「中」	
356	25		須恵器	坏蓋		Ａ７		灰色	35	「中□」	
357	25	22	須恵器	蓋		Ａ９		灰色	5	「中」	
358	25	22	須恵器	蓋	古代水田	Ａ９		灰色	2	「中」	
359	25		須恵器	蓋		Ａ８		灰色	2	「大」	
360	25		須恵器	箱坏	古代水田	Ａ10	底径11.4	暗灰色	40		
361	25		須恵器	蓋		Ａ８		灰色	10		
362	25		須恵器		ＳＸ２３	Ａ９		灰色	2		
363	25	22	須恵器			Ｂ５		灰色	15	「大」	
364	25	22	須恵器	箱坏		Ａ８		灰色	15	「大」	底部外面
365	25	22	須恵器	箱坏		Ａ７	底径9.0	灰色	10	「□□」	底部外面
366	25	22	須恵器	箱坏	古代水田	Ａ９	底径7.6	灰色	40	「□」	
367	25		須恵器			Ａ10		灰白色	2		
368	25		土師器	皿		Ａ９	口径16.0	淡橙色	60	「十」	内外面に赤彩
369	25	22	須恵器	箱坏		Ａ９	底径9.8	灰色	15	刻書「□十二月」?	焼成前内面にヘラ描き
370	25	8	須恵器	箱坏		Ａ９	底径9.0	灰色	15	刻書「大夫」	焼成前内面にヘラ描き
371	25		山茶碗	碗		Ａ９	底径6.4	黄灰色	40	「佐」	
372	25		山茶碗	碗	中世水田	Ｂ６	底径7.2	黄灰	20		
373	25	23	山茶碗	碗	中世水田	Ｂ10	底径7.0	灰色	50	「の」	

風字硯・円面硯（第26図　写真図版７・23）［遺物番号　374～379］

374の二面風字硯は２点の破片がSR01から、他の２点が中世水田下層から出土した。二面風字硯はSR01に廃棄されたが、中世の水田開発によって周辺に散乱したと考える。全体的に角張ってつくられており、また角をしっかりと出している。海には墨を擦ってできた窪みが残されている。375は円面硯上部の破片で、突帯が廻っている。復元すると突帯先端で径17.1cmになる。これはＢ４グリッドの古代水田から出土した。376は円面硯の脚台部の破片で、復元すると脚台部下端の径が約30cmとなり、一般集落遺跡では出土しない大きさである。破片上部に透かし孔の一部が残されていることから、円面硯であることに間違いない。これはＢ５グリッドの古代水田から出土した。377は透かし孔部分の破片で、376と同一個体と推測する。断面形状はかまぼこ形で、片方の端がやや丸く膨らんでいる。Ａ５グリッドの古代水田から出土した。この377については、接点がなく確証が無いため、可能性がある程度にとどめる。したがって以後は円面硯から除外する。378は円面硯の脚台部の破片であるが、つくりが粗雑で透かし孔をヘラ描きで省略してある。この円面硯は新しいと考える。Ａ９グリッドの古代水田から出土した。379は円面硯の脚台部の破片である。破片上部に透かし孔の下端が残っているから、円面硯であることに間違いない。これはＢ５グリッドの古代水田から出土した。大きさは不明である。

ここで重要な点に気付く。それは奈良時代の円面硯375、376、379がＢ５グリッド周辺から出土している点である。それに対して平安時代の円面硯378と平安時代の風字硯374は川周辺のＡ９グリッドと川の中から出土している。これは奈良時代の硯は奈良時代に調査区の南側に廃棄され、平安時代の硯は平安時代に北側の川に廃棄されたことを意味する。廃棄時期と場所が異なっていたと推測する。



第26図　遺物実測図（硯・転用硯・獣足・布目瓦）

表11　硯・転用硯観察表

遺物番号	図	写真図版	器種	器形	遺構	グリッド	法量(cm)	色調	残存(%)	備考
374	26	23	二面墨字硯		ＳＲ０１	A9-89	12.7×15.5×3.7	暗灰色	30	4個の破片
375	26	23	円面硯		古代水田	Ｂ４		赤灰色	10	内面に自然釉
376	26	23	円面硯		古代水田	Ｂ５	底径30.3	灰色	10	内面に自然釉
377	26	23	円面硯？		古代水田	Ａ５		灰色	1	
378	26	23	円面硯		古代水田	Ａ９		暗灰色	2	ヘラ描き
379	26	23	円面硯		古代水田	Ｂ５		灰色	3	内面に自然釉
380	26	7	転用硯	蓋	古代水田	Ａ８		灰白色	5	墨痕
381	26	7	転用硯	蓋	古代水田	Ａ８		灰色	5	墨痕
382	26	7	転用硯	蓋		Ａ６		灰色	5	墨痕
383	26	7	転用硯	蓋		Ａ８		灰色	5	墨痕
384	26	7	転用硯	蓋		Ｂ９		灰色	5	朱墨痕
385	26	7	転用硯	坏	古代水田	Ａ９		灰白色	5	朱墨痕
386	26	7	転用硯	蓋		Ａ７		灰白色	5	朱墨痕
387	26	7	転用硯	皿		Ｂ７	口径16.4　器高2.6	灰色	30	朱墨痕

墨痕・朱墨痕付土器（第26図　写真図版７）［遺物番号380～387］

380～383は須恵器の蓋であり、内面全体に墨痕が残る。転用硯の可能性があるが、確証は無い。384は須恵器の蓋であり、内面全体に朱墨痕が残る。385は坏の底部であり、内面全体に朱墨痕が残る。386は蓋であり、内面全体に朱墨痕が残る。387は須恵器の皿であり、内面全体に朱墨痕と墨を擦ったと思われる摩滅痕が残る。384～387は転用硯であろう。

獣足（第26図　写真図版23）［遺物番号　388～389］

388は脚全体が細かなヘラ削りにより調整されているが、指を表現する切り込み成形はない。脚本体にも切り込みがない。389は指部分が欠損している。脚全体を細かなヘラ削りにより調整し、脚本体に深い切り込み成形がある。388と389は切り込みの有無から別個体であると分かる。

布目瓦（第26図　写真図版７）［遺物番号390～397］

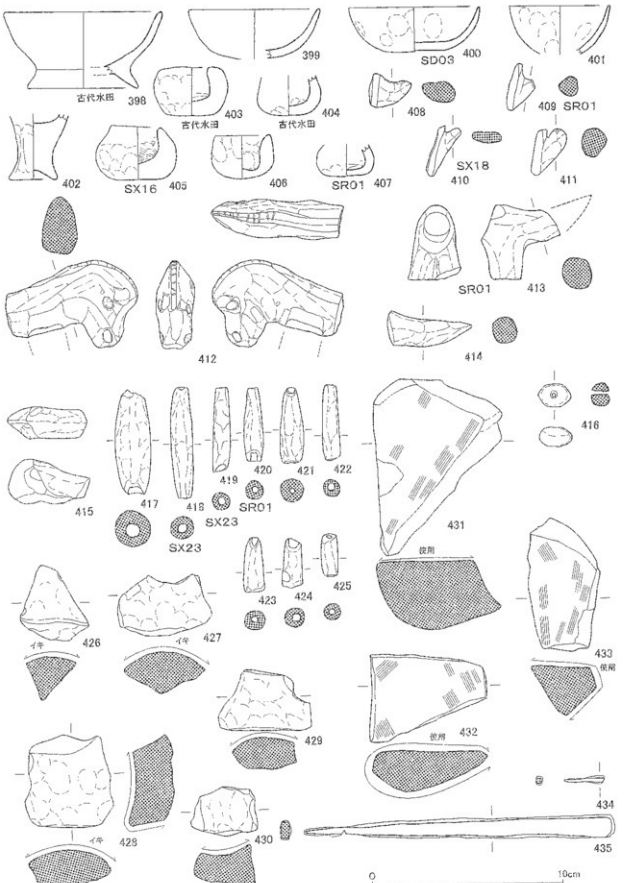
390は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に板ナデ痕が残る。端面の一部が生きている。391は平瓦で、両面とも摩滅しているが、凹面にわずかに布目痕が見える。392は平瓦で、凹面に布目痕、凸面にナデが残る。また２方向の端面が生きている。393は平瓦で、凹面に布目痕が残り、凸面は摩滅している。一部の端面が生きている。394は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄のタタキ痕が残る。395は両面とも摩滅している。396は平瓦で、凹面に布目痕が残り、凸面は摩滅している。397は丸瓦で、凹面にわずかに布目が残り、凸面にナデ痕が残る。２方向の端面が生きている。394～396がSR01から出土していることから、瓦は９世紀前半に廃棄された可能性が高い。

手づくね土器（第27図　写真図版８・23）［遺物番号398～411］

398は鉢形の手づくね土器で外面の一部に赤彩が残っている。399～401は坏形手づくね土器、402は高坏形手づくね土器である。403～407は坏形手づくね土器、408～411は甕形もしくは把手付鉢形の手づくね土器の把手である。SR01と古代水田から多く出土した。

土製馬（第27図　写真図版８・24）［遺物番号412～415］

須恵質の陶馬（412～414）が３点、土師質の土馬（415）が１点出土した。412は胴体の後半分と前脚を欠いている。たてがみ、耳、目、鼻など細かな部分まで丁寧に作り上げている。413は胴体の前半分と尾を欠いている。414は尾の部分であるが、焼成が悪く軟質である。以上の３点は、図上では一個体に見



第27図　遺物実測図（手づくね土器・土製馬・土錘・土製支脚・他）

えるが、胎土がそれぞれ異なり別個体である。415は頭部と首の部分であり、指でつまみ上げて「たてがみ」を表現している。

土錘（第27図　写真図版24）［遺物番号 417～425］

やや大型の完形品が２点、小型で一部欠損しているものが７点出土した。420がSR01、418と419がSX23からの出土である。SX23はSR01を切って掘られているので、418と419はSR01からの混入品の可能性がある。

土製支脚（第27図　写真図版24）［遺物番号 426～430］

土製支脚は大きな破片が５点、小さな破片が７点出土した。そのうちの大きな破片５点を図化した。形状は、428の生きている部分から推測すると、下部に向かって太くなる円柱形と考える。出土地点はすべてＡ９グリッドの中世水田下層（Ⅲ層）である。時期は、土が上下に移動する水田出土という点を考えると、８世紀から13世紀の幅をもつ。

砥石（第27図　写真図版24）［遺物番号 431～433］

431は硬質砂岩の円礫を打ち欠いて砥石としたもので、１面に使用痕が残る。432と433は軟質砂岩の砥石で、432は全面に使用痕が残り、433は３面に使用痕が残る。時期は、中世水田下層（Ⅲ層）からの出土であるから、８世紀から13世紀の幅をもつ。

鉄製品（第27図　写真図版24）［遺物番号 434、435］

434は断面形状が正方形で、先端が尖った鉄製品である。435は断面形状が長方形で、先端が鋭く尖った鉄製品である。両者とも中世水田下層（Ⅲ層）の上面から水平状態で発見された。したがって時期は８世紀から13世紀の間である。用途は、両者とも不明である。

鉄滓（写真図版24）［遺物番号 436］

碗型滓が１点、やや大きな鉄滓が７点、小さな鉄滓が７点出土した。写真図版には、碗型滓１点とやや大きな鉄滓７点を載せた。碗型滓は5.8cm×6.7cm×2.5cmで、101ｇを測る。出土地点はＡ５グリッドの中世水田下層（Ⅲ層）であり、時期は８世紀から13世紀の幅をもつ。鉄滓はＡ９グリッドを中心に点在している。２点がSR01から出土していることから、本来はSR01内にあった可能性がある。

馬の歯（写真図版24）

馬の歯は大きな破片が３点、小さな破片が２点、Ａ６～Ａ９グリッドの中世水田下層（Ⅲ層）から出土した。廃棄時期は、中世水田からの出土ということから８世紀から13世紀であろう。

《土器比率》当遺跡における灰釉陶器碗と山茶碗の破片数量を調べてみた（底部1/4以上をカウント）。

表12　土器破片数量表

山茶碗							
産地	湖西・瀧美産					尾張産	
型式	Ⅰ－1	Ⅰ－2	Ⅱ	Ⅲ－1	Ⅲ－2	5期	6期
碗	35(8)	2	26(7)	79(19)	37(9)	2	7(3)
小碗	2(1)	2(1)					
小皿			2(2)	11(11)	1(1)		
計	37(9)	4(1)	28(9)	90(30)	38(10)	2	7(3)

灰釉陶器											
産地	浜北産								尾張産		
型式	Ⅰ－1	Ⅰ－2	Ⅱ－1	Ⅱ－2	Ⅲ－1	Ⅲ－2	Ⅳ－1	Ⅳ－4	K－14	K－90	O－53
碗	0	2	7	41	84	143	46	1	36	4	3

（　）は個体数

表13　輸入陶磁器・獣足・他観察表

輸入陶磁器（白磁・青磁）

遺物番号	図	写真図版	種別	器種	遺構	グリッド	法量（cm）	残存（%）	備考
329	23	8	白磁	碗		B 2		4	玉縁
330	23	8	白磁	碗		B 2		2	玉縁
331	23	8	白磁	碗		A 7		2	玉縁
332	23	8	青磁	碗	SF07	A 5		4	
333	23	8	青磁	碗		A 9		4	
334	23	8	青磁	碗		B 4		2	蓮弁文
335	23	8	青磁	碗				2	蓮弁文
336	23	8	青磁	碗		A 9	底径5.6	20	「金玉満堂」印
337	23	8	青磁	碗		A 3		5	蓮弁文
338	23	8	青磁	碗		A 3		5	蓮弁文
339	23	8	青磁			A 3		2	
340	23	8	青磁			A 7		1	
341	23	8	青磁			B 4		2	
342	23	8	青磁	碗		A 9	底径5.0	10	底部
343	23	8	白磁	碗		A 3	口径16.0	10	
344	23	8	青磁	碗		A 9	底径5.7	10	底部

手づくね土器

遺物番号	図	写真図版	器種	遺構	グリッド	法量（cm） 口径	器高	底径	色調	残存（%）	備考
398	27		鉢形	試水III	A 9	8.2	4.1	5.8	灰白色	20	内面に赤彩残る
399	27		坏形		A 9	6.8	(2.6)		黄橙色	40	
400	27	23	坏形	SD03	A 9	6.9	2.4	3.2	黄橙色	90	内外面押さえ
401	27		坏形		A 9	8.0	(3.6)		橙色	40	
402	27	23	高坏形		A 8		(3.5)	2.4	黄褐色	60	
403	27	23	坏形	試水III	A10	3.2	2.4		橙色	80	
404	27		坏形	試水III	B 8				黄褐色	60	
405	27	23	坏形	SX15	A 6	2.5	2.1	2.5	黄橙色	95	
406	27		坏形		A10	2.8	2.3	1.2	赤褐色	60	
407	27	23	坏形	SB01	B 9		(1.7)	2.1	赤褐色	70	
408	27		鉢形		A 7				茶褐色	4	把手部分
409	27		鉢形	SB01	A 9				黄褐色	4	把手部分
410	27		鉢形	SX18	B 6				灰白色	4	把手部分
411	27		鉢形		A10				黄褐色	4	把手部分

獣　足

遺物番号	図	写真図版	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	備考
388	26	23	SR01	A 9	4.6×4.0×5.8	灰色	
389	26	23		A 5	3.2×3.4×4.7	灰色	切り込みあり

土製馬

遺物番号	図	写真図版	種類	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	備考
412	27	24	陶馬		B 8	6.8×2.0×3.0	灰色	頭部・胴体部
413	27	24	陶馬	SR01	A10	4.15×3.95×2.5	灰色	後脚部
414	27	24	陶馬		A 8	4.4×1.5×1.2	灰色	尾部
415	27	24	土馬		A 5	4.1×1.7×1.4	黄褐色	脚部

布目瓦

遺物番号	遺構	グリッド	法量（cm）	重さ（g）	色調	備考
390		B 7	8.2×6.5×2.5	145	灰色	凹面布目
391		B 4	5.9×4.8×2.8	92	淡黄色	
392		A 8	6.6×5.9×1.8	103	灰色	凹面布目
393		A 9	6.1×5.0×2.5	83	淡黄色	凹面布目
394	SB01	B 9	7.6×6.3×2.5	130	灰色	凹面布目凸面縄目
395	SB01	B10	4.6×4.2×1.9	35	淡黄色	
396	SB01	A 9	5.4×7.3×2.2	113	淡黄色	凹面布目
397		A 9	9.2×6.4×1.7	144	白色	丸瓦

土　錘

遺物番号	図	写真図版	遺構	グリッド	長さ（cm）	最大径（cm）	内径（cm）	色調	重さ（g）	備考
417	27	24		A 7	5.6	1.9	0.7	黄灰色	18.0	
418	27	24	SX23	A 9	5.9	1.2	0.5	灰褐色	8.0	
419	27	24	SX23	A 9	(4.5)	0.9	0.4	黒褐色	5.0	
420	27	24	SB01	A 8	(5.2)	1.0	0.4	黄灰色	3.0	
421	27	24		A 7	(4.6)	1.2	0.3	黒褐色	5.0	
422	27	24		A 9	(4.0)	0.9	0.4	灰褐色	4.0	
423	27	24		A 8	(2.9)	1.0	0.4	灰褐色	5.0	
424	27	24		A 8	(2.7)	1.0	0.4	灰白色	3.0	
425	27	24		A 8	(2.6)	0.9	0.4	黄褐色	2.0	

砥　石

遺物番号	図	写真図版	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	重さ（g）	石種
431	27	24			9.2×6.5×3.6	暗灰色	246	砂岩
432	27	24	SR01	A 9	4.6×6.1×2.2	灰白	66	砂岩
433	27	24		B 8	7.0×3.6×2.6	黄褐色	69	砂岩

土　玉

遺物番号	図	写真図版	遺構	グリッド	法量（cm）	色調	備考
416	27	23		A 8	1.2×1.7×0.9	黄褐色	

木製品

遺物番号	図	写真図版	遺構	グリッド	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	備考
70	16	17	SX09	B 4	104.2	5.2	4.2	杭（転用）
71	16	17	SX09	B 4	60.4	5.5	4.3	杭

鉄製品

遺物番号	図	写真図版	種別	遺構	グリッド	法量（cm）	重さ（g）	備考
434	27	24			B 6	2.15×0.45×0.3		
435	27	24		古代水田	A 6	16.8×1.0×0.6		
436		24	刷毛掃			5.8×6.7×2.5	101	

第Ⅴ章　まとめ

1．特殊遺物の性格について

今回の発掘調査では、墨書土器、刻書土器、円面硯、二面風字硯、獣足、布目瓦など一般集落遺跡から発見されることが少ない特殊遺物が多数出土している。これらの特殊遺物は何を意味するのか、宮竹野際遺跡から木船遺跡・越前遺跡にかけての地域に想定されている古代の長上郡衙と関係があるのか、仮に宮竹野際遺跡に郡衙関連施設があったとしたらどこにあるのか、等を西遠江における特殊遺物の出土状況と宮竹野際遺跡の過去の発掘調査結果をふまえて考えてみたい。

今回の出土品

今回出土した特殊遺物は次の通り。墨書土器20数点のうち、文字が判読できるもの13点、則天文字または篆書体の可能性がある特殊文字が１点ある。刻書土器は２点ある。陶硯は、円面硯が４点と二面風字硯が１点ある。獣足は別個体のものが２点ある。布目瓦は平瓦の小破片が７点と丸瓦の小破片が１点ある。他に一般集落遺跡からの出土が少ない準特殊遺物と言うべき、尾張産黒笹14号窯式（K－14）の灰釉陶器の碗が3点、皿が３点、段皿が１点、平瓶が１点、水瓶が２点、壺蓋が１点、および土製馬の陶馬が３点と土馬が１点ある。以上の数値がいかに大きなものであるかは、過去の宮竹野際遺跡発掘調査で出土した遺物と比較すると良く分かる。宮竹野際遺跡では過去に４回、７地区で調査が行われ、特殊遺物等は円面硯が１点、布目瓦が２点、陶馬が１点出土している。しかし古代の墨書・刻書土器や獣足は発見されていない。

郡衙遺跡群

近年行われた梶子北遺跡や井通遺跡の発掘調査によって、西遠江おける郡衙の姿が次第に明らかになってきている。予測されていた通り（平野　1988）、郡衙を構成する各施設は一ヶ所に集中していたのではなく、半径１km程度の地域に分散配置されていた可能性が高く、またそれらの施設は時期によって移転している例も発見されている。したがって西遠江の郡衙を考えるとき、単独の遺跡を対象にしていたのでは意味がなく、近接しかつ関連する遺跡をまとめて遺跡群として捉える必要が生じる。そこで本節では、郡衙に関連すると考えられる次の５遺跡群に注目する。敷智郡衙と確定している伊場遺跡群、引佐郡衙の可能性が高い井通遺跡群、郡名不詳であるが郡衙の可能性が高い恒武遺跡群、浜名郡衙の可能性がある吉美遺跡群、そして今回の調査区がある宮竹野際遺跡群である。

特殊遺物の検討

今回出土した特殊遺物等を順次、比較・検討する（窯跡と寺院から出土したものは除外する）。

・**墨書土器**　判読できる文字は「生」が４点、「中」が４点、「大」が２点、「夫」または「太」が１点、「千」が１点、「十」が１点である。これらの「生、中、大、太、千、十」はすべて吉祥文字であり、東日本の一般集落遺跡からも多数出土している。集落内祭祀において土器に墨書され、最終的に川に廃棄されたものと推定される。したがってこれだけで郡衙関連施設があったとは言えない。また仮に350が則天文字または篆書体で書かれた特殊文字であったとしても、これらは地方行政ルートと僧侶ルートの２ルートによって全国に普及していったと推定されており（平川　2000）、必ずしも郡衙関連とは言えない。

通常、郡衙関連遺跡を調査すれば１～２点は出土する郡名、郷名、個人名、施設名、役職名の墨書が今回の出土品にまったく見当たらない。この点は郡衙関連施設を否定するものではなく、奈良時代の可能性が少ないというだけである。吉祥文字の墨書は平安時代の郡衙における一般的な祭祀形態である。

・**刻書土器**　「□十二日？」と「大夫」のヘラ描きがある。「□十二日？」は日の字形が不自然であり、十二日ではない可能性がある。「大夫」はそのまま信じれば、遠江国に１～２名しか居なかったはずの高

表14　硯　天竜川以西出土地一覧表

遺跡名	遺跡群	所在地	時期	種別・数量	備考
宮竹野際（2次）	宮竹野際遺跡群	浜松市宮竹町	奈良	円面硯1	
宮竹野際（今回）		浜松市宮竹町	奈良・平安	円面硯4・二面風字硯1	
井通	井通遺跡群	浜松市（細江町）広岡	（資料整理中）	円面硯・風字硯、他	官衙関連
伊場	伊場遺跡群	浜松市東伊場	奈良・平安	円面硯1・風字硯1	官衙
城山		浜松市若林町	奈良	円面硯4	官衙
鴨子北		浜松市南伊場	奈良	円面硯1	官衙
社口	恒武遺跡群	浜松市恒武町	奈良	円面硯1	
笠井若林		浜松市笠井町	奈良・平安	円面硯4・二面風字硯1	官衙関連
中村	吉美遺跡群	湖西市吉美	奈良	円面硯16	生産地関連
横枕1		湖西市吉美	奈良	円面硯1	
矢畑		浜松市（引佐町）井伊谷	（資料整理中）	円面硯1	
祝田		浜松市（細江町）祝田	平安	二面風字硯1	
東笠子		湖西市白須賀	平安	円面硯1・二面風字硯2	窯跡
殿田第4地点		湖西市古見		円面硯1	窯跡
一ノ宮事業場		湖西市山口		円面硯1	窯跡
谷上		湖西市谷上	奈良	円面硯1	窯跡
大沢		湖西市古見		円面硯1	窯跡
大屋敷		浜松市（浜北市）宮口	平安	二面風字硯2	窯跡
吉名		浜松市（浜北市）宮口	平安	円面硯2・風字硯1	窯跡
大知波峠廃寺		湖西市大知波		二面風字硯2	寺院

表15　獣足　天竜川以西出土地一覧表

遺跡名	遺跡群	所在地	時期	数量	備考
宮竹野際（今回）	宮竹野際遺跡群	浜松市宮竹町	奈良・平安	2	
山の神		浜松市和田町	奈良	2	
井通	井通遺跡群	浜松市細江町広岡	奈良・平安	資料整理中	官衙関連
川久保船渡		浜松市細江町川久保	奈良・平安	1	官衙関連
伊場	伊場遺跡群	浜松市東伊場	奈良・平安	1	官衙
城山		浜松市若林町	奈良	1	官衙
鴨子北		浜松市南伊場	奈良・平安	2	官衙
村西		浜松市若林町		1	官衙関連
山ノ花	恒武遺跡群	浜松市恒武町		1	官衙関連
笠井若林		浜松市笠井町	奈良・平安	1	官衙関連
恒武宮尾		浜松市恒武町	奈良・平安	1	
中村	吉美遺跡群	湖西市吉美	奈良・平安	3	官衙？
村前山東		浜松市神ヶ谷町	平安	1	
瓦屋西吉堀畔		浜松市有玉西町		1	
清水		浜松市（浜北市）新原		1	
角江		浜松市入野町	奈良・平安	1	
東笠子43－1		湖西市白須賀	奈良・平安	1	窯跡
大屋敷5号窯		浜松市（浜北市）宮口	平安	1	窯跡
古見第16－2		湖西市古見	奈良・平安	3	窯跡
鴨ヶ谷IV		新居町三ツ谷		1	生産地関連

表16　布目瓦　天竜川以西出土地一覧表

遺跡名	遺跡群	所在地	時期	備考
宮竹野際（2次）	宮竹野際遺跡群	浜松市宮竹町	奈良・平安	
宮竹野際（今回）		浜松市宮竹町	奈良・平安	
木船		浜松市和田町	白鳳・奈良	
舘前		浜松市和田町		
城山	伊場遺跡群	浜松市若林町	奈良	官衙
鴨子北		浜松市南伊場	奈良・平安	官衙
九反田		浜松市森田町	奈良	官衙
大畠		浜松市三ヶ日町岡本		
日向郷		浜松市細江町小野	奈良	寺院
一ノ宮峠場第1地点		湖西市山口		窯跡
薗場		浜松市（浜北市）根堅	白鳳・奈良	窯跡

い位の名称である。しかしそれほど高い身分の人物が宮竹野際遺跡周辺にいたとは思えない。そこで気付くことは、刻書が土器の内側に書かれている点である。実用品であれば目立たない底部の裏側に書かれるはずであり、墨書、出土品の大多数は裏側に書かれている。目立つ内側に書かれていることはこれらが祭祀用具であった可能性が高い。祭祀なら願望する高い位を書いたことも理解できる。再度「□十二日？」を見てみると、大吉と読めなくもない。引き続き調査・研究の必要がある。

以上の墨書土器と刻書土器から言えることは、東日本の一般集落遺跡から出土する祭祀遺物と大差なく、直接に郡衙関連施設と結びつくものではない。

・円面硯　378は器壁が薄く、透かし部分がヘラ描きである点など粗雑化と小型化が進んでいる。またSR01に廃棄された可能性が高いことから、時期は平安時代まで降りると考える。375、376、379は細部が丁寧に作られて器壁も厚いこと、SR01から離れた調査区南半の古代水田から出土していることから、時期は奈良時代であろう。円面硯は2時期の製品があると考える。西遠江における円面硯の出土状況は次の通りである（表14）。井通遺跡群は井通に複数点（現在整理作業中）ある。伊場遺跡群は伊場に1点、城山に4点、梶子北に1点ある。恒武遺跡群は社口に1点、笠井若林に4点ある。吉美遺跡群は中村に16点、橋枕Ⅰに1点ある。遺跡群以外からの出土は、矢畑の1点（現在整理作業中）がある。

以上のように、円面硯の出土状況はその大多数が郡衙関連遺跡であり、一般集落遺跡出土は矢畑の1点だけである。したがって5点が出土した宮竹野際遺跡周辺に郡衙関連施設があった可能性が高い。

・風字硯　374の二面風字硯は378の円面硯や多量の土器と共に平安時代前期（9世紀前半）にSR01へ廃棄されたものである。西遠江における風字硯の出土状況は次の通り（表14）。井通遺跡群は井通に風字硯（現在整理作業中）がある。伊場遺跡群は伊場に風字硯が1点ある。恒武遺跡群は笠井若林に二面風字硯が1点ある。遺跡群以外からの出土は、浜名湖北岸の祝田遺跡の二面風字硯1点だけである。

以上のように、風字硯も郡衙関連遺跡からの出土であり、一般集落遺跡出土は祝田の1点だけである。風字硯からみても宮竹野際遺跡に郡衙関連遺跡がある可能性が高い。

・獣足　獣足は獣足付短頸壺に3脚付いているうちの1脚である。獣足付短頸壺は官衙で使われていた高級什器と考えられている。西遠江における獣足の出土状況は次の通り（表15）。井通遺跡群は井通に数点（現在整理作業中）と川久保船渡に1点ある。伊場遺跡群は伊場に1点、城山に1点、梶子北に2点、村西に1点ある。恒武遺跡群は山ノ花に1点、笠井若林に1点、恒武東覚に1点ある。吉美遺跡群は中村に3点ある。遺跡群以外からの出土は、清水の1点、角江の1点、瓦屋西古墳群の1点、村前山東の1点である。

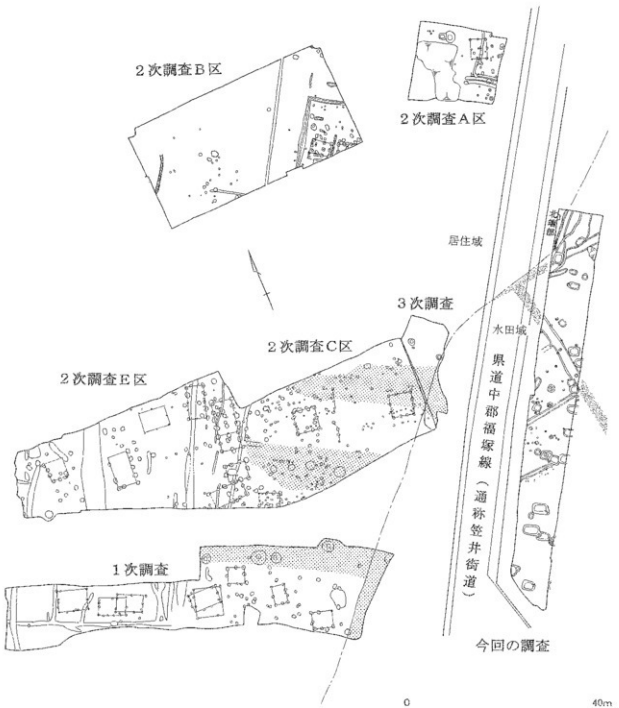
以上のように、獣足は郡衙関連遺跡からの出土が多いが、それ以外からも出土している。

・布目瓦　布目瓦は、二面風字硯および尾張産K－14号窯式の灰釉陶器と共伴していたことから、確実に9世紀前半以前に遡る。布目瓦の西遠江における出土状況は次の通り（表16）。伊場遺跡群は城山、梶子北、九反田がある。宮竹野際遺跡群は木船、越前、宮竹野際2次、今回の宮竹野際がある。遺跡群以外からの出土は三ヶ日町の大畠があるが、ここは性格・時期不明の遺跡である。

布目瓦は、郡衙に付随する寺院に使われていたと考えられる。引佐郡については、井通遺跡群からはやや離れているが、日向郷がそれにあたると推測する。

・灰釉陶器（K－14）　静岡県において尾張産K－14号窯式の灰釉陶器を多く出土する一般集落遺跡は少なく、特にK－14の段皿、平瓶、水瓶、壺蓋など特殊な器種を出土した一般集落遺跡はないと考える。

・陶馬・土馬　水に関係する律令的祭祀に使われたと推定されている。同様の祭祀遺物と考えられる馬の歯も今回の調査で発見されている。陶馬・土馬は最近の発掘調査で数多くの遺跡から出土しており、律令的祭祀というだけでは直接に郡衙と結びつかない。



第28図　宮竹野際遺跡全体図（古代～中世）

郡衙関連施設はどこに

円面硯、二面風字硯、獣足、布目瓦の出土状況からみて、宮竹野際遺跡に郡衙関連施設があった可能性が非常に高いと考える。そして尾張産Ｋ－14号窯式の灰釉陶器、それに書かれた墨書須、二面風字硯からみて、時期は奈良時代末から平安時代初頭（８世紀末～９世紀前半）と推定する。

では、関連施設はどこにあるのだろうか。ほとんど流れのない川SR01の北岸に遺物が集中していることから、今回の調査区の北端部から北側に広がる居住域（第28図の２次調査Ａ区と３次調査区の間から県道にかけての地域）が最有力候補地である。

2．条里型水田について

条里制とは、古代日本で行われた、一町角（一辺約110mの方形）の基盤目に区切られた水田を全国的に開拓し、その上に土地の支配制度を確立しようとした大開拓事業である。この事業によってそれまで開拓が困難であった氾濫平原などに治水灌漑設備が造られ、広大な農地が開拓されることにより今までとは比較にならないほど生産力が増大し、古代社会構造に大きな変革を与えることになった。この条里制の遺構は、北は羽後（秋田）から南は大隅（鹿児島）の広い範囲で確認されており、一町角の中を細長く10等分した長地型と、一町角を半分にしてそれを５等分する半折型の二種類が見られる。

条里制は、律令制度による班田収授と密接な関係がある。奈良時代には、班田図が全国的に作成されるとともに条里呼称が整備され、条里制が国土を把握する方法として用いられるようになり、律令国家による支配が完全に全国隅々まで及ぶことになる。しかし、このころから班伝収授に問題が起こり743年墾田永代私有令が出され条里制終焉の兆しが見え始める。国土を把握する方法としての条里制は902年班田収授の崩壊とともに終わり、条里制開拓は、荘園開拓が盛んになる平安期に終わりを告げていく。

天竜川沖積平野西岸の条里型水田については、『浜輪遺跡』（1994年）の中で、旧地籍図類の分析結果から広域での表層条里型地割が確認できたことを報告している。その中で天王低地南部の旧雨村（今回の調査区を含む）でまとまった表層条里の坪群が確認できたことを特筆している。

今回の調査では、第２面より古代水田遺構を検出することができた（自然科学分析でもイネのプラント・オパールが検出されている）。２区で検出されたSK06、SK07は幅50cmの小畦畔でほぼ真西に延びるとともに、その間隔が約10mで平行に造られていた。３区からは、この２条の小畦畔に直行する形で、幅1.5mのほぼ南北に延びる大畦畔（北より約８度西に振れる）SK02が検出されるとともに、SK06と11m離れて平行に延びる可能性がある小畦畔SK05も検出された。４区では、大畦畔SK02に直行する大畦畔SK01も検出された。このため、『浜輪遺跡』（1994年）で報告されている表層条里型地割図に今回検出された大畦畔を挿図したところ表層条里と一致することが確認できた（第29図）。これらのことから、今回の調査区第２面で検出された遺構は、古代条里型水田遺構ではないかと考えられる。

今回の調査によって古代条里型水田遺構が発見されたことにより次のことが考えられる。

①古代条里型水田の大畦畔・小畦畔検出は、浜松地域では初めての事例となる。その大畦畔SK02の内部から完形品に近い高盤と坏の破片等が出土した。袋井市の川田・藤蔵洲遺跡でも条里型水田の大畦畔から完形品の土師器の甕２個体が出土し儀礼に伴うものであることが報告されていることから、今回出土した高盤や坏も何らかの祭祀に使い埋められたと考えられる。この大畦畔を利用して中世に造られた畦SK13には土器出土地の近くから水を取り入れた溝状遺構SD04が検出された。このことから推測して今回出土した高盤と坏は、水口祭に関係するものではないかと考えられる。また、高盤と坏の破片等が出土したことにより、この条里型水田が遅くとも８世紀後半には開かれていたと考えられる。これは、静岡平野で条里型水田が、開かれた時期と同じ時期に、天竜川西岸平野でも条里型水田の開拓が実施されていたことを意味する。

②12世紀頃から天竜川沖積平野西岸では、律令制の下で行われた大規模な農地開拓事業を遙かに上回る勢いで荘園開発が行われ新たな集落が形成される。この荘園開発について、鈴木一有氏は『浜松市博物館報第14号』の中で「開発にあたって計画的な土地区画の理念が貫かれている点に注目したい。」とし、山の神遺跡の区画が条里的な土地区画の強い影響下にあったことや、塔野遺跡で確認された表層条里と一致する方向の区画溝の例をあげ、条里地割が、土地利用の利便性に支障をきたさない場合、古くから続く地割を継承して荘園開発が行われたこと、この条里に代表される計画的な広域地割の存在は、地域を統合する権力の存在を前提としていたという考えを発表している。今回の調査で、第１面で検出された中世水田の南北畦畔SK13は、古代条里型水田の大畦畔SK02を利用する形で直上に造られていたことや、

第29図　天竜川平野西岸の表層条里分布図

『箕輪遺跡』(1994年) を再トレースして加筆

反対に古代の小畦畔は中世の畦畔に利用されていないことが確認できた。このことから、中世の荘園開発が鈴木氏の説どおり、古代の条里地割を利用しながら地形に合わせて行われたと考えられる。

③静岡平野の曲金北遺跡で発掘された古代東海道が平野を縦断して直線的に建設され、条里もこれを基準として施行されていることから、今回宮竹野際遺跡で大畦畔（坪界線）が発見されたことにより、浜松地域における古代東海道の推定にも役立つものと考えられる。

今回の調査区の大部分は、第1面が中世の水田遺構、第2面が古代条里型水田遺構であり（それぞれの層より自然化学分析でイネのプラント・オパールを検出）、その下層は、水性植物の茂る湿地帯か沼であった（自然化学分析で水生植物が優勢に分布していることが確認）。しかし、調査区北端の4－1区の第4面は低湿地から宮竹微高地に上がる地形（自然科学分析でもススキが高い密度で検出）であり、微高地の縁辺部から柱穴跡と多くの土器を含んだ古代の溝状遺構SD01を検出することができた。これらのことから、今回の調査区より北方の宮竹微高地に古代の遺構が広がり、SD01やSB01の続きに大量の遺物が出土すると考えられる。今秋、中郡福塚線の拡幅工事が北東へと進む計画があり、それに伴う宮竹微高地の発掘調査に大きな期待がもたれる。

あとがき

現地調査及び本書の作成に当たっては、次の方々から多くのご教示・ご指導をいただきました。ここに銘記して厚くお礼申し上げます。(敬称略・五十音順)
佐藤由紀男　佐野一夫　柴田　稔　鈴木一有　鈴木敏則　松井一明　矢田　勝

引用・参考文献

落合重信	1967	『条里制』 吉川弘文館
鈴木一有	2001	「浜松市域における中世集落の消長と地域開発」『浜松市博物館報第14号』
平川南	2000	『墨書土器の研究』 吉川弘文館
平野吾郎	1988	「東海地方における郡衙推定遺跡とその立地について」『考古学叢考 中巻』
浜松市教育委員会	1988	『宮竹野際遺跡』
浜松市教育委員会	1995	『宮竹野際遺跡３』
浜松市教育委員会	2003	『浜松の遺跡』
浜松市文化協会	1981	『浜松市天王中野遺跡発掘調査報告書』
浜松市文化協会	1990	『松東遺跡発掘調査報告書』
浜松市文化協会	1994	『宮竹野際遺跡２』
浜松市文化協会	1997	『宮竹野際遺跡４』
浜松市文化協会	1997	『天王中野遺跡２』
浜松市文化協会	1998	『山の神遺跡1998』
浜松市文化協会	1999	『半田山古墳群1999』
浜松市文化協会	2000	『山の神遺跡５次』
浜松市文化協会	2000	『飯田町寺西遺跡2000』
浜松市文化協会	2002	『田見合遺跡１次発掘調査報告書』
浜松市文化協会	2004	『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』
浜松市遺跡調査会	1982	『越前遺跡発掘調査報告書』
浜松市役所	1968	『浜松市史Ⅰ』
静岡県	1992	『静岡県史 資料編３ 考古三』
静岡県教育委員会	2003	『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
袋井市教育委員会	1993	『川田・藤蔵淵遺跡』
袋井市教育委員会・他	2004	『鶴田Ⅱ遺跡』
藤枝市教育委員会・他	1981	『埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 御子ヶ谷遺跡』
奈良文化財研究所	2003	『古代の陶硯をめぐる諸問題』
蒲村	1937	『蒲村土地宝典』
条里制研究会	1993	『条里制研究 第９号』
和田村	1937	『和田村土地宝典』
静岡県埋蔵文化財研究所	1988	『梅橋北遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所	1994	『筏輸遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所	1996	『川田・藤蔵淵遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所	1997	『山の神遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所	2004	『恒武東見遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所	2005	『恒武西宮遺跡Ⅲ 笠井若林遺跡Ⅱ』

付　編　自然科学分析結果

株式会社　古環境研究所

1．はじめに

宮竹野際遺跡は、天竜川右岸の沖積平野上に立地し、浜松市教育委員会による第2次発掘調査（平成5年度）では弥生時代前期とされる水田跡が検出されている。

今回の発掘調査では、中世および古代の各水田跡が検出され、さらに上位層では近世の水田跡、下位層では古墳時代の水田跡の包蔵も推定された。そこで、これらにおける稲作の検証とその他の層における稲作の可能性ならびに植生について、プラント・オパール（植物珪酸体）分析と花粉分析から検討することになった。

2．試料

分析試料は、調査区3区の東壁土層断面（A地点）において採取された上位より試料1～7、調査区4－1区の撹乱坑北東壁土層断面（B地点）において採取された上位より試料8～10の計10点である。

プラント・オパール分析はこれらすべての試料を、花粉分析は試料7（試料イ）と試料10（試料ロ）を分析の対象とした。

3．分析方法

（1）プラント・オパール分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
2）試料約1gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
5）沈底法による20μm以下の微粒子除去
6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、主な分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重，単位：10^{-5}g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48である。

（2）花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復元に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5%三りん酸ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎

2）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澄法で砂粒を除去

3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す

5）再び氷酢酸を加えて水洗処理

6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1,000倍で行った。花粉の同定は島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

4．結果

（1）プラント・オパール分析

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ススキ属型、タケ亜科（ネザサ節型、その他）および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1と図1～2に示す。各地点におけるプラント・オパールの検出状況は次のとおりである。

1）A地点

イネは上位より試料1～3で検出されている。試料3ではやや高い密度である。ススキ属型は試料2、試料3および試料7で検出されているが、いずれも低い密度である。ネザサ節型は上位より試料1～3で検出されているが、これも低密度である。

2）B地点

ここではイネは検出されていない。ススキ属型は試料8と試料9で検出されている。試料9では比較的高い密度である。ネザサ節型は試料8のみで検出されているが低密度である。

（2）花粉分析

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉18、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉14、シダ植物胞子2形態の計35である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、遺構周辺の植生の復元のため花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図3に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、トチノキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、セリ亜科、ゴキヅル、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、ミズワラビ

2）花粉群集の特徴

・A地点の試料イ（黒色粘土）

花粉密度は充分あり、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉では、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、コナラ属アカガシ亜属が比較的多く、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、シイ属などが低率に出現する。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ属型を含むイネ科が高率に出現し、オモダカ属などが伴われる。またミズアオイ属、シダ植物胞子のミズワラビが検出された。

・B地点の試料ロ（灰色シルト）

花粉密度が非常に低く、ほとんど花粉は検出されなかった。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属、草本花粉ではイネ科などが検出される。

5．考察

中世の水田層では試料2より、古代の水田層では試料3よりそれぞれイネのプラント・オパールが検出されている。したがって、両水田において当時稲作が行われていたものと判断される。ただし、プラント・オパール密度はそれぞれ1,800個/gと2,400個/gであり、稲作跡の可能性を判断する際の基準値とされる3,000個/gには満たない。このことについては、1）稲作が営まれた期間が非常に短かった、2）籾殻の多くが耕作地の外に持ち出されていた、3）土層の堆積速度が速かった、4）耕作土が流失した、などの要因が考えられる。

近世の水田層とみられていた堆積層（試料1）からもイネのプラント・オパールが検出されているが、プラント・オパール密度は1,200個/gと低い値である。ただし、直上には砂層が堆積しているため、上層より後代のプラント・オパールが混入したことは考えにくい。よって、当該層については調査地もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。

その他の堆積層では、古墳時代の水田層の可能性が想定された試料9を含めいずれの試料からもイネのプラント・オパールは検出されていない。したがって、上記以外の層については調査地で稲作が営まれていた可能性を積極的に肯定することはできない。

なお、試料7（試料イ）では草本花粉の占める割合が高く、イネ属型を含むイネ科、水生植物の多いカヤツリグサ科や水田雑草のオモダカ属、ミズアオイ属、シダ植物のミズワラビなどが検出されている。こうしたことから、当該層堆積時の調査地には、これらの草本が優勢に分布していたと推定される。

なお、上述のようにイネのプラント・オパールは検出されていないものの、イネ属型の花粉が認められることから、調査地の周辺において稲作が営まれていた可能性が考えられる。

近隣の森林植生としては、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科を主とするスギ、マツ属複維管束亜属などの針葉樹林、コナラ属アカガシ亜属を主にシイ属などの照葉樹林、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が分布していたと推定される。

試料4～8、10ではプラント・オパール総密度が低く、試料10（試料ロ）では花粉密度も非常に低い。こうしたことから、これらの層については土壌の堆積速度が速かったか、イネ科草本の生育にはあまり適さない環境、あるいは乾燥または乾湿を繰り返し有機質遺体が分解されやすい堆積環境であった可能

性が考えられる。なお、試料10からはマツ属複維管束亜属が検出されていることから、アカマツ二次林が成立していた可能性も考えられる。

表1　宮竹野際遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼試料		A地点 1	2	3	4	5	6	7	B地点 8	9	10
イネ科	Gramineae (Grasses)										
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	12	18	24							
ススキ属型	*Miscanthus* type		6	12				5	6	37	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)										
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	6	6	12					6		
その他	Others		6	6							
未分類等	Unknown	78	73	60	25	31	30	45	43	56	31
プラント・オパール総数		96	109	114	25	31	30	50	55	93	31

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	0.35	0.53	0.70						
ススキ属型	*Miscanthus* type		0.08	0.15				0.06	0.08	0.46
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	0.03	0.03	0.06					0.03	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出.

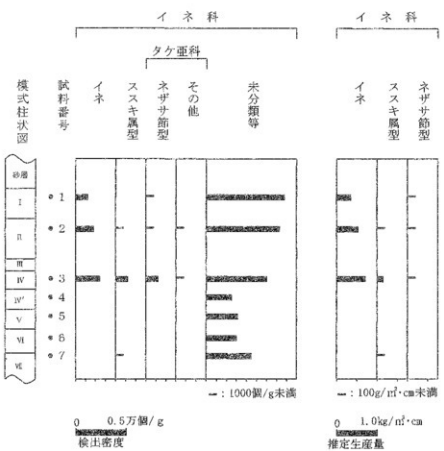


図1　宮竹野際遺跡A地点におけるプラント・オパール分析結果

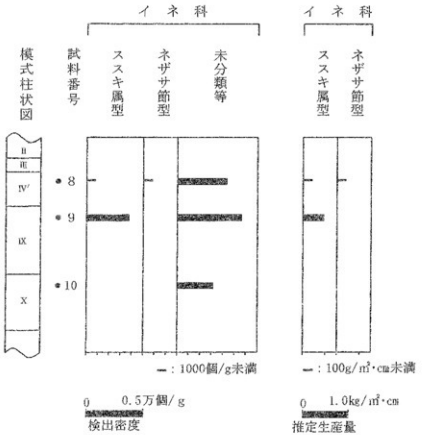


図2　宮竹野際遺跡B地点におけるプラント・オパール分析結果

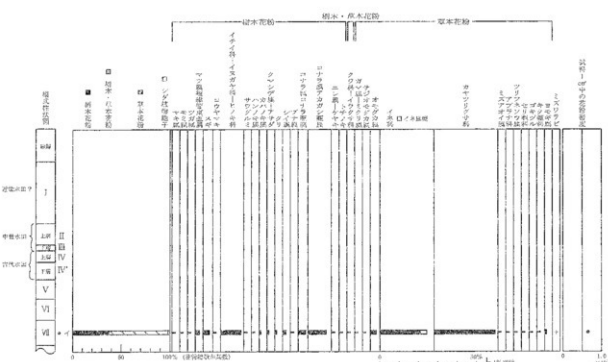


図3　宮竹野際遺跡A地点における花粉ダイアグラム

表2　宮竹野際遺跡における花粉分析結果

分類群		A地点	B地点
学名	和名	イ	ロ
Arboreal pollen	樹木花粉		
Podocarpus	マキ属	2	
Abies	モミ属	4	
Tsuga	ツガ属	3	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	11	4
Cryptomeria japonica	スギ	17	1
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	54	2
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	
Alnus	ハンノキ属	2	
Betula	カバノキ属	5	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	5	
Castanea crenata	クリ	5	
Castanopsis	シイ属	9	
Fagus	ブナ属	3	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	20	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	48	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ	2	
Aesculus turbinata	トチノキ	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1	
Alisma	サジオモダカ属	1	
Sagittaria	オモダカ属	16	
Gramineae	イネ科	106	6
Oryza type	イネ属型	17	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	160	2
Monochoria	ミズアオイ属	2	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		1
Cruciferae	アブラナ科	1	
Impatiens	ツリフネソウ属	1	
Apioideae	セリ亜科	1	
Actinostemma lobatum	ゴキヅル	1	
Asteroideae	キク亜科	1	
Artemisia	ヨモギ属	5	1
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolete type spore	単条溝胞子	8	5
Celatopteris	ミズワラビ	2	
Arboreal pollen	樹木花粉	193	8
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	313	10
Total pollen	花粉総数	508	18
Pollen frequencies of $1cm^3$	試料$1cm^3$中の花粉密度	6.5 $\times 10^4$	1.5 $\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	5	1
Fern spore	シダ植物胞子	10	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(−)	(−)

写 真 図 版

図版１

宮竹野際遺跡全景（南東より）

図版２

１区・２区第１面（合成）

２区・３区・４区第２面（合成）

ＳＸ０７土層（南東より）

ＳＫ０１土層（東壁）

図版４

ＳＫ０２完掘状況（南西より）

ＳＫ０２出土土器

ＳＫ０２土器出土状況（北西より）

ＳＤ０１土器出土状況（北東より）

ＳＤ０１出土土器

図版6

古代水田出土土器

ＳＲ０１出土土器

円面硯・二面風字硯

墨痕・朱墨痕付土器（転用硯）

布目瓦

図版8

手づくね土器

陶馬・土馬

墨書土器（350）

刻書土器（370）

白磁・青磁

１区第１面

ＳＦ０９完掘状況（東より）

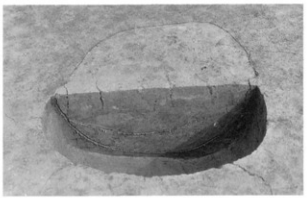
ＳＸ０５・ＳＸ０７完掘状況（南西より）

ＳＸ０２完掘状況（南東より）

ＳＡ０２・ＳＡ０３完掘状況（北東より）

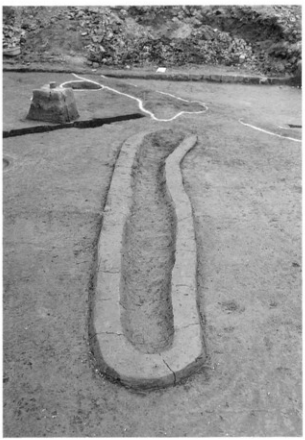
図版10

2区第1面

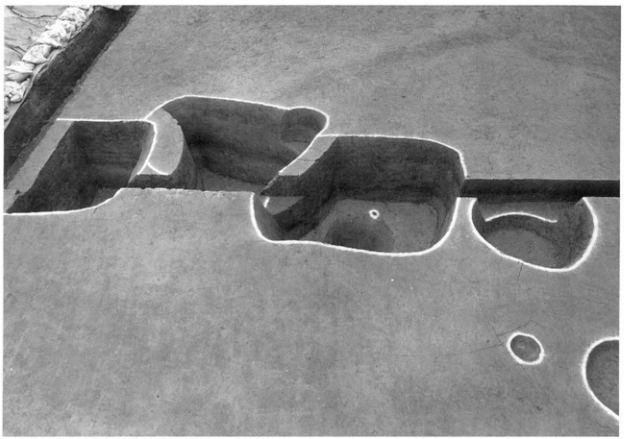


SF06土層（南西より）

SF07土器出土状況（南東より）



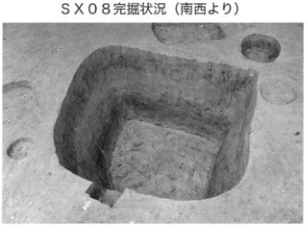
SD04完掘状況（南東より）



SX10・SX09・SX08・SF07（北東より）

SX08完掘状況（南西より）

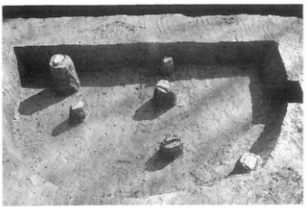
SX13土層（北西より）



SX14完掘状況（南東より）

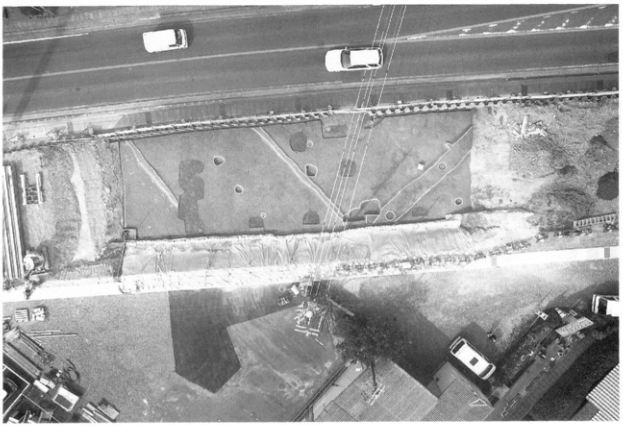
SX18・SX19・SX17（北より）

図版12



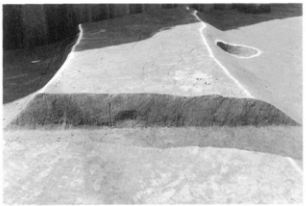
ＳＸ２０土器出土状況（北西より）

鉄製品（435）出土状況



２区第２面

ＳＫ０６完掘状況（東より）

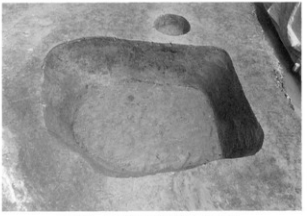


ＳＫ０２土層（南より）

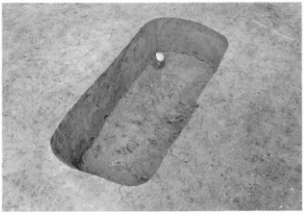
3区・4区第2面

SK02完掘状況（南より）

陶馬（412）出土状況



SX21完掘状況（南西より）

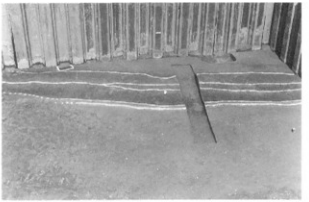


SF01完掘状況（北東より）

図版14

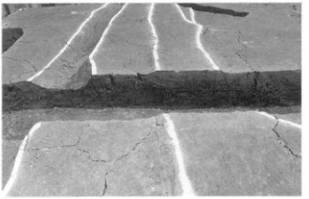
ＳＫ０１完掘状況（東より）

ＳＸ２３完掘状況（南西より）



ＳＫ０３・ＳＤ０２完掘状況（南東より）

ＳＲ０１完掘状況（北東より）



ＳＫ０３・ＳＫ０９・ＳＫ１０土層（南西より）

ＳＲ０１二面風字硯出土状況（北より）

北端部第４面完掘状況（南東より）

ＳＤ０１土器出土状況（南西より）

ＳＰ０４土器出土状況（南東より）

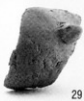
高坏（２）出土状況（南東より）

図版16

出土遺物1

25

30


29

46

63

59

66

78

85

86

71

70

出土遺物２

図版18

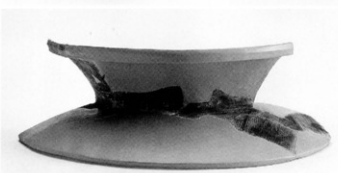
97

98

99

101

102


112

113

115

117

出土遺物３

図版19

118

121

133

122

124

134

128

141

152

158

143

147

148

154

出土遺物4

図版20

160

161

183

185

218

220

223

240

224

226

244

247

出土遺物５

250

259

269 264

265

262

263

327

328

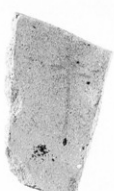
304 310 313

図版22

349

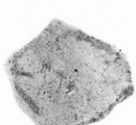
352

350


357

358

353


363

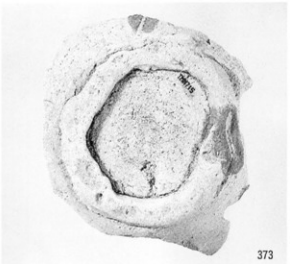
364

365

369

366

出土遺物７


373

374

375

377

376

378

379

388

389

400

403

402

405

407

416

出土遺物８

図版24

412

412

412

415

413

414

417～425

426～430

431～433

436

鉄滓

馬の歯

435

434

出土遺物９

報告書抄録

ふりがな	みやたけのぎわいせき
書名	宮竹野際遺跡
副書名	平成16年度（都）中都原塚線県単独街路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第165集
編著者名	中村雅之　大野勝美　株式会社古環境研究所
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL (054-262-4261代)
発行年月日	西暦2006年1月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 世界測地系	東経 世界測地系	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みやたけのぎわいせき 宮竹野際遺跡	しずおかしすんぷくあおばく 静岡県静岡市葵区 あかばちょう 赤羽町 なかやぶ 字中藪	22222	17－4	34° 43′ 19″	137° 45′ 59″	20041201 ～ 20050531	1,100	中都原塚線県単独街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮竹野際遺跡	散漫地	古墳時代		古式土師器	古代条里型水田の大・小畦畔を検出。出土遺物より、近くに古代官衙関連施設が存在した可能性が高まる。自然科学分析で中世・古代の屋より籾のプラントオパールが検出された。
	水田	奈良・平安時代	大畦畔2条（条里型水田） 小畦畔3条（条里型水田） 自然流路1本 大型土坑23基 土坑11基 溝2条	須恵器（墨書土器を含む） 土師器 灰釉陶器（墨書土器を含む） 西面陽4点・属字陽1点・帯君瓦8点 陽雨3点・上面1点・土錘8点 鉄製品2点　羽口片1点	
		中世	溝3条 畦畔4条	山茶碗 青磁・白磁片 天目茶碗片	
		近世	土坑1基		
	集落跡	奈良・平安時代	掘立柱建物？ 溝1条	須恵器・土師器	4－1区微高地より祭祀遺構・土器埋土

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第165集

宮竹野際遺跡

平成16年度　（都）中部福塚線県単独街路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年1月25日発行

編集・発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
ＴＥＬ　054-262-4261㈹

印　刷　所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
ＴＥＬ　0548-32-0851